

中環状道路整備事業『都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線』に伴う埋蔵文化財発掘調査（5）

筑後國府跡

—第298次発掘調査報告—

令和4(2022)年10月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、福岡県第三位の人口を誇る県南の中核市です。久留米市は、市民が主役のまちづくりを進め、市民の夢や希望が実現する生活空間を作ることにより、市民がこの地に誇りと愛着をもって住み続けたいと思えるまちを創ることを目指しています。その一方で、古くから水路と陸路の要衝だった久留米市には、先人たちの残した文化遺産が数多く残っています。久留米市ではその文化遺産の究明を図りつつ、活用を進めているところです。

今回、本書で報告する筑後国府跡は、飛鳥時代から平安時代にかけて設置された筑後国府の故地です。古代の筑後国の政治経済の中核となった遺跡であり、今日の久留米市のルーツとなった国指定史跡です。筑後国府跡の西部を南北に走る「都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線」建設に先立って、久留米市は平成19年度から発掘調査を実施してきました。

本書は、令和2年度の調査成果を取めた通算5冊目の報告書です。今回の調査では、弥生時代の竪穴建物をはじめ、地業痕跡が良好に残る古代の道路跡、貿易陶磁器が出土した中世の道路跡、近世の墓域、ガラス瓶が出土した昭和初期の廃棄土坑、さらに地震の痕跡など、多種多様な時代の遺構と遺物を発見しました。これらの成果が地域史の究明や普及、史跡を生かした地域振興、久留米の歴史や文化財保護に対する市民の理解などに、幅広く活用されることに貢献できれば幸いです。

なお今回の発掘調査に際して、地域住民と関係者の方々に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和4年10月31日

久留米市教育委員会

教育長 井上 謙介

例 言

1. 本書は都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線建設に先立ち、令和2年度に実施した、筑後国府跡第298次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は久留米市都市建設部道路整備課の依頼を受けて、久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
3. 本書に掲載した発掘調査の略記号はTKH-298、調査番号は202002である。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、西と発掘作業員の中村麻衣、藤本幸子、山田治代、山口誠也が行い、一部を発掘作業員の國武三歳が補助した。遺構配置図は、株式会社CUBIC製「遺構くん cubic」で作成し、土層断面図や遺物出土状況は手測りで作成した。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位はすべて座標北を示す。座標は、平成28年の熊本地震に伴うパラメータ補正を行った。
6. 遺構実測図と土層図の浄書は、西と文化財資料整理員の今村理恵、宮崎彩香、出土品整理作業員の湯川琴美、吉武大輝が「遺構くん cubic」と米国アドビ製の製図ソフト「Adobe Illustrator」で行った。
7. 土層および出土遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、昭和45年）に準拠した。
8. 個別の遺構写真は、一部を江島伸彦が撮影したほかは、西がキャノンEOS 6D Mark IIデジタルカメラを用いて撮影した。空中写真の撮影は、有限会社空中写真企画に委託してドローンで撮影した。写真は掲載にあたり、米国アドビ製の画像編集ソフト「Adobe Photoshop」を用いて西が編集した。
9. 本書に使用した遺構の略記号は、SA-樫列、SD-溝、SF-道路遺構、SI-堅穴建物、SK-土坑、SP-ピット、ST-土墳墓、SX-その他の遺構を示す。
10. 波板状凹凸面の名称は、波板状圧痕や波板状痕跡、波板状遺構がある。本書では、『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』（文化庁文化財部記念物課、平成25年）で用いられている波板状凹凸面を用いた。
11. 遺物実測図と遺物観察表、写真図版の遺物番号は共通である。
12. 遺物実測図は、西と今村、宮崎、出土品整理作業員の江口里織、山元博子、吉武が作成し、「Adobe Illustrator」で浄書を行った。拓本は、出土品整理作業員の井上千恵美、田中千佐子、野口晴香、横井理恵が作成した。
13. 遺物実測図の凡例は、下記のとおりである。
 - ・断面の黒塗りは須恵器、灰色塗りは瓦器、斜線は鉄製品を示す。
 - ・調整の線は、調整の線は、直線「—————」が明瞭な稜線を、間隔の長い破線「—— ———」が不明瞭な稜線を、一点鎖線「- - - - -」が回転ナデを示す。
14. 遺物観察表は、遺物実測図の記述を元に、西が作成した。その凡例は下記のとおりである。
 - ・黒色土器のうち、A類は内黒土器、B類は両黒土器を意味する。
 - ・量法の〔 〕は復元値を、()は残存値を、- は欠損または該当する部位が無いことを示す。

- ・色調は、『新版 標準土色帖』に準拠した。ただし、ガラス製品など『新版 標準土色帖』に該当しない色調がある場合は、日本工業規格「物体色の色名」に準拠した。
- ・胎土の砂粒は、0.5mm未満を微砂粒、1mm未満を細砂粒、1mm以上を砂粒とした。
- ・遺物番号は、久留米市市民文化財部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 202002 000001
 調査番号 登録番号

15. 貿易陶磁器の分類は、『大宰府条坊跡 XV 一陶器分類編一』太宰府市の文化財第 49 集（太宰府市教育委員会、平成 12 年）に拠った。
16. 古瓦の叩きの分類は、『筑後国府跡 一平成 11 年度発掘調査概要一』久留米市文化財調査報告書第 162 集（久留米市教育委員会、平成 12 年）に基づいた。ただし、本書に掲載した古瓦の格子目叩きは、全て前掲書の格子文叩き 2 にあたるので、単に「斜格子文叩き」とした。
17. 遺物写真は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて西が PENTAX K-1 Mark II デジタルカメラで撮影し、「Adobe Photoshop」を用いて編集した。
18. 出土遺物および図面・写真などの記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵保管されている。
19. 調査にあたり、福岡県教育庁文化財保護課の杉原敏之氏と坂本真一氏、九州歴史資料館の小田和利氏（所属は、いずれも当時）には、現地で種々のご教示を賜った。
20. 表紙題字は、原口かすみ（元・久留米市発掘調査整理臨時職員）の揮毫による。
21. 本書の執筆と編集は西が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 令和2～4年度の調査の経過	1
2. 調査の体制	3
II. 位置と環境	5
1. 位置と地理的環境	5
2. 歴史的環境	6
III. 調査の記録	9
1. 調査の目的と経過	9
2. 基本層序	10
3. 検出遺構	10
(1) 弥生時代の遺構	10
(2) 古代の遺構	12
(3) 中世の遺構	25
(4) 近世の遺構	31
(5) その他の遺構	32
4. 出土遺物	33
IV. 総括	73
1. はじめに	73
2. 遺構の変遷について	73
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 都市計画道路3・4・18号合川町津福本町 線事業位置図(1/10,000)	2
第2図 周辺道路分布図(1/25,000)	5
第3図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	7
第4図 筑後国府跡第298次調査遺構配置図(1/200) 折込	8
第5図 筑後国府跡第298次調査主要遺構配置図(1/200) 折込	8
第6図 調査区割図(1/800)	9
第7図 調査区北東部壁面土層図(1/40)	10
第8図 S120実測図・土層図(1/40、1/20)	11
第9図 SK154実測図・土層図(1/40)	12
第10図 SD1・120土層図・SD115断面図(1/20)	13
第11図 SD140・165土層図(1/20)	14
第12図 SD155・156土層図、SD160断面図(1/20)	15
第13図 SD170断面図・土層図、SD190・446・453 土層図(1/20)	17
第14図 SD215土層図(1/20)	18

第15図	S D 365・405・446断面図、S D 190・446・475、 S X 372・373土層図 (1/20、1/30) …………… 19	第30図	出土遺物実測図③ (1/4) …………… 36
第16図	S D 475、S X 372土層図 (1/20) …………… 20	第31図	出土遺物実測図④ (1/4) …………… 38
第17図	S D 365・S F 445実測図・土層図 (1/40、1/20) …………… 折込	第32図	出土遺物実測図⑤ (1/4) …………… 39
第18図	S I 133実測図・土層図 (1/40、1/20) …………… 21	第33図	出土遺物実測図⑥ (1/4) …………… 41
第19図	S K 80・85・241・400実測図・土層図 (1/40) …… 22	第34図	出土遺物実測図⑦ (1/4) …………… 42
第20図	S P 210・375実測図 (1/20) …………… 24	第35図	出土遺物実測図⑧ (1/2、1/4) …………… 44
第21図	S X 125実測図、S X 150土層図 (1/20) …………… 24	第36図	出土遺物実測図⑨ (1/4) …………… 45
第22図	S D 2 実測図 (1/20) …………… 25	第37図	出土遺物実測図⑩ (1/2、1/4) …………… 46
第23図	S D 40・60土層図、S D 50土層図・断面図(1/20) …………… 26	第38図	出土遺物実測図⑪ (1/4) …………… 48
第24図	S D 127土層図・断面図 (1/20) …………… 28	第39図	出土遺物実測図⑫ (1/2、1/4) …………… 49
第25図	S K 14実測図、S K 235実測図・土層図 (1/40) …………… 29	第40図	出土遺物実測図⑬ (1/2、1/4) …………… 51
第26図	S P 35・173実測図、S X 372土層図 (1/20) …… 30	第41図	出土遺物実測図⑭ (1/4) …………… 53
第27図	S T 6 実測図 (1/40) …………… 31	第42図	出土遺物実測図⑮ (1/4) …………… 58
第28図	出土遺物実測図① (1/4) …………… 34	第43図	出土遺物実測図⑯ (1/4) …………… 56
第29図	出土遺物実測図② (1/4) …………… 35	第44図	出土遺物実測図⑰ (等倍、1/2) …………… 62
		第45図	第1～4期主要遺構配置図 (1/400) …………… 74
		第46図	第5～6期主要遺構配置図 (1/400) …………… 76
		第47図	第7～11期主要遺構配置図 (1/400) …………… 78

表 目 次

第1表	合川町津福本町線に伴う筑後国府跡発掘調査一覧表 …… 1	第7表	出土遺物観察表⑥ …………… 68
第2表	出土遺物観察表① …………… 63	第8表	出土遺物観察表⑦ …………… 69
第3表	出土遺物観察表② …………… 64	第9表	出土遺物観察表⑧ …………… 70
第4表	出土遺物観察表③ …………… 65	第10表	出土遺物観察表⑨ …………… 71
第5表	出土遺物観察表④ …………… 66	第11表	出土遺物観察表⑩ …………… 72
第6表	出土遺物観察表⑤ …………… 67	第12表	第298次調査主要遺構の変遷 …………… 73

図 版 目 次

図版1	(1) 第298次調査前全景(北から) (2) 第298次調査区北西部全景(南上空から) (3) 第298次調査区北東部全景(南上空から)	図版2	(1) 第298次調査区南部全景(西上空から) (2) 第298次調査区西部全景(西上空から)
		図版3	(1) 調査地点から北方を望む(南上空から)

- (2) 調査地点から南方を望む(北上空から)
- 図版4 (1) S I 20遺物出土状況(西から)
 (2) S I 20貼床検出状況(南東から)
 (3) S I 20完掘状況(南東から)
 (4) S K 154完掘状況(東から)
 (5) S A 252東部完掘状況(北西上空から)
 (6) S D 1 東部完掘状況(北西から)
 (7) S D 1 西部完掘状況(東から)
 (8) S D 115完掘状況(南東から)
- 図版5 (1) S D 120完掘状況(北から)
 (2) S D 140完掘状況(北西上空から)
 (3) S D 140北端・S D 165土層(南西から)
 (4) S D 165完掘状況(北西から)
 (5) S D 155・156完掘状況(南東上空から)
 (6) S D 160竊出土状況(西から)
 (7) S D 170完掘状況(北西から)
 (8) S D 190・453・446・475完掘状況(北東上空から)
- 図版6 (1) S D 190・446・475、S X 372土層(北から)
 (2) S D 190北端遺物出土状況(東から)
 (3) S D 215北西部完掘状況(南東から)
 (4) S D 215中央部完掘状況(南東から)
 (5) S D 215南東部完掘状況(北西から)
 (6) S D 215土層(北西から)
 (7) S D 405東部土層(東から)
 (8) S F 445礫化面・波板状凹凸面検出状況(北西から)
- 図版7 (1) S F 445波板状凹凸面 P 10土層(南東から)
 (2) S F 445波板状凹凸面竊出土状況(南東から)
 (3) S D 365・S F 445完掘状況(北西から)
 (4) S I 133検出状況(東から)
 (5) S I 133焼土土層(西から)
 (6) S I 133完掘状況(西から)
 (7) S K 80・85完掘状況(北西上空から)
 (8) S K 241検出状況(南西から)
- 図版8 (1) S K 241完掘状況(西から)
- (2) S K 400完掘状況(北東から)
 (3) S P 210遺物出土状況(北から)
 (4) S P 375遺物出土状況(北西から)
 (5) S X 125検出状況(北から)
 (6) S X 125土層(東から)
 (7) S X 150検出状況(南西から)
 (8) S X 150土層(南東から)
- 図版9 (1) S D 2 完掘状況(北西から)
 (2) S D 2 土層(北西から)
 (3) S D 2 遺物・竊出土状況(南東から)
 (4) S D 2・40・60完掘状況(北東上空から)
 (5) S D 40・60南東部完掘状況(南東から)
 (6) S D 40・60北西部完掘状況(南東から)
 (7) S D 40南東部土層(南東から)
 (8) S D 50完掘状況(南東から)
- 図版10 (1) S D 127北部～中央部完掘状況(北西から)
 (2) S D 127南西部完掘状況(北西から)
 (3) S D 127中央部竊出土状況(東から)
 (4) S D 127中央部土層(北西から)
 (5) S K 235完掘状況(北東から)
 (6) S K 235・S D 40北西部土層(南東から)
 (7) S P 35遺物出土状況(北東から)
 (8) S P 173遺物出土状況(南西から)
- 図版11 (1) S X 372・373検出状況1(西上空から)
 (2) S X 372・373検出状況2(北西から)
 (3) S X 372・373北端検出状況(南から)
 (4) S X 372南端土層(北から)
 (5) 近世墓群近景(東上空から)
 (6) S T 5 掘削状況(南西から)
 (7) S T 6 完掘状況(北から)
 (8) S T 8 掘削状況(東から)
- 図版12 (1) S T 9 掘削状況(西から)
 (2) S T 10 掘削状況(南から)
 (3) S T 11 掘削状況(東から)

(4) S T15掘削状況 (西から)	図版24	出土遺物12	
(5) 調査区隣接地の墓石転用石列 (南西から)	図版25	出土遺物13	
(6) S X175埴甕出土状況 (北東から)	図版26	出土遺物14	
(7) 新層群検出状況 (西から)	図版27	出土遺物15	
(8) 地割痕断面 (南東から)	図版28	出土遺物16	
図版13	出土遺物1	図版29	出土遺物17
図版14	出土遺物2	図版30	出土遺物18
図版15	出土遺物3	図版31	出土遺物19
図版16	出土遺物4	図版32	出土遺物20
図版17	出土遺物5	図版33	出土遺物21
図版18	出土遺物6	図版34	出土遺物22
図版19	出土遺物7	図版35	出土遺物23
図版20	出土遺物8	図版36	出土遺物24
図版21	出土遺物9	図版37	出土遺物25
図版22	出土遺物10	図版38	出土遺物26
図版23	出土遺物11		

I. はじめに

1. 令和2～4年度の調査の経過

本書に掲載した発掘調査は、中環状道路整備事業「都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線」に伴う事前の発掘調査である。津福本町から国道210号を結ぶ通称「中環状線」の整備事業は、久留米市都市建設部道路課（現・道路整備課）を事業主体として実施されている。十三部交差点から国道210号までの約0.8kmの区間は、周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡を横切するため、久留米市文化観光部（平成23年度以降は市民文化部）文化財保護課は、第1表のとおり平成19年（2007）から発掘調査を実施してきた。発掘調査に至る経緯の詳細は『筑後国府跡』（久留米市文化財調査報告書第267集、平成20年）に、令和2年度までの調査の経過は第1表に示した報告書に掲載したので参照願いたい。本章では、本書に掲載した令和2・3年度の発掘調査と整理作業、および令和4年度の整理作業と報告書作成の経過について述べる。

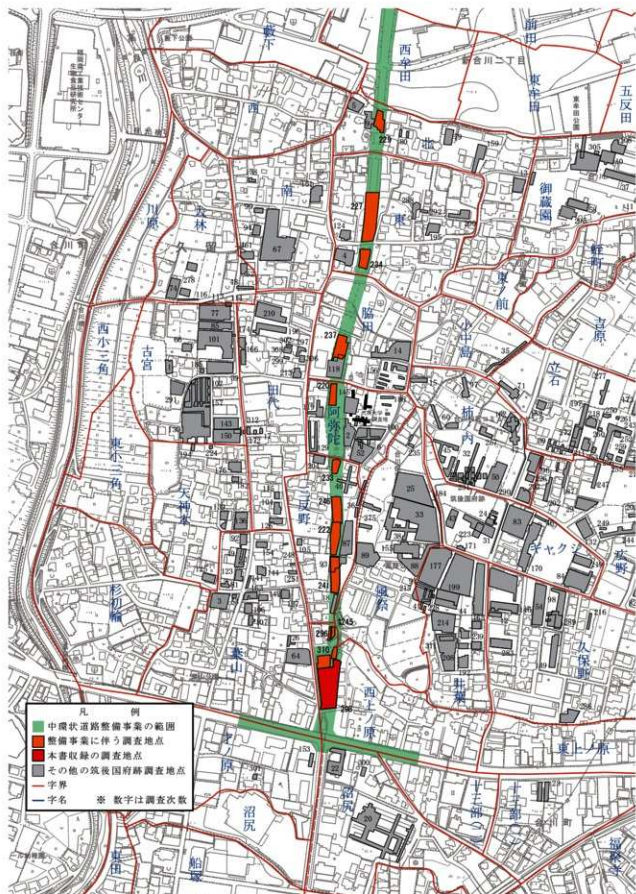
令和2年度は、整理作業と試掘確認調査、筑後国府跡第298次調査を実施した。整理作業は、令和2年（2020）4月1日から令和3年（2021）3月31日まで西町文化財整理事務所で行った。試掘確認調査は6月10日と7月20日に行い、合川町65-1・69-1・70で遺構を確認した。筑後国府跡第298次調査は、令和2年5月7日から12月10日まで実施した。

令和3年度は、整理作業と筑後国府跡第310次調査を実施した。整理作業は、令和3年4月1日から令和4年（2022）3月31日まで、久留米市埋蔵文化財センターと西町文化財整理事務所で行った。筑後国府跡第310次調査は、令和3年4月14日から7月7日まで実施した。

令和4年度は、整理作業と報告書作成を令和4年4月1日から令和4年10月31日まで久留米市埋蔵文化財センターと西町文化財整理事務所で行った。令和2年度の調査成果を収めた本書を刊行した。

第1表 合川町津福本町線に伴う筑後国府跡発掘調査一覧表

調査年度	調査回数	調査番号	調査期間	地区名	調査面積	担当者	久留米市文化財調査報告書
H19	第220次調査	200713	20070717～20070829	阿赤陀	360㎡	神保公久	第267集
H19	第222次調査	200719	20070910～20080228	北	853㎡	神保公久	第295集
H20	第227次調査	200814	20080717～20081204	東	1,100㎡	神保公久	第315集
H20	第229次調査	200822	20081114～20090213	東	322㎡	白木 守	第295集
H21	第233次調査	200905	20090526～20090602	三反野	163㎡	水原道範	第295集
H21	第234次調査	200910	20090730～20091013	東	340㎡	神保公久	第315集
H21	第237次調査	200915	20091022～20100118	脇田	380㎡	神保公久	第315集
H22	第241次調査	201010	20101004～20110318	三反野	377㎡	神保公久	未報告
H23	第245次調査	201106	20110822～20110914	風祭	113㎡	神保公久	第435集
H23	第246次調査	201109	20110907～20111128	三反野	400㎡	江頭俊介	第435集
R 元	第296次調査	201909	20190911～20191011	西上ノ原	150㎡	江頭俊介	第435集
R 2	第298次調査	202002	20200507～20201210	西上ノ原	1,073㎡	西 拓巳	本書
R 3	第310次調査	202104	20210414～20210707	西上ノ原	369㎡	江頭俊介	未報告



第1図 都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線事業位置図(1/10,000)

2. 調査の体制

本書に掲載した第298次調査に関する、令和2～4年度の体制は下記のとおりである。

【令和2年度：試掘確認調査、第298次調査】

調査委託：久留米市 都市建設部道路整備課

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：久留米市 市民文化部

文化財保護課

教育長：井上 謙介

部長：竹村 政高

次長：西村 信二

課長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主査：水原 道範

事務主査：小澤 太郎

事前確認担当：熊代 昌之

庶務担当：市村久美子

滔谷 綾（任期付職員）

発掘調査担当：西 拓巳

発掘作業員

青木佐智子、秋永 絹子、案納 哲夫、石橋 康子、大倉隆太郎、居石 寿智、鐘ヶ江 清、
蒲池 稔、川原 初美、國武 三歳、久保田英嗣、合戸 喬一、進上 裕永、高尾 春代、
高松 登、田中 樹子、田中とし子、中村 麻衣、野村 泰夫、原口 貞子、平田 広之、
日比生 勝、藤木 幸子、堀江 俊文、本田 正好、松尾 朱美、丸山 幸、溝口 輝男、
柳 鈴子、矢野 崇徳、山口 誠也、横山 満浩、渡辺しげ子

【令和3年度：整理作業】

調査委託：久留米市 都市建設部道路整備課

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：久留米市 市民文化部

文化財保護課

教育長：井上 謙介

部長：竹村 政高

次長：深堀 尚子

課長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主査：水原 道範

事務主査：小澤 太郎、江島 伸彦

庶務担当：市村久美子

滔谷 綾（任期付職員）

整理担当：西 拓巳

今村 理恵（文化財資料整理員）

宮崎 彩香（文化財資料整理員）

【令和4年度：整理作業、報告書作成】

調査委託：久留米市 都市建設部道路整備課

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：久留米市 市民文化部

教育長：井上 謙介

部長：竹村 政高

次長：深堀 尚子

文化財保護課 課長：水島 秀雄

課長補佐：田中 健二

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主査：小澤 太郎

事務主査：江島 伸彦

埋蔵文化財センター担当：水原 道範（再任用職員）

庶務担当：市村久美子

本田 岳秋、辻 貴子

整理・報告書作成担当：西 拓巳

今村 理恵（文化財資料整理員）

宮崎 彩香（文化財資料整理員）

出土品整理作業員

令和2年度

石崎 玲子、井上千恵美、江口 里織、大津山恵津子、椛島かおり、古賀 貴子、

田中千佐子、野口 晴香、溝上 直子、湯川 琴美

令和3年度

湯川 琴美

II. 位置と環境

1. 位置と地理的環境

久留米市は九州の北部、福岡県のほぼ中央に位置する。その市域は、九州一の大河筑後川の中下流域に沿っており、南北16km、東西32kmを測る。

筑後川は熊本県阿蘇郡瀬の本高原に端を発し、山岳部を北流し玖珠川と合流して、うきは市と大分県日田市の間にかかる夜明ダムを経て平野部に出る。夜明ダム以西は中流域で、平野部では佐田川、小石原川、大刀洗川、巨瀬川、宝満川、秋光川などが合流しながら西流し、久留米市北西部の宝満川との合流地点で流れを南西方向に変える。久留米市安武町の筑後大堰より以西は下流域となり、佐賀県と県境を成す。流域面積は2,860km²を測り、九州最大の平野である筑紫平野を形成している。筑紫平野の南側には、水縄断層によって形成された耳納山地が連なり、その西端には、標高312mの高良山が平野部に突出している。対岸には脊振山地から派生する朝日山などの丘陵が平野に突出し、筑紫平野の中央、久留米市市街地周辺で地峡を成している。

筑後国府跡は久留米市街地の東部、高良山の麓の中段段丘から低段位段丘に、合川町、朝妻町、御井町一帯の東西1kmに広がる。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

2. 歴史的環境

周辺での人類の足跡は、旧石器時代までさかのぼる。ヘボノ木遺跡でナイフ形石器、市ノ上北屋敷遺跡でナイフ形石器や搔器、野口遺跡でナイフ形石器や台形様石器、細石核などが出土したほか、縄文時代の包含層からの出土だが、横道遺跡で細石刃が出土した。縄文時代には、横道遺跡で草創期まで遡る土器が出土したほか、古宮遺跡や大林遺跡、上遺跡、ヘボノ木遺跡、山下遺跡、水洗遺跡、篠田遺跡、吹上遺跡、安国寺遺跡、松ヶ本遺跡、野口遺跡、大園遺跡で、早期から晩期の土器や石製品が出土した。また、横道遺跡では早期の土坑や集石遺構、朝妻遺跡と神道遺跡で埋壘、西小路遺跡とヘボノ木遺跡で堅穴建物と土坑群、篠田遺跡と野口遺跡で土坑、市ノ上東屋敷遺跡で落とし穴状遺構が確認され、高良山の麓から筑後川にかけて集落があったことを示唆する。出土遺物では、野口遺跡で出土した前期の土器が野口式土器（野口・阿多式土器）として知られるほか、西小路遺跡で出土した石棒や石冠は、精神文化や東日本との交流を考える上で注目できる。

筑後国府跡一帯には、弥生時代の遺跡も広い範囲で分布している。早期には、ヘボノ木遺跡で夜白式土器の埋設遺構が検出されている。中期後半には、堅穴住居や祭祀土坑からなる集落遺跡が大林遺跡や久保野遺跡、朝妻遺跡、ヘボノ木遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡に分布する。二本木遺跡では集落に加え、長さ100 m以上の大溝や甕棺墓が見つかり、大規模な集落の存在が示唆される。高良川を挟んだ市ノ上北屋敷遺跡では、環状に柱穴が並ぶ中期前半の特殊な遺構や、箱式石棺墓、甕棺墓、弥生時代後期の土器などが見つかり、隣接する集落の存在を示す。さらに、国史跡の安国寺甕棺墓群は63基の甕棺墓と4基の土坑墓、12基の祭祀土坑からなる一大墓域で、同時期の大規模な集落の存在が想定できる。後期後半には、古宮遺跡と大林遺跡で長さ110 m以上のV字溝を伴う堅穴住居群と甕棺墓が検出され、鏡片、鉄鏃などが出土した。同時期には、御蔵園遺跡や朝妻遺跡、ヘボノ木遺跡でも堅穴住居が見られ、朝妻遺跡では舶載鏡の破鏡、ヘボノ木遺跡では楽浪系土器や銅鏡片、素環頭刀子が出土した。台地西端の大規模な集落の東方に、中郷遺跡や朝妻遺跡、ヘボノ木遺跡といった比較的小規模な集落が点在する様子が窺える。

古墳時代初頭に築かれた祇園山古墳は、高良山の山裾に立地し、筑紫平野を見渡す位置にある。一辺約23 mの方墳であり、墳丘中央に箱式石棺の主体部を持つ。副葬品や人骨等は発掘調査より前に失われていたが、高良大社に伝世する三角縁神獸鏡は、祇園山古墳の出土と考えられている。この古墳の墳丘裾には、数十基の甕棺墓や石棺墓を伴い、古墳の築造を契機として造られたと墳墓群と見られる。同時期には方墳群である福聚寺古墳群も築かれるなど、周辺の丘陵上に古墳が分布していた様子が窺える。また、市ノ上東屋敷遺跡では堅穴建物のほか、方形区画溝が検出されており、古墳時代前期の豪族居館の環濠という指摘がある。筑後国府跡では、三反野地区で古墳時代後期の堅穴建物群が見つかり、国府城の中央に流れる通称「東隈大溝」と呼ばれる流路から、7世紀前半の須恵器が一定量出土した。野口遺跡でも古式土師器が出土しており、古墳と同時期の集落の存在を窺わせる。

古代に入ると、高良山に神籠石式山城が築かれる。その築造年代は明らかではないが、白村江の



第3図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

戦いにより対外防衛の必要に迫られた7世紀頃に築かれたと考えられている。筑後国の成立も同時期と考えられており、『日本書紀』持統天皇4年条(690)では、大伴部博麻婦国の記事で「九月丁酉…軍丁筑紫国上陽群郡大伴部博麻」と「十月乙丑。詔軍丁筑後国上陽群郡大伴部博麻」という記述がある。天武天皇12～14年(683～685)の国境画定事業に伴い成立したと考えられている。高良山神籠石の麓にあたる高良川沿いの丘陵西端では、高良山神籠石と同時期に、大形建物や幅6m、深さ3mの断面V字状の大溝が検出されており、国府設置前の公的施設(いわゆる「前身官衙」とされている。前身官衙は7世紀末までに成立した筑後国の国府に継承されたとみられ、古宮地区には築地塀を伴う建物群がみられる。

筑後国府跡や神道遺跡、山川前田遺跡では、7世紀代に比定される断層や噴砂痕が確認されている。『日本書紀』卷第二十九には、天武天皇7年(678)12月条に「筑紫國、大きに地動る」という記述がある。これらの地震痕跡は、この「筑紫地震」の影響によると考えられており、耳納山地北麓の水縄断層を震源とする地震があったことが明らかになっている

筑後国府は、7世紀末から12世紀後半にかけて古宮地区から阿弥陀地区、朝妻地区、そして横道遺跡を三遷しており、310次を越える発掘調査から、古代の筑後国における政治経済の中心的な役割を担ったことが明らかになっている。国府城で出土した越州窯系青磁や緑釉陶器の香炉蓋、複数

の出土例があるイスラム陶器といった陶磁器に加え、「守篋」と書かれた墨書土器の出土も、これを裏付ける。筑後国府跡周辺に目を向けると、山下遺跡では7～9世紀の溝や土坑から、緑釉陶器の香炉蓋や複数の越州窯系青磁碗が出土しており、『高良記』に登場する在国司居屋敷との関連が指摘されている。ヘボノ木遺跡では、8世紀中頃～9世紀前半に四面廂建物と八脚門、側溝を伴う回廊状遺構が造営される。これらの遺構は数回の建て替えが確認されており、その性格は御井郡衙とする説と、寺院とする説がある。同時期の集落遺跡は、ヘボノ木遺跡の北東部に7世紀後半～8世紀中頃の竪穴建物群が分布し、久保野遺跡や山下遺跡、神道遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡、大園遺跡でも8～9世紀の掘立柱建物や竪穴建物、吹上遺跡で10～11世紀の掘立柱建物が検出されるなど、広範囲に集落遺跡が分布する。また、西小路遺跡では方形区画溝を伴う10～11世紀の掘立柱建物群が検出されており、屋敷の存在が示唆される。

筑後国府跡からヘボノ木遺跡、一丁野屋敷遺跡、野中上ノ原遺跡にかけては、道路遺構も検出されている。国府城の西部を南北に走る道路は、一丁野屋敷遺跡や野中上ノ原遺跡を経て、筑後国分寺・国分尼寺を結び、野中町や諏訪野町を経て肥後国に至る西海道の官道の一部と考えられている。この官道の他にも、国府城を東西に走り、ヘボノ木遺跡で北方と東方の二手に分かれる道路遺構が見つかった。前者は大宰府へ向かう推定駅路、後者は山本・竹野・生葉郡へ向かう伝馬道とされている。

11世紀末に国府が朝妻遺跡から横道遺跡に移転したことに伴い、主要道も高良山麓の街道（後の薩摩坊律街道）へ移ったと考えられている。ヘボノ木遺跡の伝馬路は11世紀まで存続するが、12世紀には井戸や土坑、土壇墓が点在するのみとなる。隣接する西小路遺跡でも同様に土壇墓が点在するだけだが、山下遺跡では12世紀の溝や土坑が検出されており、貿易陶磁器が出土した。筑後国府跡でも、大林地区や葉山地区、立石地区、上地区などで12～15世紀の方形区画溝や土壘、井戸、土壇墓が分布しており、下見遺跡の13世紀の館跡、野口遺跡の13世紀の溝や井戸、大園遺跡の13～14世紀の大溝や井戸と共に、丘陵から低地にかけて居館や集落が点在したことを示唆する。「草野文書」にある弘安3年（1280）6月8日付『藤原永基談状』には、高良御宮在国司職に「枝光村在家井田畑等 但田地者、当社理修分封田也」とある。『高良玉垂宮神秘書』にも、高良山の神事に関わる集落名及び代表者とみられる「エタミツ」の名がみえ、13世紀には枝光村が成立していたことが窺える。高良山の西麓では、二本木遺跡で10～11世紀に遺構が増加し、麓遺跡では12世紀後半の方形館の周溝が検出されており、街道の下限を示す。12～13世紀には、篠田遺跡や二本木遺跡、岩井川遺跡、安養寺境内遺跡、麓遺跡、日出原遺跡、日出原南遺跡、高良山大祝邸跡、高良山大官司邸跡で溝や井戸、地下式坑などの土坑が多数検出された。街道沿いや高良大社の門前に、今日の御井町の前身にあたる集落があったことが窺える。中世末期の『高良玉垂宮神秘書』には、高良社の宮座である「十二の乙名」に枝光の名が見え、御神幸では日出笠役を分担していたことが記されている。また、国府城を東西に貫く道路を示すとみられる「タハタノヨコミチ」という記述があり、国府城が田園風景に変わっていたことが示唆される。

III. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

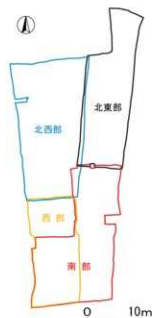
第298次調査は、試掘確認調査で検出した遺構の分布と性格の把握を確認するために実施した。排土置き場と駐車場の確保や、発掘調査途中で南隣地にも遺構が分布することが明らかとなったため、調査は第6図のとおり、調査区を北東・北西・西・南の四区に分けて実施した。対象面積1,310㎡に対し、調査面積は1,073㎡である。

令和2年5月7日に調査器材を搬入して、重機で調査区北東部の表土剥ぎを開始した。地表下約0.4～0.6mで遺構面に達し、9日まで表土剥ぎを行った。5月11日から壁面清掃と遺構検出を始め、翌12日から遺構掘り下げと測量、写真撮影などの記録作業に入った。新型コロナウイルス（COVID-19）に伴う分散出勤や発掘調査作業員の制度変更、さらに梅雨入りもあって進捗は緩やかで、全景の撮影は6月24日にドローンを用いて行った。撮影後、追加の掘削と記録作業に入ったが、7月に入る第6図と梅雨前線が長期にわたり九州に停滞したことで豪雨が相次いだ。特に7月7・8日の豪雨は、合川町を含む久留米市内各地で道路の冠水や住宅の浸水を招いたが、調査地点は比較的高台にあったことから冠水を免れた。追加の記録作業は7月17日に完了し、週休を挟んだ7月20日から22日まで、重機で調査区の北東部と北西部を反転した。

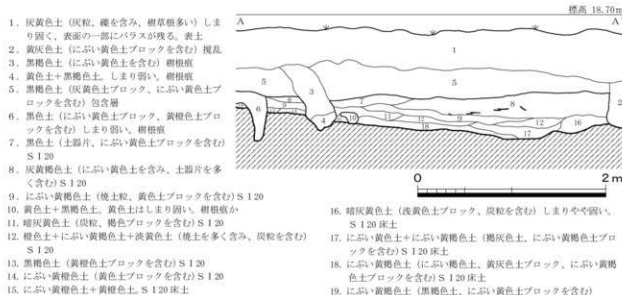
調査区北西部は7月30日から壁面清掃と遺構検出を始めたが、7月28日の梅雨明けと同時に猛暑日が続く、しかも発掘調査件数の多さで現場作業員の人数が限定されたことから、遺構検出に時間がかかった。8月11日から遺構掘削と記録作業を始めたが、8月後半に入ると最高気温が40℃に肉薄する酷暑が連日続き、熱中症対策から作業時間を短縮せざるを得なかった。9月に入っても、連日30℃以上の残暑や台風9・10号の接近、秋雨の合間に作業を行う日々が続く、全景写真は10月3日にドローンで撮影した。撮影後、10月6日に調査区北西部を埋め戻した。

調査区南部は10月6日にアスファルトを剥がし、10月8日と9日に表土剥ぎを行った。10月12日に現場作業員を投入して遺構検出を行い、14日から遺構掘り下げと記録作業に入った。一時減少した現場作業員が戻ってきたことや、10月に入りようやく残暑が収まったことから作業は順調に進み、全景写真は11月12日にドローンで撮影した。撮影後、追加の掘削と記録作業を行い、11月13日から15日まで、調査区南部と西部を反転した。

調査区西部は11月17日に重機で表土剥ぎを行い、同日午後現場作業員を投入して遺構検出を行った。翌11月18日から遺構掘り下げと記録作業に入り、全景の撮影は12月2日にドローンで行った。撮影後、追加の完掘と記録作業を経て、12月7日に調査区の埋め戻しを始めた。12月8日に埋め戻しを完了させた後、12月10日に器材の撤収を完了し、現地での作業を完了した。



第6図 調査区割図 (1/800)



第7図 調査区北東部壁面土層図（1/40）

2. 基本層序

調査地点の現況は更地だが、以前は中央部が駐車場だったほかは住宅が並んでいた。調査区北東部（第7図）および北西部（第11・12図）では、地表を①炭粒や瓦礫、バラスを含み、しまりが固い灰黄色の表土が0.1～0.6 m覆い、北西部ではその直下に②砂利や浅黄色土ブロック、土器片を含む黄褐色の整地とみられる層が0.1～0.2 m見られる。調査区の北東端や中央部では、さらに③灰黄色土ブロックやにぶい黄色土ブロック、土器片を含む締まりの弱い黒色土の包含層を0.1～0.4 m確認した。近世墓や近代以降の攪乱は包含層に後出する。これらの黄褐色土や包含層の直下、地表下0.3～0.9 m、標高17.6～18.4 mで地山上面に達する。

遺構は地山上面で検出した。地山は、標高17.8～18.1 mから上層がにぶい黄褐色土、下層が明褐色土や黄色橙色土、黄色土で、黄色土は砂利を多く含む。場所によっては、上層と下層の間に浅黄色土や明黄褐色土の層が0.1～0.2 mみられた。

3. 検出遺構

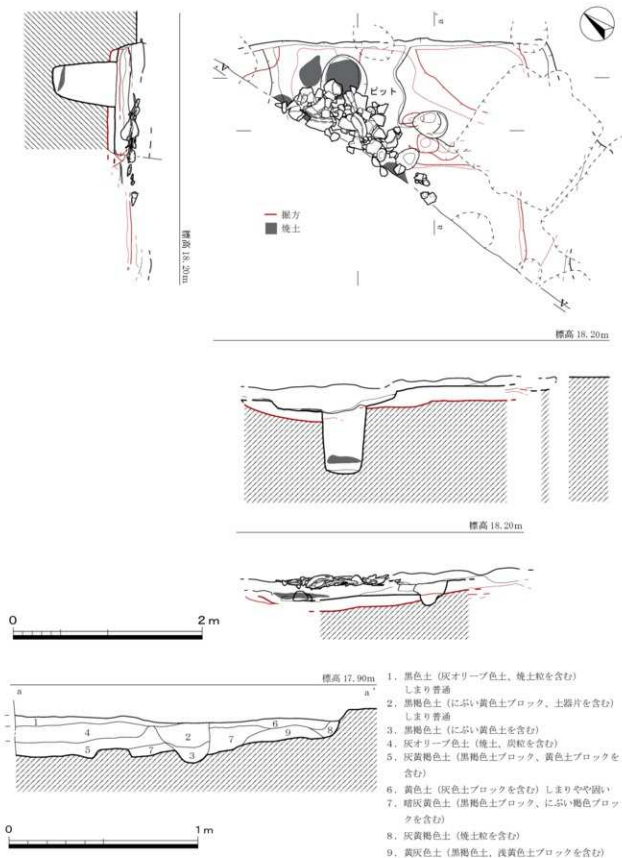
検出した主な遺構は、弥生時代の竪穴建物1基と土坑1基、古代の柵列1条と溝16条、道路遺構1条、竪穴建物1基、土坑4基、ピット3基、波板状凹凸面1基、硬化面2基、中世の溝5条と土坑2基、ピット2基、硬化面2基、近世の土壇墓8基、その他の埋甕1基、地震痕跡である。以下、年代順に述べる。

（1）弥生時代の遺構

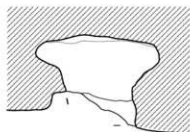
竪穴建物

S I 20（第7・8図、図版4）

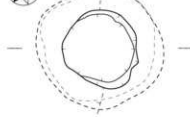
調査区北東部壁際に検出した遺構である。検出したのは遺構の南東隅で、大半は調査区外に及び、土壇墓やピットが後出する。主軸はN-38°-Wで、長軸3.40 m、短軸2.55 mを測る。遺構の隅に深さ0.15 mの段を有し、上端から深さ0.31 mで硬化面に至り、さらに11 cm掘り込まれる。柱穴は



第8図 S I 20 実測図・土層図 (1/40、1/20)



W00'81 塚跡



標高 18.00m



1. 黒色土 (黒褐色土、黄色土ブロックを含む) しまり普通、樹根痕
2. 黒褐色土 (黄色土ブロックを含む)
3. 灰色土 (黄色土を含む)
4. オリーブ黒色土 (黄色土ブロックを含む)
5. 暗灰黄色土 (黄色土ブロック、黒色土ブロックを含む)
6. 灰色土～黒褐色土 (黄色土ブロックを含む) しまり強い
7. にぶい黄褐色土 (黄色土ブロックを含む)
8. にぶい黄褐色土 (黄色土を含む)
9. 黄灰色土 (黄色土ブロックを含む)

第9図 SK154実測図・土層図 (1/40)

確認できなかったが、東辺際に直径0.50～0.58 m、硬化面から深さ0.72 mのビットがあり、焼土を検出した。埋土は土層図のとおりで、硬化面から上層は締まりの弱い黒色土が主体で、硬化面から下層は締まりが強い黄褐色土が主体である。遺物は、弥生土器の大甕や甕、短頸壺、高環、鉢、器台、炭化材が出土した。

土坑

SK 154 (第9図、図版4)

調査区北西部、住宅の入口だった斜面で検出した遺構である。SD 155が後出する。口径0.69～0.81 mに対して、壁面は直径1.28～1.36 m、底面は直径1.12～1.34 mを測り、フラスコ状の断面を有する。深さは最大で0.96 mを測る。土層は第9図のとおりで、上層は黄色土を含む黒色系の埋土、下層は黄色土を含む黄褐色系の埋土が占める。出土遺物は無い。

(2) 古代の遺構

掘列

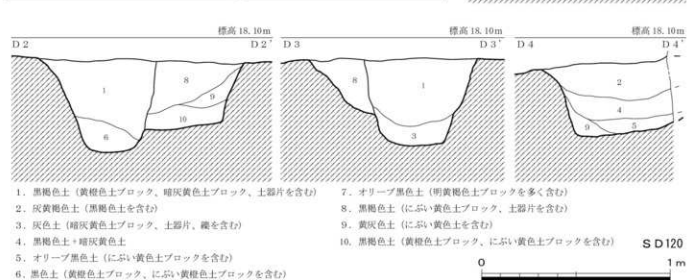
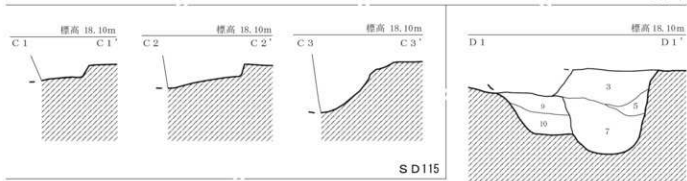
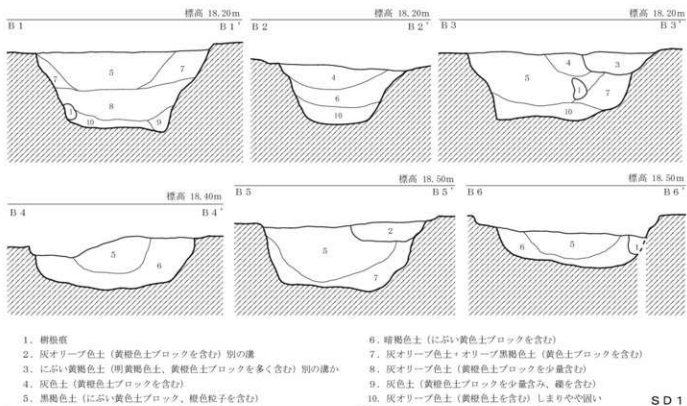
SA 252 (第5図、図版2・4)

調査区南東部から中央部南寄りて検出した遺構である。多数のビットが南北9.4 m×東西15 m、幅0.8～1.5 mにわたり分布する。主軸は南北方向がN-16°-W、東西方向がN-77°-Wで、東西方向はSD 365・405やSF 445に並走する。ビットの深さは0.16～0.98 mで、攪乱やSD 170・190に削平される。埋土はいずれも、黄色土ブロックを含むしまりの弱い黒褐色土や黒色土で占められる。遺物は、弥生土器の甕や土師器の坏と皿、埴、甕、黒色土器A類の埴、須恵器の甕や壺、縄目文叩きの平瓦や丸瓦、焼成粘土塊や壁土らしき破片が出土した。

溝 (第4図、図版1)

SD 1 (第5・10図、図版4)

調査区東部中央から西部を横切る溝である。検出したのは25.4 mで、東端は調査区外に延び、西端は攪乱に削平される。SD 140やSK 241に後出し、攪乱やSD 120・127に削平される。走行方位はN-31°-WからN-82°-Eで、調査区中央部北西寄りて緩やかに屈曲する。溝の断面は角の丸い逆台形状やU字状を呈し、上端幅0.71～1.25 m、下端幅0.39～0.71 m、深さは最大で0.43 mを測る。埋土は、灰色系と褐色系の埋土が占める。出土遺物は、土師器の坏や皿、甕、黒色土器A類の埴、須恵器の坏や鉢、甕、弥生土器の甕の破片、炭化材である。



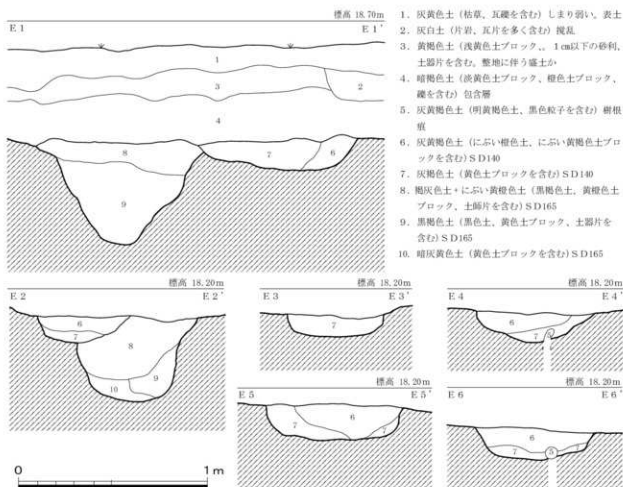
第10図 SD 1・120土層図、SD 115断面図 (1/20)

SD 115 (第5・10図、図版4)

調査区西端壁際で検出した溝である。走行方位はN-5~9°-Wで、遺構の西半が調査区外に及ぶ。検出長は9.9mで、北端は掘乱に、南端はSD 120に削平される。上端幅は最大で0.41m、下端幅は最大で0.38mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは北端で0.05mだが、南に向かって深くなり、最大で0.28mを測る。埋土は、にぶい褐色土や鉄分を含む褐灰色土である。遺物は、土師器の坏蓋や埴、甕の細片、須恵器坏の底部、粘土塊が出土した。

SD 120 (第5・10図、図版1)

調査区西部で検出した溝である。北端はSD 127、南端はSD 215が後出する。検出したのは18.8mで、走行方位はN-3~9.5°-Eを測る。上端幅は0.76~1.15mを測る。底部は深さ0.3~0.4mに段を有しており、深さは最大で0.50mを測る。埋土は土層図のとおりで、黒色系や黄色系の埋土が占める。また、堆積状況からも掘り返された状況が窺える。出土遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕、黒色土器A類の埴、須恵器の壺や甕、斜格子文叩きや縄目文叩きスリ消しの丸瓦や平瓦、緑釉・灰釉陶器の碗などの細片、貿易陶磁器の青磁碗の細片、土鍾や焼成粘土塊、弥生土器の細片、黒曜石の破片である。



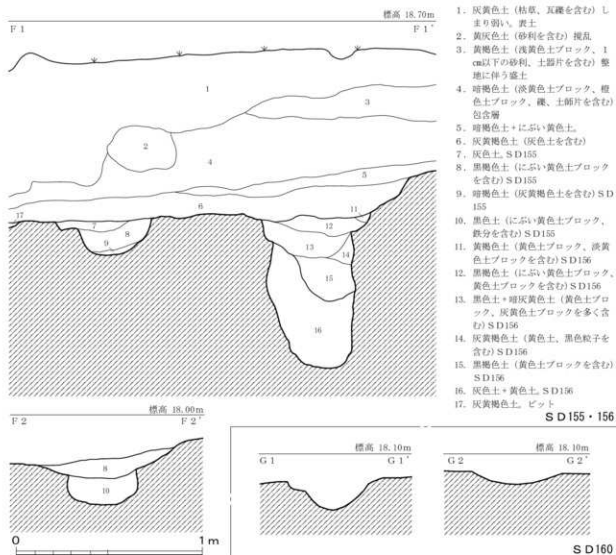
第11図 SD 140・165土層図 (1/20)

SD 140 (第5・11図、図版5)

調査区北西部を走る溝である。走行方位は $N-5\sim 8^{\circ}-E$ で、緩やかに蛇行する。検出長は25.6mで、北端は調査区外に及ぶ。SD 165やS I 133に後出し、SD 1・127・160に後出するほか、延長上に位置するSD 190とは一対の溝とみられる。断面は角の丸い逆台形状を呈し、上端幅0.52~0.96m、下端幅0.32~0.71m、深さは最大で0.39mを測る。底面の標高は、地形に沿い南に向かって減じる。埋土は土層図のとおりで、灰黄褐色土と灰褐色土で二分される。遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕、黒色土器A類の埴、須恵器の壺や甕、緑釉・灰釉陶器の碗などの細片、貿易陶磁器の青磁碗の細片、斜格子文叩きや縄目文叩きスリ消しの丸瓦や平瓦、焼成粘土塊や弥生土器の細片が出土した。

SD 155 (第5・12図、図版5)

調査区北西隅で検出した溝である。走行方位は $N-12\sim 24^{\circ}-W$ で、緩やかな曲線を描く。検出したのは6.6mで、北端は調査区外に及び、南端はSD 1・120・127に削平される。上端幅0.33



第12図 SD 155・156土層図、SD 160断面図 (1/20)

～0.66 m、下端幅0.14～0.32 mを測り、溝の北部に向かって幅が細くなる。深さは最大で0.28 mを測る。埋土は灰色土や暗褐色土、黒褐色土で、上層の堆積状況から掘り返しが示唆される。出土遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕、黒色土器A類の埴、須恵器の甕や壺、弥生土器の細片である。

SD 156 (第5・12図、図版5)

SD 155と同様に、調査区北西隅で検出した溝である。北端は調査区外に延び、南端はSD 155が後出する。検出長は2.7 mで、走行方位はN-8°-Wである。溝の断面はU字状を呈し、上端幅0.19～0.63 m、下端幅0.16～0.24 mを測る。深さは溝の南端で0.23 mだが、北に向かって段状に深くなり、調査区壁面で0.83 mを測る。埋土は、黒褐色土と黄褐色土や灰色系の埋土が占め、掘り返した痕跡がみられる。遺物は、土師器の坏や埴の底部、須恵器の甕の胸部が出土した。

SD 160 (第5・12図、図版5)

調査区北部中央で検出した溝である。SD 1・120に後出する。走行方位はN-17°-Wで、長さ3.82 mを測るが、溝南端の延長上にもピット群が列状に検出された箇所があり、南方になお延びる可能性がある。溝の断面は角の丸い逆台形を呈するが、溝の北端と中央にピット状のくぼみがある。上端幅は0.46～0.58 m、下端幅は0.33～0.51 mで、深さは溝の部分が最大で0.12 m、くぼみまで含むと最大で0.23 mを測る。出土遺物は、土師器の埴や甕、黒色土器A類の埴の底部片、縄目文叩きと縄目文叩きスリ消しの平瓦各1点のみである。

SD 165 (第5・11図、図版5)

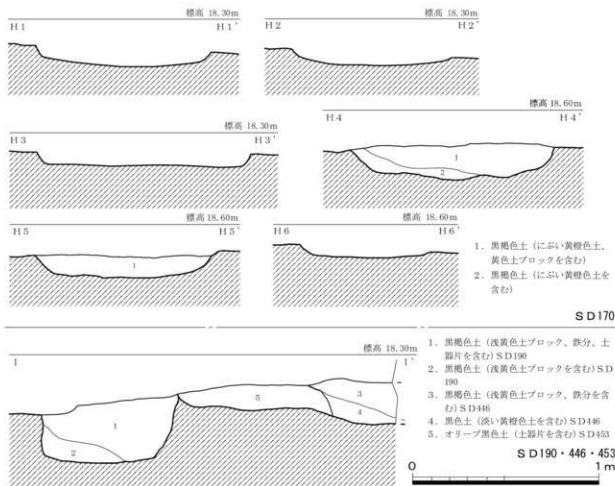
調査区北西部壁際で検出した遺構である。遺構の大半は調査区外におよび、SD 140が後出する。検出したのは2.28 mのみで、走行方位はN-18°-Wである。断面は、逆台形状からU字状を呈し、上端幅は最大で1.08 m、下端幅は最大で0.50 mを測る。底面は複数の段を有し、最大で0.54 mを測る。埋土は土層図のとおりで、褐色土とにぶい黄橙色土からなる上層と、主に黒褐色土からなる下層で二分される。遺物は、土師器の坏や小皿、埴、甕、須恵器の甕、斜格子文叩きなどの平瓦、滑石製石鍋の破片が出土した。

SD 170 (第5・13図、図版5)

調査区中央部から南東隅を走る溝である。検出長は33.8 mで、走行方位はN-6～12°-Wを測り、緩やかに蛇行する。掘乱に削平されるほか、調査区南東部の2ヶ所で途切れる。断面は、逆台形状からU字状を呈し、上端幅は0.67～1.34 m、下端幅は0.55～1.23 mを測る。底面は複数の段を有し、深さは最大で0.19 mを測る。埋土は、にぶい黄橙色土ブロックを含む黒褐色土で占められ、黄色土ブロックの有無で二分できる場所がある。出土遺物は、土師器の坏蓋や坏、皿、埴、甕、黒色土器A類の坏と埴、須恵器の甕や壺、縄目文叩きと縄目文叩きスリ消しの平瓦、弥生土器の甕である。

SD 190 (第5・13・15図、図版5・6)

調査区南西部で検出した遺構である。SD 140の延長上に位置し、同一遺構の可能性はあるが、埋土や深さが大きく異なるため、別個の溝として報告する。南端は掘乱に削平され、検出したのは25.1 m、走行方位はN-12°-EからN-13°-Wと蛇行する。北部でSD 215、南部でSD 446

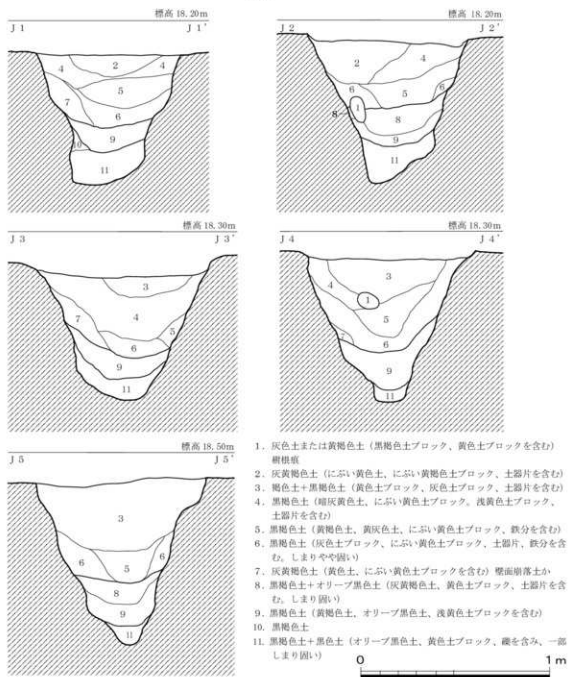


第13図 SD170断面図・土層図、SD190・446・453土層図 (1/20)

が後出するほか、SD 361・405やSF 445などに後出する。断面はやや歪な逆台形状を呈し、上端幅は0.31～1.00 m、下端幅は0.22～0.65 mを測る。両端は削平に伴い浅くなるが、北部の深さは最大で0.75 mを測る。埋土は、浅黄色土ブロックを含む黒褐色土で、複数の層に分かれる。遺物は、土師器の坏や皿、碗、甕、黒色土器A類の碗、須恵器の皿と甕、縄目文叩きスリ消しの丸瓦と摩耗した平瓦、弥生土器の甕、焼粘土塊、片岩の破片が出土した。

SD 215 (第5・14図、図版6)

調査区西壁中央から南東壁に至る溝である。両端は調査区外に及び、検出したのは長さ23.2 mのみである。複数の攪乱とピット、SD 127が後出するほかは、重複する遺構の大半が後出する。走行方位はN-51°-57°-Wで、若干蛇行する。上端幅0.63～1.08 m、下端幅0.12～0.55 m、深さは最大で1.01 mを測り、溝の南東部に向かって深くなる傾向にある。埋土は土層図のとおりで、黄褐色系の埋土と黒褐色系の埋土が占める。断面は歪なV字状を呈し、埋土の堆積状況や断面の形状から、少なくとも2回の掘り返しが示唆される。遺物の種類は豊富で、ほとんどヘラ切り底の土師器の坏や皿、台付皿、鉢、壺、甕、把手、移動式カマド、黒色土器A類の坏や皿、碗、甕、黒色土器B類の碗、須恵器の坏や皿、壺、甕、瓦器碗、緑釉陶器の碗、青磁碗や白磁碗などの貿易

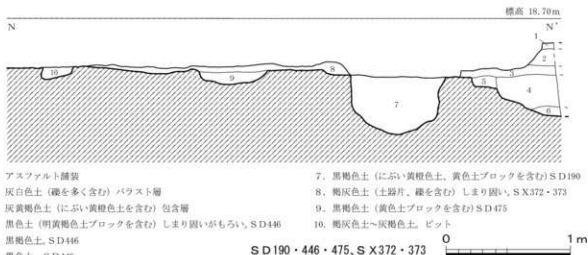
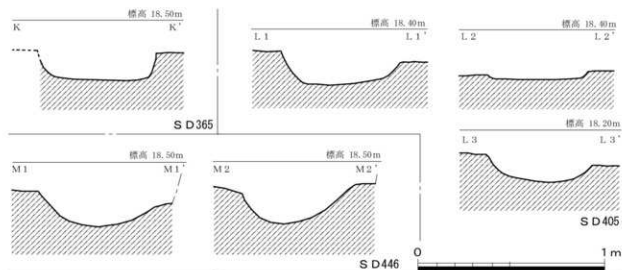


第14図 SD 215土層図 (1/20)

陶磁器、斜格子文叩きや縄目文叩きスリ消しの平瓦や丸瓦、弥生土器の細片、砥石や磨石などの石製品、黒曜石や片岩、安山岩、石英の破片、焼成粘土塊が出土した。

SD 365 (第5・15・17図、図版7)

調査区南部を東西に横切る溝である。検出長は18mで、東端は調査区外に及ぶ。西端はSD 446が後出し、SD 127・190・215やSF 445の波板状凹凸面、攪乱などが後出する。走行方位はN-76°-80°-Wを測る。断面は逆台形状からU字状を呈し、上端幅は0.29~0.83m、下端幅は0.14~0.54m、深さは最大で0.22mを測る。埋土は第17図のとおりで、黄色土や土器片を含む黒色土から



1. アスファルト舗装
2. 灰白色土 (礫を多く含む) パラスト層
3. 灰黄褐色土 (にぶい黄褐色土を含む) 包含層
4. 黒色土 (明黄褐色土ブロックを含む) しまり固いがもろい, SD446
5. 黒褐色土, SD446
6. 黒色土, SD446
7. 黒褐色土 (にぶい黄褐色土, 黄色土ブロックを含む) SD190
8. 褐灰色土 (土器片, 礫を含む) しまり固い, SX372・373
9. 黒褐色土 (黄色土ブロックを含む) SD475
10. 褐灰色土~灰褐色土, ビット

第15図 SD365・405・446断面図, SD190・446・475, SX372・373土層図 (1/20, 1/30)

なる上層と、黒褐色土とにぶい黄色土が混じりあう下層で二分される。出土遺物は、土師器の坏や皿、埴、壺、甕、把手、黒色土器A類の埴、須恵器の坏蓋や坏、壺、甕、縄目文叩きスリ消しの丸瓦、平坦な面を有する軽石製品や円盤状の片岩礫、丸礫といった石製品、焼成粘土塊、鉄滓である。

SD 405 (第5・15図、図版6)

調査区中央部を断続的に横切る溝である。検出したのは17.8mで、西端は調査区外に及び、攪乱やSD190、SK400が後出する。走行方位はN-80°-Wで、SD365やSF445と並走する。断面は、底部が歪な逆台形状を呈し、上端幅は0.39~0.62m、下端幅は0.18~0.49mを測る。深さは東部で0.17mを測るが、溝の中央部は削平が著しく、その深さは5cmにも満たない。遺物は、土師器の坏や甕、須恵器の坏、黒色土器A類の埴が出土した。いずれも溝の東部から出土しており、中央部と西部からの出土遺物は無い。

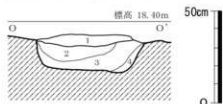
SD 446 (第5・12・14図、図版5・6)

調査区西壁中央部から南部で検出した溝である。検出長は17.9mで、南端は攪乱に削平されるほ

か、北部の西半は調査区外に及ぶ。走行方位は $N-4\sim 8^{\circ}-W$ で、南端は若干蛇行する。断面は丸底状で、上端幅は0.50～0.71 m、下端幅は0.17～0.37 mを測る。深さは最大で0.37 mを測る。埋土は黄色土系のブロックを含む黒褐色土と黒色土で二分される。出土遺物は、土師器の坏や皿、埴、壺、甕、須恵器の甕、黒色土器A類の埴、陶器の瓶の細片、縄目文叩きスリ消しや摩耗で調整不明の丸瓦や平瓦、片岩の破片や丸礫、焼成粘土塊である。

SD 453 (第5・13図、図版5)

調査区中央部西端で検出した溝である。SD 365やSF 445に後出するが、両端はビット、東端はSD 190、西半分はSD 446が後出される。残存するのは長さ3.7 m、幅0.95 mで、深さは最大で0.18 mを測る。埋土は第13図のとおりで、土器片を含むオリーブ黒色土である。遺物は、土師器の坏や皿、埴、壺、甕、須恵器の甕、黒色土器A類の埴、斜格子文叩きや調整不明の平瓦片、焼成粘土塊、炭化材が出土した。



1. 褐灰色土 (にぶい黄褐色土ブロックを含む) しまり固い, SX 372
2. 黒褐色土 (灰黄色土ブロックを含む) SD 475
3. 黒褐色土+灰オリーブ色土 (黄色土ブロックを含む) SD 475
4. 灰黄褐色土 (黄色土ブロックを含む) SD 475

第16図 SD 475、SX 372土層図 (1/20)

SD 475 (第5・15・16図、図版5・6)

調査区南東部で検出した溝である。北端は攪乱に削平され、土坑やSX 372が後出する。検出長は8.3 mで、走行方位は $N-5^{\circ}-W$ から $N-9^{\circ}-E$ を測る。断面はやや丸底の逆台形状を呈し、上端幅は0.39～0.79 m、下端幅は0.24～0.47 m、深さは最大で0.28 mを測る。埋土は、黄色土ブロックを含む黒褐色土が大半を占める。出土遺物は、土師器の坏や甕、須恵器の甕、黒色土器A類の埴、調整をナデ消した丸瓦、片岩の破片である。

道路遺構

SF 445 (第17図、図版6・7)

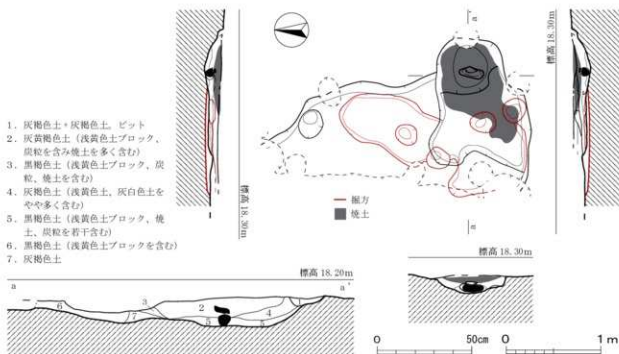
調査区中央部西寄りから北西部で検出した遺構である。硬化面上に堆積した黒褐色土と、SD 365に後出する波板状凹凸面、SD 365や波板状凹凸面が後出する硬化面、硬化面を剥がして検出した掘方から構成される。削平が著しく、SD 365の他にも遺構検出の時点でSD 127・190・215・446が後出し、西端はSD 446に、東部は攪乱に削平される。東端に残る掘方と残存長は11.4 mにおよぶ。ただし、後述するように硬化面SX 440が掘方の残余の可能性ある。走行方位は $N-73^{\circ}-W$ で、SD 365・405と平行である。波板状凹凸面(P 1～P 13)は、芯心距離0.65 m間隔で並ぶ13基のビットからなる。ビットは長さ0.68～2.04 m、幅0.27～0.46 m、深さ0.10～0.21 mを測る。埋土は黒褐色土や橙色土で、約5～20cmの礫を大量に含む。掘方は最大幅2.87 mを測り、波板状凹凸面と同様に、11基のビットを有する。ビットの位置は波板状凹凸面とほぼ同じだが、間隔は0.6～0.8 mと一定ではなく、平面形が大きく異なるものもある。SD 361に削平されているビットもあるが、長さ0.68～1.96 m以上、幅0.33～0.41 m、深さ0.07～0.31 mを測る。埋土は橙色土で、しまりが固く、土器片を含む。

出土遺物は、黒褐色土と波板状凹凸面のピット埋土、硬化面直上、硬化面より下層のピット、掘方で分けて取り上げた。まず硬化面上の黒褐色土からは、土師器の坏蓋や坏、皿、埴、甕、把手、黒色土器A類の埴や鉢、壺、甕、黒色土器B類の埴、須恵器の坏や甕、壺、緑釉陶器の埴、瓶とみられる陶器の細片、斜格子文叩きや縄目文叩きスリ消し、摩耗で調整不明の丸瓦や平瓦、焼成粘土塊、片岩や石英の礫、鉄滓が出土した。土師器の皿には、糸切り底の底部が含まれ、礫の中には被熱したものがあつた。波板状凹凸面のピットからも、上層と同様の遺物が出土した。遺物の点数は比較的多く、須恵器は坏蓋や坏、壺、甕と器種に富み、古瓦の調整は縄目文叩きや縄目文叩きスリ消しに限られる。さらに、土師器の移動式カマドや緑釉陶器の皿、貿易陶磁器の青磁碗、砥石の破片が出土した。これらの遺物の一部は、ピット間や硬化面直上の出土遺物と破片が接合した。また、片岩や石英などの礫の出土が目立ち、ピット1基あたり20点以上出土した。丸礫には、被熱したものと煤が付着するもの、鉄分が付着したものもみられる。掘方のピットからの出土遺物も、波板状凹凸面と同様の傾向が見られたが、瓦片や礫の出土が目立ち、土製の丸玉や縄土器、弥生土器、鉄滓が含まれる。ピット以外の掘方からの出土遺物は比較的に少なく、細片で占められる。器種も限られ、土師器の坏や埴、甕、須恵器の甕の胴部片、黒色土器A類や弥生土器、被熱した礫のみである。

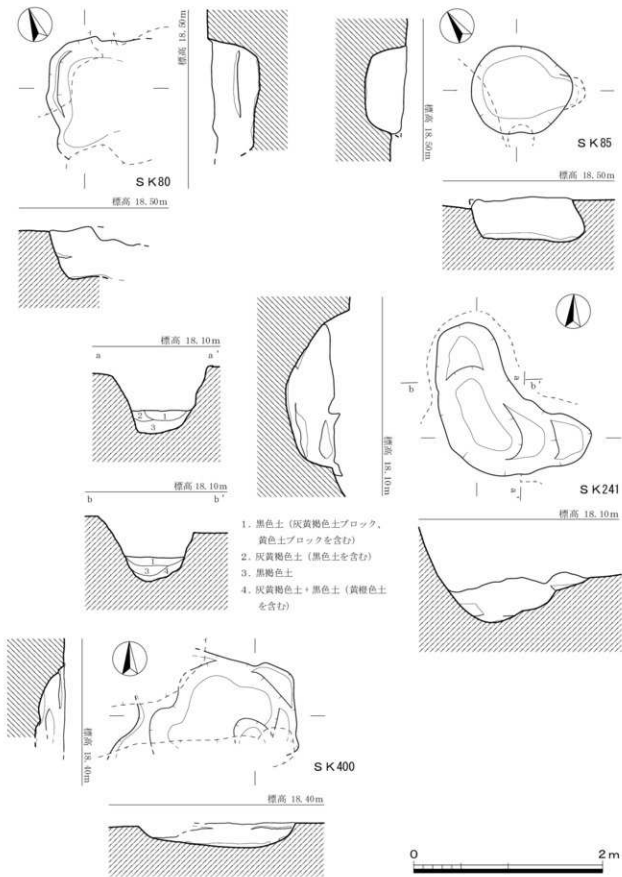
竪穴建物

S I 133 (第18図、図版7)

調査区中央部北西寄りで検出した遺構である。検出したのは遺構の南東部で、大半はSD 140やピットが後出する。残存したのは長軸長2.77 m、短軸幅1.76 mのみである。深さ0.13 mで段を有し、南東隅は深さ0.19 mを測る。また、段の下には深さ10～20cmの掘方を有する。明確な柱穴は確認できなかったが、北東隅に直径0.25～0.31 m、深さ0.42 mのピットがある。南東隅の突出部には焼土



第18図 S I 133実測図・土層図 (1/40、1/20)



第19図 SK80・85・241・400実測図・土層図 (1/40)

が分布し礫が2点出土したが、カマドや煙道などの明瞭な設備や硬化面、粘土などは無かった。埋土は土層図のとおりで、黒褐色土と灰褐色土で占められる。遺物は、土師器の坏蓋や坏、皿、碗、鉢、甕、把手、黒色土器A類の細片、須恵器の甕、弥生土器の甕、磨石とみられる安山岩の石製品、粘土塊が出土した。

土坑

SK 80 (第19図、図版7)

調査区東部中央で検出した遺構である。遺構の東半が近代の土坑に削平されるが、隅丸方形の平面を有するとみられる。検出したのは長さ1.17 m、幅0.95 mである。上端から深さ0.32 mに段を有し、深さは最大で0.50 mを測る。出土遺物は、土師器の坏と碗、黒色土器A類の碗、弥生土器の甕の胴部片である。土師器の碗の破片は、SK 85出土遺物と接合した。

SK 85 (第19図、図版7)

調査区東部中央で検出した遺構である。近代の土坑やピットが後出するが、上端は円形の平面を有し、下端は南東方向に0.32 m突き出る。上端の直径は0.98～1.08 mで、深さは最大で0.47 mを測る。遺物は、土師器の坏蓋やへら切底の坏や小皿、碗、甕、須恵器の坏蓋や甕、弥生土器の甕や高坏の細片、被熱した粘土塊が出土した。

SK 241 (第19図、図版7・8)

調査区北西部、SD 1西端の底面で検出した遺構である。角の丸いL字形の平面を有し、長軸1.78 m、短軸1.49 mを測る。北端と東端には、深さ0.19 mと0.30 m、0.45 mに段を有し、深さ0.57 mで底面に至る。埋土は土層図のとおりで、黒色土と黒褐色土、灰黄褐色土からなる。出土遺物は、土師器の皿や碗、甕に加えて、須恵器の甕、黒色土器A類の甕があるが、いずれも細片である。

SK 400 (第19図、図版8)

調査区中央部南寄り検出した遺構である。遺構の南半分をピットや近代の土坑に削平され、残存するのは長軸1.98 m、幅1.12 mである。底面は複数の段に分かれ、深さは最大で0.32 mを測る。埋土は、にぶい橙色土や黄色土ブロックを含む暗褐色土だった。遺物は、土師器の坏や皿、碗、甕と黒色土器A類の碗や甕、黒色土器B類の碗の細片、須恵器の坏や甕、被熱した粘土塊や壁土などの土製品、玄武岩製の台石とみられる石製品が出土した。

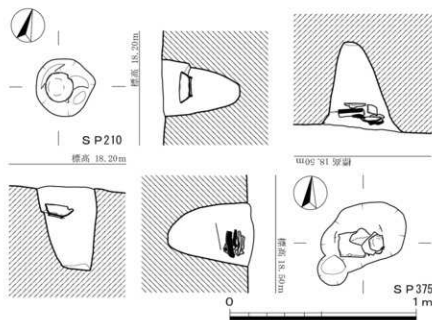
ピット

SP 210 (第20図、図版8)

調査区北西部で検出した遺構である。攪乱やピットに削平されるが、歪な円形の平面を有し、直径0.30～0.32 mを測る。底部は複数の段を有し、深さは最大で0.45 mを測る。埋土は、黒褐色土である。遺物は、土師器碗が深さ20 cmから1点出土したのみである。

SP 375 (第20図、図版8)

調査区中央部で検出した遺構である。SA 252を構成するピットのひとつと考えられるが、遺物出土状況を記録したことから、別個のピットとして報告する。楕円形の平面を有するピットに、直径0.17



第20図 SP210・375実測図 (1/20)

～0.19 mのビットが突き出る。楕円形のビットは長さ0.46 m、幅0.32 mで、深さは最大で0.48 mを測る。深さ0.18～0.22 mに段を有するほか、深さ5～18 cmに、土師器や須恵器、古瓦、片岩片が積み重なった状態で埋設していた。埋土は暗褐色土である。

その他の遺構
波板状凹凸面

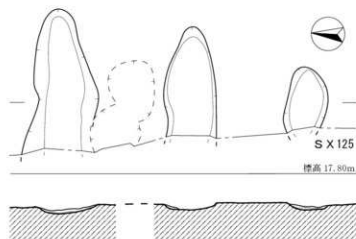
S X 125 (第21図、図版8)

調査区北西部壁際で検出した遺構である。西半は調査区外に及び、住宅の入口部分だった場所で地下げに伴い削平される。芯心距離0.6～0.65 m間隔で並ぶ3基の細長いビットで構成される。総延長は1.67 mで、方位はN-2°-Eである。ビットは、長軸0.34～0.78 m、短軸0.24～0.43 mを測り、深さは0.04 mで地形に沿って下がる傾向がある。埋土は、黄色土ブロックと礫を含む灰褐色土で占められる。遺物は細片ばかりで、土師器の壺や甕、須恵器の壺や甕、緑軸陶器が出土した。

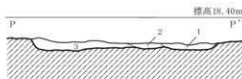
硬化面

S X 150 (第5・21図、図版8)

調査区北端中央で検出した遺構である。長さ4.7 m、幅は最大で1.05 mの細長い不定形状で、北端はS D 140、中央部は複数のビットに削平される。遺構の南北で5 cmの段を有し、深さは最大で0.12 mを測る。埋土は土層図の通りで、黒褐色土や土器片を含む褐色系のしまりが固い土で占められる。出土遺物は、土師器の細片と須恵器の壺の破片各1点のみである。



第21図 SX125実測図、SX150土層図 (1/20)



1. 褐色土 (黒褐色土、土器片を含む) しまり固い
2. 褐色土+にぶい褐色土 (黒褐色土ブロック、土器片を含む) しまり固い
3. 灰褐色土 (黒褐色土、土器片を含む) しまり固い

S X 150



S X 440 (第5図、図版2)

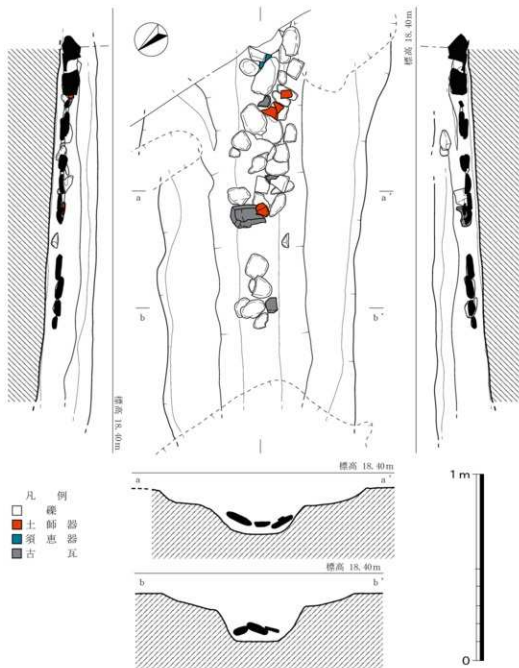
調査区南東部で検出した遺構である。SD 215やピットが後出する。平面は不定形で、長さ2.18 m、幅1.18 m、深さは最大で0.12 mを測る。埋土はしまりの固いにぶい褐色土で占められる。遺物は、土師器の坏とみられる細片が1点のみ出土した。

(3) 中世の遺構

溝

SD 2 (第22図、図版9)

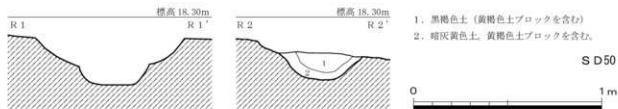
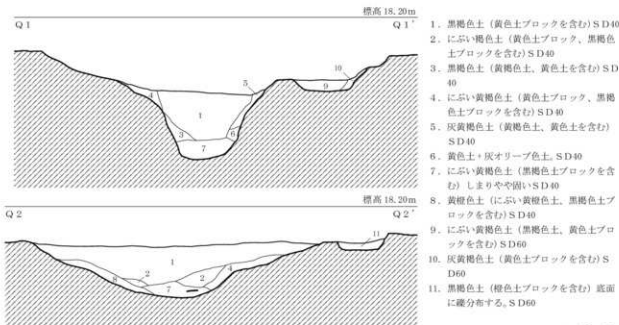
調査区北東部壁際で検出した溝で、走行方位はN-50°-Wである。検出したのは2.24 mで、



東端は調査区外に延び、西端は近代の廃棄土坑Cに削平される。溝の断面は、上端が極端に外反する逆台形状を呈し、上端幅は0.96～1.31 mを測る。上端から深さ0.05～0.15 mに段があり、中端幅0.44～0.53 m下端幅0.20～0.23 mの細い溝にいたる。細い溝は南東端で深さ0.18 m、北西端で深さ0.31 mを測り、北西方向に深くなる様子が窺える。また、底面から約5～15cm浮いた状態で、約5～20cm四方の片岩礫や土師器、須恵器、古瓦が敷設されていた。埋土は、黒褐色土と縮まりの固い灰褐色土で占められ、底面に砂利が集中する。出土遺物は、糸切り底の土師器の坏や小皿、甕、須恵器の甕胴部や平瓶、縄目文叩きスリ消しの古瓦、弥生土器の甕、焼成粘土塊、片岩製の磨製石斧の破片である。

SD 40 (第5・23図、図版9)

調査区中央部北寄りで検出した溝である。走行方位はN-46°～48°-Wで、SD2の北西延長上に位置するが、礫が数点しか出土せず、幅も異なるため、別個の溝として報告する。東端は近代の廃棄土坑が削平し、西端は調査区外に及ぶため、検出したのは長さ12.3 mである。断面は、溝の西部がSD2と同様に、上端が極端に外反する逆台形状を呈するのに対し、溝の東部は段が丸い皿状を呈す。上端幅は1.73～2.89 mを測り、上端から深さ0.08～0.41 mに複数の段がある。この段から、中端幅0.37～1.07 m、下端幅0.18～0.41 mの細い溝にいたる。細い溝も中央部に段を有し、



第23図 SD 40・60土層図、SD 50土層図・断面図 (1/20)

南東端で深さ0.11 m、北西端で深さ0.51 mを測り、北西方向に向かって深くなる様相が窺える。埋土は土層図のとおりで、黒褐色土と黄色系の埋土で占められる。遺物は、弥生土器の甕の口縁部や底部、土師器の坏、小皿、甕、壺、土鍋、黒色土器B類とみられる細片、須恵器の坏蓋や甕、瓦器の埴、緑釉陶器の碗の細片、斜格子文叩きや縄目文叩きの平瓦や丸瓦が出土した。土師器の坏は、糸切り底の底部を含み、土鍋の破片はいずれも被熱している。

SD 50 (第5・23図、図版9)

調査区北東部で検出した溝である。検出したのは4.2 mのみで、西端は調査区外に及び、東端は近代の廃棄土坑が削平する。走行方位はN-45°-Wである。上端幅0.50~0.82 m、下端幅0.17~0.35 mを測る。溝の深さは最大で0.29 mを測るが、底部には直径0.34~0.51 m、深さ0.06~0.18 mのピットが並ぶ。埋土は土層図のとおりで、黒褐色土と暗灰黄色土で二分される。また、ピットの底面には厚さ数cmの砂利の層がみられた。出土遺物は、土師器の甕や把手、須恵器の甕胴部片、白磁碗の破片、弥生土器の甕が出土したが、いずれも細片である。出土遺物からの年代決定に窮するが、SD 2・40・215といった中世の溝と方位がほぼ同一であることから、中世の溝と判断した。

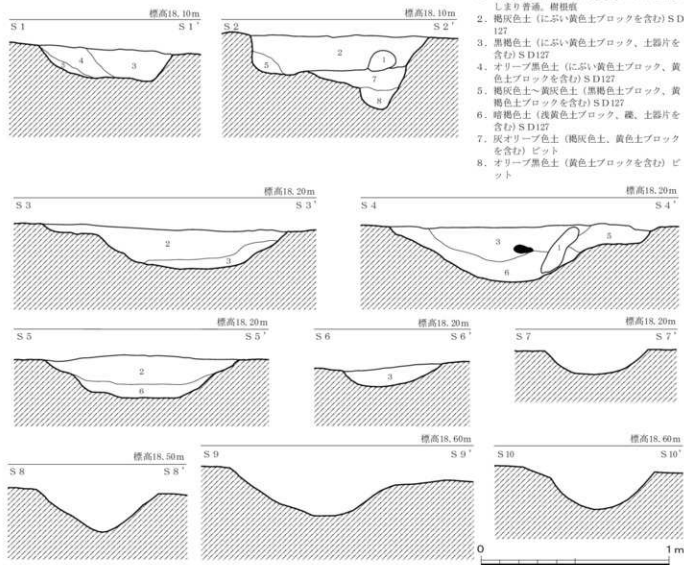
SD 60 (第5・23図、図版9)

調査区北部、SD 40の底面で検出した溝である。北端はSK 235、南端は攪乱、中央部はSD 40が後出し、検出したのは長さ5.7 mである。走行方位はN-38~46°-Wである。上端幅0.22~0.59 m、下端幅0.15~0.30 m、深さは最大で0.31 mを測り、北に向かって深くなる傾向が見られた。埋土は土層図のとおりで、南端は底面に礫が集中する。遺構検出時に弥生土器の甕の底部片が出土したが、埋土から遺物は出土していない。走行方位がSD 2・40と同一であることから、中世の遺構と判断した。

SD 127 (第5・24図、図版10)

調査区の西部を南北方向に横切る溝である。走行方位はN-6~10.5°-Wで、緩やかな弧を描く。検出したのは41.5 mで、南端で複数の攪乱に、北端で住宅入口のスロープに削平されるほかは、重複する遺構の大半に後出する。溝の断面は丸みを帯びる逆台形状からV字状で、上端幅は0.43~1.41 m、下端幅は0.09~0.85 mを測る。溝の深さは0.14~0.40 mを測り、溝の北部に向かって深くなる傾向がある。また、溝の中央部と南部の底面には段があり、その深さは0.35~0.43 mを測る。埋土は土層図のとおりで、にぶい黄色土ブロックを含む灰褐色から黒褐色の上層と、浅黄色土ブロックや礫、土器片を含む暗褐色土の下層で大別できる。堆積状況から、掘り返された様子が窺える。なお、溝南部の埋土は、黄色土ブロックを含む黒褐色土で占められる。出土遺物は多岐にわたり、土師器の坏や皿、埴、甕、把手、壺、土鍋、黒色土器A類の埴、須恵器の坏蓋や壺や甕、瓦器の埴や捏鉢、斜格子文叩きや縄目文叩きの平瓦や丸瓦、緑釉・灰釉陶器の碗などの細片、貿易陶磁器の白磁碗や白磁合子蓋、青磁碗、褐釉陶器の壺、埴場とみられる土製品、滑石製石鍋の再加工品や砥石などの石製品、被熱した礫や片岩の破片、石英、赤チャートの剥片、鉄片や鉄滓といった鉄製品である。土師器の坏は、糸切り底が占める。

1. 褐灰色土+黒褐色土 (黄色土ブロックを含む) しまり普通、樹根痕
2. 褐灰色土 (にぶい黄色土ブロックを含む) S D 127
3. 黒褐色土 (にぶい黄色土ブロック、土器片を含む) S D 127
4. オリブ黒色土 (にぶい黄色土ブロック、黄色土ブロックを含む) S D 127
5. 褐灰色土~黄灰色土 (黒褐色土ブロック、黄褐色土ブロックを含む) S D 127
6. 暗褐色土 (浅黄色土ブロック、礫、土器片を含む) S D 127
7. 灰オリブ色土 (褐灰色土、黄色土ブロックを含む) ビット
8. オリブ黒色土 (黄色土ブロックを含む) ビット



第24図 SD127土層図・断面図 (1/20)

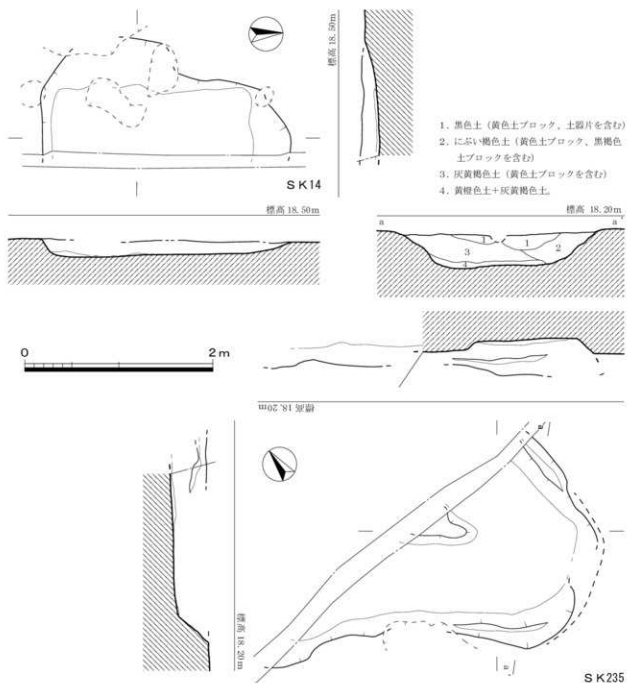
土坑

SK 14 (第25図、図版1)

調査区東部壁際で検出した遺構である。近代の廃棄土坑やビットが後出し、かつ遺構の東半が調査区外に及ぶが、南西隅が突き出る平面形を有する。検出したのは長さ2.61m、幅1.23mで、深さは0.21mを測る。出土遺物は、糸切り底の坏や小皿、埴、土鍋、黒色土器A類の埴、須志器の甕の胴部片、瓦器の埴、貿易陶磁器の青磁碗の破片、弥生土器の細片、焼成粘土塊がある。

SK 235 (第25図、図版10)

調査区北端中央部壁際で検出した遺構である。当初、SD 40の延長部として掘削したが、平面形が定まらず、埋土の様相が異なることから、掘削中に精査した結果、別個の土坑と判断した。北半は調査区外に及び、SD 40・240に後出する。検出したのは長軸3.44m、短軸2.26mのみである。深さは最大で0.42mを測るが、土坑の中央部に約10cm盛り上がる箇所がある。埋土は土層図のと



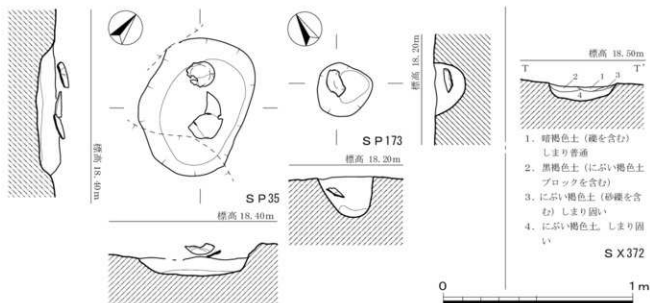
第25図 SK14実測図、SK235実測図・土層図 (1/40)

おりで、黄色土ブロックを含む褐色系の埋土で占められるが、底面は黄褐色土と灰黄褐色土が堆積していた。遺物は、糸切り底の坏や小皿、土鍋、黒色土器A類の埴、須臾器の甕や壺、瓦器埴、貿易陶磁器の白磁碗と青磁碗の破片、縄目文叩きの平瓦、弥生土器の細片が出土した。

ビット

SP 35 (第26図、図版10)

調査区東部中央で検出した遺構である。近代の土坑やビットに削平されるが、楕円形の平面を有する。長さ0.74m、幅0.54m、深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色土だった。出土遺物は、糸切り



第26図 SP 35・173実測図、SX 372土層図 (1/20)

底の土師器杯と須恵器の捏鉢の口縁部、黒色土器A類の細片のほか、隣接するSP 36と共に検出した際に、土師器の杯や皿、黒色土器B類の埴、焼成粘土塊が出土した。

SP 173 (第26図、図版10)

調査区北西部で検出したピットである。SX 175に接しており、遺構検出時はSP 173が後出するとしていたが、出土遺物の年代からSX 175が後出すると判断した。三角形に近い円形の平面を有し、直径0.27～0.29m、深さ0.22mを測る。埋土は、灰褐色土ブロックを含む黒褐色土である。出土遺物は、深さ10cm付近に斜めに埋まっていた土師器の皿1点のみである。

その他の遺構

硬化面

SX 372 (第5・15・16・26図、図版11)

調査区南西部で検出した遺構である。SD 475などの溝に後出し、北端はSX 373と同一の硬化面で、攪乱に削平される。走行方位はN-6～10°-Wで、細長い平面形を有する。残存長14.8m、幅0.30～0.69m、深さ0.04～0.16mを測る。埋土は、遺構の北部はにぶい黄褐色土ブロックや土器片、礫を含む褐灰色土で占められ、南端は砂礫を含む褐色系の埋土である。暗褐色土や黒褐色土以外は、いずれもしまりが固い。遺物は細片ばかりで、土師器の甕、須恵器の杯や甕、須恵器の杯または杯蓋の破片、被熱した片岩礫が出土した。

SX 373 (第5・15図、図版11)

調査区南西部で検出した遺構である。すでに述べたように、北端はSX 372と同一の硬化面であり、埋土の様相や後出する遺構に乏しいことから、SX 372と対になるとみられる。北端はピットや攪乱が後出するほか、遺構の中央部も栗石が後出する。走行方位はN-4.5～12°-Wで、SX 372と心芯距離で1.3～1.5m間隔を保ち並走する。残存長8.52m、幅0.28～0.56m、深さ0.08～0.12mを測り、細長い平面形を有する。埋土は土器片、礫を含む褐灰色土で、SX 372と同様に

しまりが固い。S X 373 単独の出土遺物は無く、S X 372 と同一の硬化面北端から、土師器の坏や皿、
 壺、甕、須恵器の甕、黒色土器A類の壺、瓦器壺が出土した。

(4) 近世の遺構

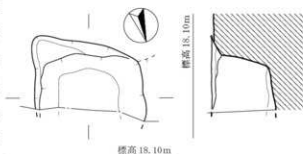
土墳墓

ST5 (第5図、図版11)

調査区北東隅壁際で検出した土墳墓で、一連の土墳墓群の北東部に位置する。北辺は調査区外に
 及ぶが、隅丸方形の平面を有し、長軸1.89m、短軸1.09m以上を測る。掘削中に空洞を確認したため、
 安全上から深さ0.39mまで掘削した。墓壇の中央に、棺桶の痕跡とみられる直径0.67~0.73m、
 深さ0.54mの空洞を確認した。埋土は灰褐色土で、黒褐色土ブロックや明黄褐色土ブロックを含む。
 出土遺物は、土師器の甕や古瓦の摩耗した細片、近世の所産とみられる土師器の皿の破片に加えて、
 染付の碗が出土した。

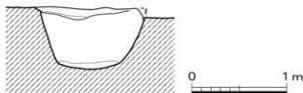
ST6 (第27図、図版11)

ST5と同様に、調査区北東隅壁際で検出した
 土墳墓で、土墳墓群の北端に位置する。土墳墓で
 唯一完掘した。北辺は調査区外に及ぶが、隅丸方
 形の平面を有するとみられ、長軸1.17m、短軸
 0.84m以上、深さは最大で0.67mを測る。遺物
 は、土師器の坏や甕、黒色土器A類、弥生土器の
 細片が出土した。



ST7 (第5図、図版11)

近世墓群の中央で検出した。歪な隅丸方形の
 平面を有し、長軸1.38m、短軸1.19mを測り、
 周囲の遺構の断面が墓壇壁面で確認できる深さ



第27図 ST6実測図 (1/40)

0.72mまで掘削した。埋土は黒褐色土で、暗褐色土ブロックや橙色土ブロックを含む。出土遺物は、
 土師器の坏や甕、壺の破片、弥生土器の細片である。

ST8 (第5図、図版11)

調査区北東隅で検出した墓壇である。隅丸方形の平面を有し、長軸1.58m、短軸1.44mを測り、
 周囲の遺構の断面が墓壇壁面で確認できる深さ0.72mまで掘削した。埋土は黒褐色土で、黒色土
 ブロックや黄色土ブロック、砂利を含む。遺物はいずれも細片で、土師器の坏や甕、壺、黒色土器
 A類の壺、弥生土器の細片、近世の染付小皿や陶器鉢の破片が出土した。

ST9 (第5図、図版11・12)

調査区北東隅で検出した墓壇で、近世墓群の南西隅に位置する。隅丸方形の平面を有し、長軸1.34
 m、短軸1.20mを測り、周囲の遺構の断面が確認できる深さ0.55mまで掘削した。埋土は灰褐色
 土で、黄色土ブロックを含む。出土遺物は、土師器の坏や甕、近世の陶器碗や小皿の細片である。

ST 10 (第5図、図版11・12)

土壇墓群の南部で検出した。隅丸方形の平面を有し、長軸1.22 m、短軸1.18 mを測る。掘削中に空洞を確認したため、安全上から深さ0.55 mまで掘削した。墓壇の中央に、棺桶の痕跡とみられる直径0.65～0.69 m、深さ0.52 mの空洞を確認した。埋土は黒褐色土で、橙色土ブロックや砂利を含む。遺物は、土師器の坏や甕、黒色土器A類の埴に加えて、近世の陶器播鉢、染付の碗や小皿が出土した。いずれも細片だが、染付の小皿には19世紀以降の蛇ノ目軸刺ぎが観察できる。

ST 11 (第5図、図版11・12)

土壇墓群の南東隅に位置する。南辺は攪乱に削平されている。隅丸方形の平面を有し、一辺1.27～1.29 mを測る。深さ0.78 mまで掘削した。埋土は黒褐色土で、暗褐色土や黄色土ブロックを含む。遺物は、土師器の坏や甕、土鍋、須恵器の坏、弥生土器の甕、近世の染付碗の細片が出土した。

ST 15 (第5図、図版11・12)

土壇墓群の西部で検出した。隅丸方形の平面を有する土壇墓である。一辺1.27～1.29 mを測り、掘削中に空洞を確認したため、安全上深さ0.78 mまで掘削した。墓壇の中央に、棺桶の痕跡とみられる直径0.58 m、深さ0.54 mの空洞を確認した。埋土は黒褐色土で、黄色土ブロックを大量に含む。出土遺物は、土師器の坏や甕に加えて、近世陶器の甕、白色不透明のガラス容器の細片がある。

(5) その他の遺構**埋壘****SX 175** (第5図、図版12)

調査区中央部北東寄りで検出した埋壘である。削平が著しく、検出したのは底部の約10 cmのみである。掘方は長さ1.27 m、幅0.66 m、深さ0.17 mである。埋壘は陶器製で、近世末期以降の製品である。埋壘以外の出土遺物は、掘方からの土師器坏と陶器の細片各1点のみである。

地震痕跡**断層跡** (第5図、図版12)

調査区北東部で検出した。遺構検出時に橙色土と灰褐色土の境界を確認し、整地などの遺構と想定して掘削した。しかし、ST 7・8など重複する遺構の壁面で灰褐色土がほぼ垂直に立ち上がり、橙色土との境界が直線的であることを確認した。この地山の変位は、調査区北東隅でN-51～74°-Wの方向に3.86 m続く。北隣に断層崖がある点や、第310次調査地点でも同様の地山の変位を検出した点から、断層に伴う地山の変位と判断した。

地割跡 (第5図、図版12)

調査区南部中央で検出した地割跡である。遺構面で長さ2.6 mを検出し、調査区を反転する際に重機で断ち割り、断面を確認した。遺構面から深さ0.8 mの砂礫層まで至り、埋土は暗褐色土で占められる。攪乱が後出するのみで詳細な年代は明らかにできないが、筑後国府跡の複数地点で検出されている地震痕跡と同様に、『日本書紀』卷第二十九に登場する、天武天皇7年(678)12月に筑紫国で起きた「筑紫地震」に伴う地割痕の可能性が高い。

4. 出土遺物

遺物の総量は、バンコンテナー14箱である。このうちS I 20出土の弥生土器が2箱、近代の廃棄土坑から出土したガラス製品が1箱を占める。そのほかの遺物として、古代の土師器や須恵器、黒色土器A類・B類、緑釉陶器や越州窯系青磁といった陶磁器、九玉や椀、埴塀などの土製品、台石などの石製品、中世の土師器や須恵器、瓦器、龍泉窯系青磁碗を中心とした貿易陶磁器、土錘などの土製品、滑石製石鍋や磨石などの石製品、近世の土師器や陶磁器、近代の陶磁器、鉄鎌や鉄片、鉄滓、銭貨などの金属製品が挙げられる。個別の法量や色調、調整などの詳細については、遺物観察表を参照願いたい。以下、各遺物の特徴について簡単に補足する。

S I 20 出土遺物 (第28～29図、第2・3表、図版13・14)

1～8は甕である。5と6は外面をナデ消しているが、1と3は縦方向の工具痕が観察できる。7と8は、外面に縦方向のハケ目を施す。2～4は底部の破片で、2は黒斑が残り、4は焼成後に穿孔を施す。9～11は大甕で、9と10は口縁部から胴部、11は胴部から底部である。いずれも口縁は頸部に突帯を有し、胴部は縦方向のハケ目を施す。11の底部には、叩きの痕跡が見られる。12は壺、13～15は鉢で、13は手づくねで作られている。16は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、内外面共にハケ目を施し、胎土は赤色を呈す。17は器台で、内外面共に摩擦が著しい。18は高坏の脚部で、胎土は橙色を呈し、外面に縦方向、内面に斜め～横方向のハケ目を施す。19と20は、床面で伏せられて出土した鉢と小鉢である。19は厚手で外面は黒色を呈す。焼成時にヒビが生じているほか、口縁部の一部が欠けており、欠けた部分に20の小鉢が差し込まれていた状態で伏せられていた。21の甕と22の短頸壺は、ピットから出土した。共に外面はハケ目を施すが、21は内面のハケ目をナデ消す。

S A 252 出土遺物 (第30図、第3表、図版14)

23はヘラ切り底の土師器の坏、24と25は埴で、25は内面にヘラミガキを施す。26は土師器甕の口縁部、27は黒色土器A類の埴で、内面にヘラミガキを施す。28は弥生土器の甕の口縁部で、内面に糊圧痕がみられる。

S D 1 出土遺物 (第30図、第3表、図版14)

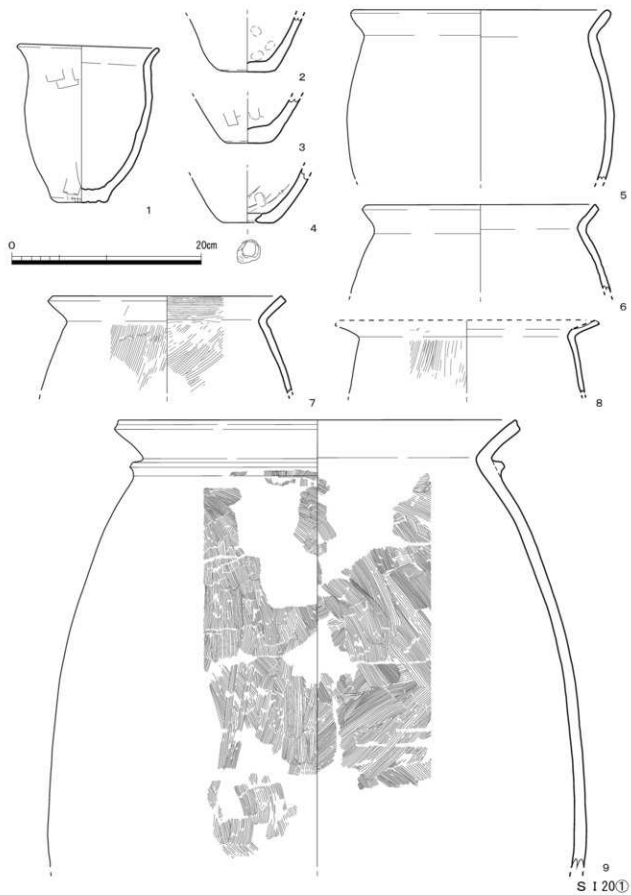
29は東部で出土したヘラ切り底の小皿である。30は土師器壺の底部で、円形文叩きで調整されている。31と32は須恵器で、31は坏、32は波状文を施す甕の口縁部である。

S D 115 出土遺物 (第30図、第3表、図版14)

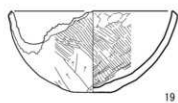
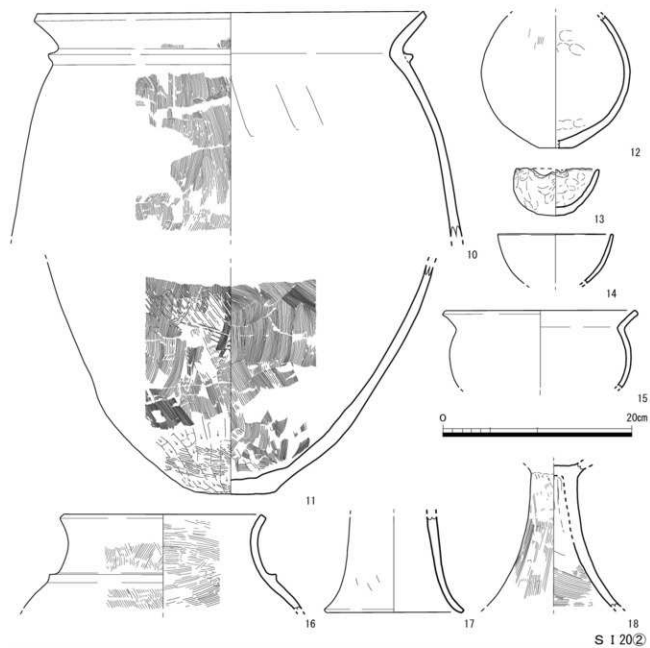
図示できたのは33の須恵器の坏のみである。ヘラ切り底の底部片である。

S D 120 出土遺物 (第30図、第3表、図版15)

34は混入した弥生土器の高坏の脚部である。35は土師器の坏、36は皿で、いずれもヘラ切り底である。37は黒色土器A類の埴の底部である。38～43は須恵器である。38～40は坏、41は甕の胴部、42は口縁部で自然釉が被る。43は壺の底部である。44～46は緑釉陶器で、44は高台に重ね焼き痕跡が残るほか、見込みに文様とみられる線刻がある。45と46は細片で、46は内面が黒変する。47



第28図 出土遺物実測図① (1/4)

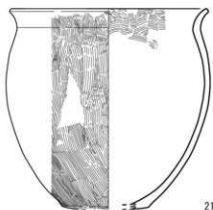


19



20

S I 20床面



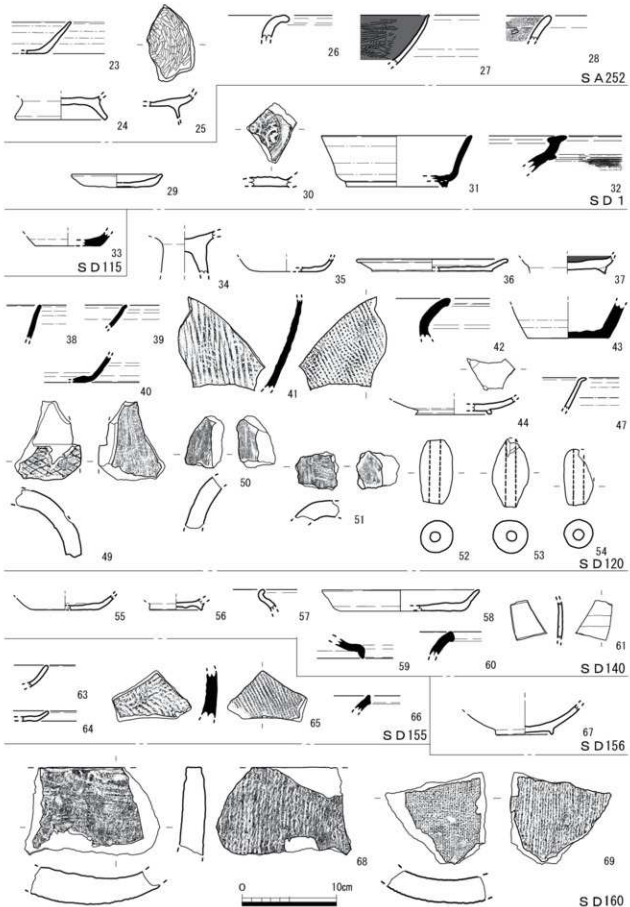
21



22

S I 20ピット

第29図 出土遺物実測図② (1/4)



第30図 出土遺物実測図③ (1/4)

は灰軸陶器の碗で、外面は露胎である。48は貿易陶磁器で、龍泉窯系の青磁碗の細片である。12世紀後半に収まり、SD 127からの混入品の可能性がある。49～51は丸瓦の破片で、49は玉縁と斜格子文叩きを有する。50と51は細片で摩耗しているが、50は縄目文叩きスリ消しを施す。52～54は土錘で、口径や胎土、調整が共通する。

SD 140 出土遺物 (第30図、第3・4表、図版16)

55～58は土師器である。55はヘラ切り底の坏、56は壙で、いずれも底部の破片である。57は小壺の口縁部、58は皿で、底部には線刻が見られる。59は須恵器の坏蓋、60は甕で、いずれも口縁部の細片である。61と62は緑軸陶器である。61は壺とみられる胴部の破片で、外面は煤ける。62は碗の口縁部の細片である。

SD 155 出土遺物 (第30図、第4表、図版16)

63と64は土師器で、63は坏の口縁部、64はヘラ切り底の皿である。65と66は須恵器の甕で、65は胴部、66は口縁部の破片である。

SD 156 出土遺物 (第30図、第4表、図版16)

図示できたのは、67の土師器の壙のみである。底部の破片で、内外面の摩耗が著しい。

SD 160 出土遺物 (第30図、第4表、図版15)

68と69は、共に縄目文叩きスリ消しの平瓦である。68は凹面に指紋が残り、凸面や折損面にススが付着する。

SD 165 出土遺物 (第31図、第4表、図版16・17)

70と71は土師器で、70はヘラ切り底の小皿、71は外面にススが付着する甕の口縁部片である。72と73は平瓦で、72は斜格子文叩きを施し、焼成後の穿孔が見られる。74は滑石製石鍋の口縁部片で、折損面の一部は研磨されている。

SD 170 出土遺物 (第31図、第4表、図版17)

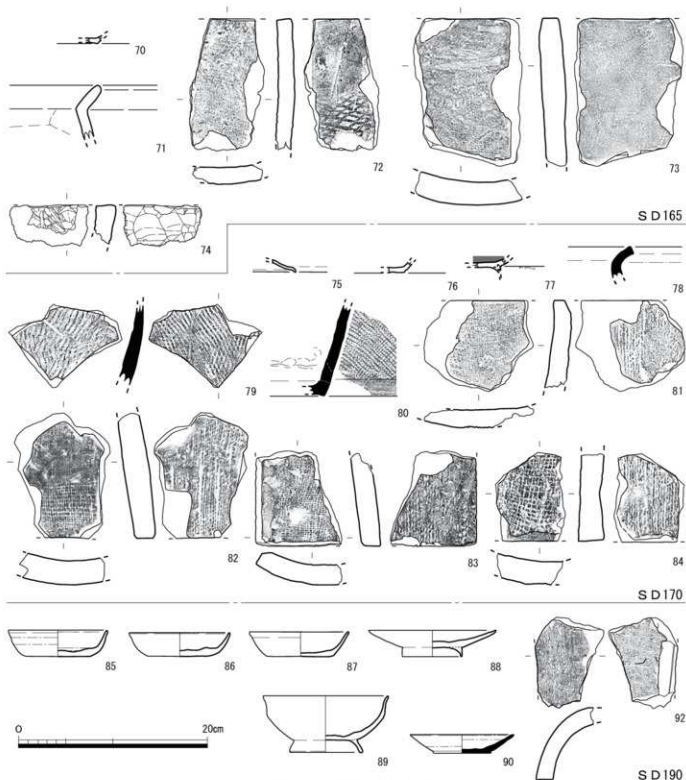
75と76は土師器である。75は坏蓋の口縁部、76はヘラ切り底の坏で、外面にススが付着する。77は黒色土器A類の壙で、外面に門歯痕が見られる。78～80は須恵器で、78は甕の口縁部、79は外面に灰が被る甕の胴部、80は壺の底部の破片である。81～84は古瓦である。いずれも平瓦で、縄目文叩きをスリ消す。84は凹面の布目が比較的粗く、ススが付着する。

SD 190 出土遺物 (第31図、第4表、図版17・18)

85～89は土師器である。85～87は坏で、いずれもヘラ切り底に板状圧痕が残る。88は台付皿で、ヘラ切り底に高台を接合する。89は壙で、外面の一部が剝離する。90は須恵器の皿で、口縁部は焼け歪む。底部はヘラ切り底である。91は緑軸陶器の細片。92は丸瓦で、縄目文叩きを施す。

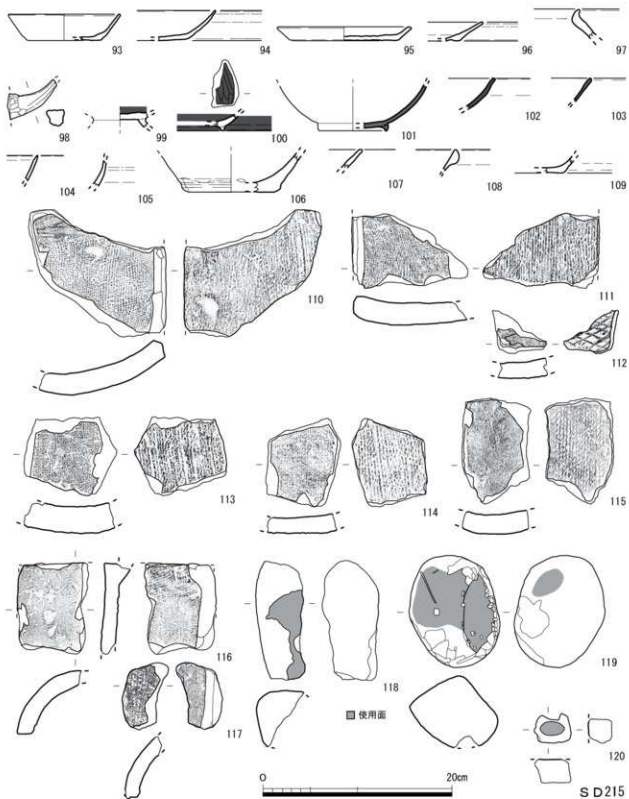
SD 215 出土遺物 (第32図、第4・5表、図版18・19)

93と94は土師器の坏、95と96は皿である。いずれもヘラ切り底で、94の底部には板状圧痕もみられる。また、93の外面と96の内面には門歯痕が残る。97は土師器壺の口縁部の破片で、頸部は短い。98は把手の破片で、ススが付着する。99は黒色土器A類、100は黒色土器B類の壙の底部



第31図 出土遺物実測図④ (1/4)

で、100は内面にヘラミガキを施す。101～103は瓦器塊である。101は底部から側面の破片、102と103は口縁部の破片で、いずれも器壁は摩耗する。104と105は緑釉陶器の碗の細片で、104は軸葉の大半が剥離し、105は外面がスズで黒変する。106～108は貿易陶磁器の破片である。106は、下層から出土した越州系青磁碗の底部である。内面には目跡が2ヶ所残り、外面はヘラ切り底で一部は



第32図 出土遺物実測図⑤ (1/4)

露胎である。107は口縁部の細片だが、色調や胎土から越州窯系青磁碗の口縁部と判断した。108は、溝の底部から出土した白磁碗の口縁部片である。玉縁で、若干黄色味を帯びる。109は施釉されていないが、硬質であることや色調から、陶器の壺の底部片と判断した。110～115は平瓦である。110と

115は縄目文叩きをスリ消し、112は斜格子文叩き、111と113、114は縄目文叩きを施す。116と117は丸瓦である。凸面の調整は、116は完全にナデ消されており、117は斜格子文叩きをナデ消す。118～120は石製品である。118と119は玄武岩製の磨石で、118は破片だが使用面が確認できる。119は、使用面が2面あるほか、反対側にも使用面がみられる。120は、砂岩製の砥石の破片である。細片だが、使用面の一部が残存する。

SD 365 出土遺物 (第33図、第5表、図版19・20)

121～125は土師器である。121は壙の底部片で、摩耗著しいが、外面に門歯痕が見られる。122は壺の底部で、内面にススが附着する。123は甕、124と125は把手である。126と127は須恵器で、126は坏蓋の頂部片、127は甕の胴部片である。128は古瓦の丸瓦で、縄目文叩きをスリ消す。布目には縦じ痕が見られ、側面部は未調整である。129は軽石を用いた石製品で、平坦面を有する。

SD 405 出土遺物 (第33図、第5表、図版20)

130はへら切り底の土師器の坏の底部片である。131は黒色土器A類の壙の口縁部片で、内面にヘラミガキを施す。132は須恵器の坏で、高台部の細片である。

SD 446 出土遺物 (第33図、第5表、図版20)

133は土師器の坏で、底部がナデ消されている。134は須恵器の甕の胴部片。135～137は古瓦である。135は丸瓦で、凸面は横ナデを施し、凹面は榎骨痕がみられる。136と137は平瓦片で、136は小口側の破片、137は側面部の破片で、へら切りの痕跡がみられる。凸面には、136は縄目文叩きを施し、137は縄目文叩きをスリ消す。

SD 453 出土遺物 (第33図、第5表、図版20)

図示できたのは138の土師器の坏のみである。へら切り底の底部片で、外面は摩耗する。

SD 475 出土遺物 (第33図、第5表、図版20)

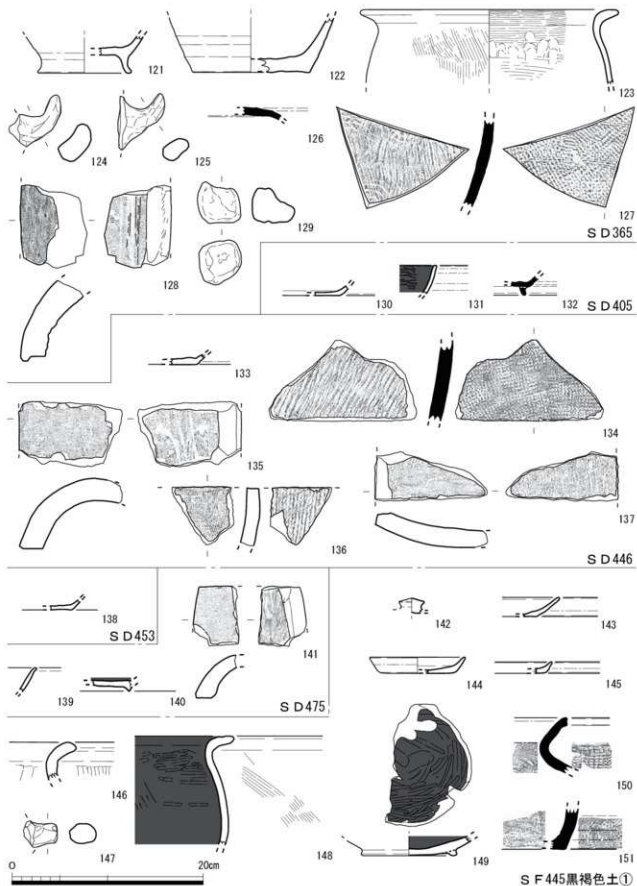
139は土師器の坏で、摩耗著しい口縁部の破片である。140は黒色土器A類の壙で、高台をナデ接合した底部片である。141は丸瓦である。基部の破片とみられ、凸面はナデ消しを施す。

SF 445 黒褐色土出土遺物 (第33・34図、第5・6表、図版20)

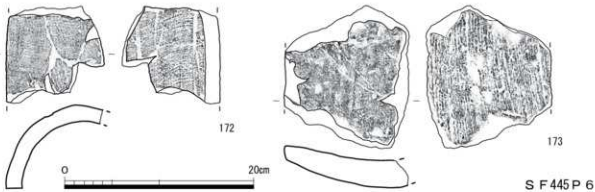
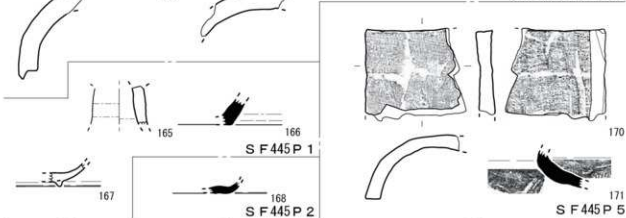
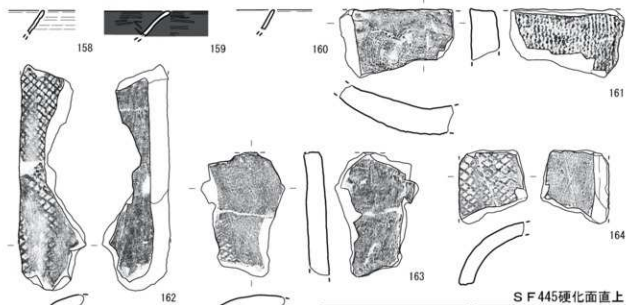
142～147は土師器で、142は坏蓋の摘み、143はへら切り底の皿で、外面に黒斑を有する。144と145は小皿で、前者はへら切り底、後者は糸切り底である。144は内面に門歯痕が見られる。146は甕の口縁部、147は把手の破片である。148と149は黒色土器A類で、148は甕、149は壙である。いずれも、内面にヘラミガキを施す。150～152は須恵器で、150は甕の口縁部、151は壺の底部の破片である。150は、硬化面直上やP6出土の破片と接合した。152は壺の胴部の破片だが、胎土が硬質で、色調から陶器の露胎部の可能性がある。153は縄目文叩きの平瓦の側面部片である。

SF 445 波板状凹凸面出土遺物 (第34図、第6表、図版20・21)

154は土師器の甕で、底部片の外面に黒斑が見られる。155と156は須恵器で、それぞれ坏と壺の底部である。156は外面に自然軸が附着する。157は青磁碗の口縁部の破片である。灰黄色の比較的硬い胎土で、貿易陶磁器とみられる。



第33図 出土遺物実測図⑥ (1/4)



第34図 出土遺物実測図⑦ (1/4)

S F 445 硬化面直上出土遺物 (第34図、第6表、図版22)

158は土師器杯の口縁部片。159は黒色土器B類の皿の口縁部片で、内外面にヘラミガキを施す。160は緑釉陶器の口縁部片で、角度から碗と考えられる。161～164は古瓦である。161のみ平瓦で、縄目文叩きを施す。162～164は丸瓦で、いずれも斜格子文叩きを施す。ただし、162は摩耗が著しく、163は叩きをナデ消す。

S F 445 ビット出土遺物 (第34・35図、第6表、図版22・23)

165～167はP1からの出土遺物である。いずれも細片で、165は土師器高杯の脚部、166は須恵器の壺の底部、167は緑釉陶器の碗の底部である。167はP6出土破片と接合した。168と169はP2から出土した遺物で、168は杯の底部、169は緑釉陶器の底部とみられる細片である。168はP1出土の細片が接合した。170と171はP5からの出土遺物で、170は縄目文叩きをスリ消す丸瓦、171は須恵器の甕の頸部片である。172と173はP6から出土した古瓦である。172は丸瓦、173は平瓦で、いずれも縄目文叩きをスリ消す側面部片である。172は170と色調や胎土が類似し、同一個体の可能性がある。173は凹凸面ともに摩耗する。174～176はP8からの出土遺物である。174は土師器の杯蓋の摘み、175はP10出土破片と接合した須恵器の杯の口縁部である。176は平瓦の側面部片で、縄目文叩きをスリ消し、側面部をヘラで調整する。177と178はP9から出土した遺物で、177は土師器の把手の破片、178は緑釉陶器の碗の口縁部である。179はP10出土の須恵器鉢の底部片である。180と181はP12から出土した遺物である。180は須恵器の甕の胴部片で、P11出土の破片と接合する。181は縄目文叩きを施す平瓦の側面部片である。182と183は、P13からの出土遺物である。182は縄目文叩きをスリ消す平瓦の破片。183は土製の丸玉で、外面はスズで黒変する。

S F 445 掘方出土遺物 (第35図、第6表、図版23)

細片が多く、図示できたのは184と185のみである。184は、ヘラ切り底の土師器の杯の底部片。185は須恵器の甕の胴部片である。

S I 133 出土遺物 (第35図、第6表、図版23・24)

図示できたのはいずれも土師器である。186は杯蓋の口縁部片で、ハケ目の痕跡がある。187はヘラ切り底とみられる皿の底部片。188は甕の底部で、底部外面には縄跡の痕跡が見られる。

S K 80 出土遺物 (第35図、第6表、図版24)

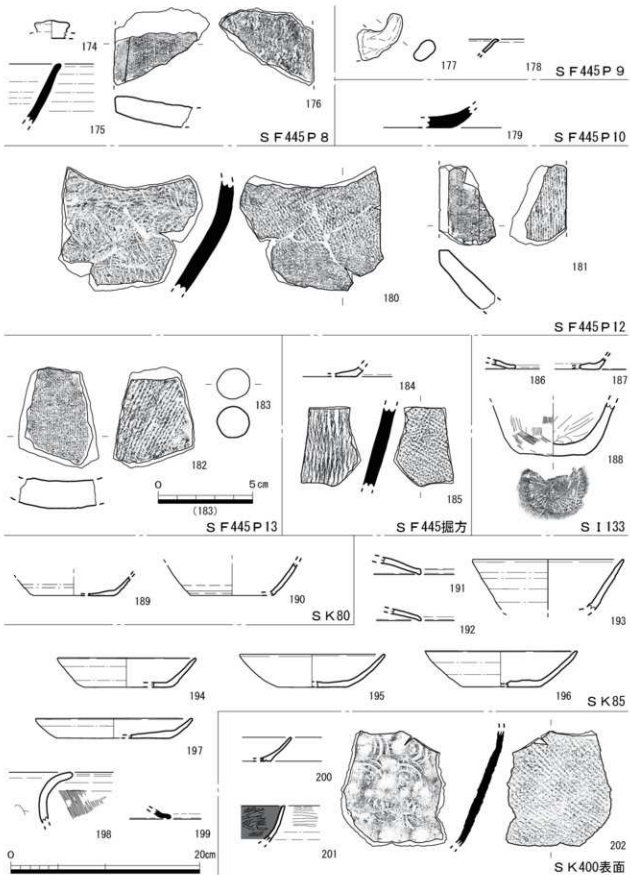
図示できたのは土師器の杯と碗の底部各1点のみである。189は杯の底部で、ヘラ切り底とみられる。190は碗の底部片で、わずかに残存する底部の端から、削り出し高台の筑後型碗と考えられる。

S K 85 出土遺物 (第35図、第6・7表、図版24)

191と192は、土師器の杯蓋の口縁部である。193は土師器の碗、194～196は土師器の杯、197は土師器の皿で、いずれも図上で反転復元した。196は摩耗して不明だが、底部が残存する194と195、197はヘラ切り底である。198は土師器の甕、199は須恵器の杯蓋で、いずれも口縁部の破片である。

S K 400 表面出土遺物 (第35図、第7表、図版24)

200は土師器の杯でヘラ切り底。201は黒色土器A類の碗の口縁部片で、内外面ともにヘラミガキ



第35図 出土遺物実測図⑧ (1/2、1/4)

を施す。202は須恵器の甕の胴部片で、器壁の凹凸が著しい。

S K 400 出土遺物 (第36図、第7表、図版24・25)

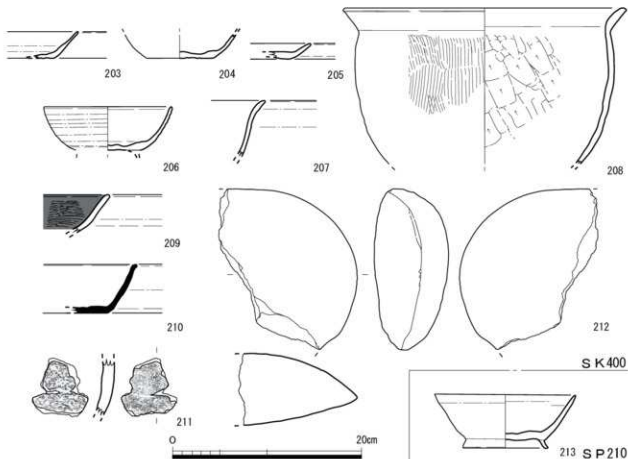
203と204は土師器の坏である。いずれもヘラ切り底で、203は口縁部に油煙、204は内面に門歯痕がみられる。205は土師器の皿。206は土師器の埴で、高台は剥離し内面に門歯痕が残る。207は土師器の鉢の口縁部、208は土師器の甕で、外面はススが残る。209は黒色土器A類の埴で、内面にヘラミガキを施す。210は須恵器の坏で、二次被熱を受けるほか、底部外面はナデ調整を施す。211の土製品は、内面に藁痕跡が残り、外面の一部が被熱で変色している。甕の破片の可能性もあるが、藁痕跡があることから、器種不明の土製品とした。212は玄武岩製の磨製石器で、明瞭な稜線を有する。外面にススが付着しており、台石の可能性もある。

S P 210 出土遺物 (第36図、第7表、図版25)

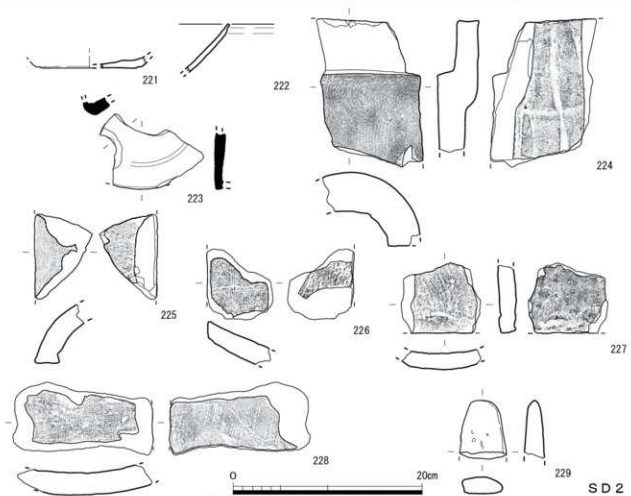
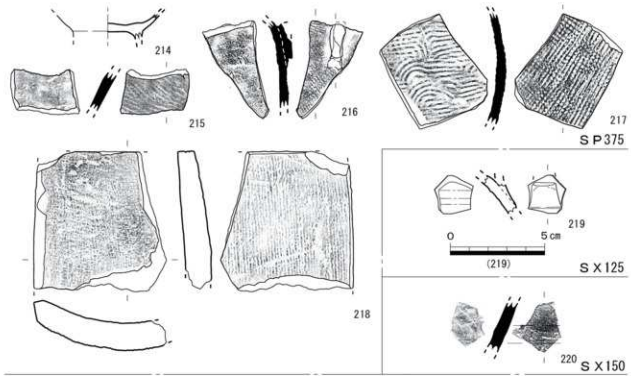
出土したのは、土師器の埴213のみである。ヘラ切りで板状圧痕が残る底部に、回転ナデで高台を接合する。明瞭な使用面は無いが、底部はやや歪み、内面に門歯痕が残る。

S P 375 出土遺物 (第37図、第7表、図版25)

214は土師器の埴の底部片。215と216は須恵器の壺である。215は胴部片で、216は肩部の耳が接合する箇所破片である。217は須恵器の甕の胴部片で、被熱により風化する。218は平瓦の角部で、凸面に縄目文叩き、側面と小口面にヘラ調整を施す。



第36図 出土遺物実測図⑨ (1/4)



第37図 出土遺物実測図⑩ (1/2, 1/4)

S X 125 出土遺物 (第 37 図、第 7 表、図版 25)

出土遺物は細片ばかりで、わずかに 219 の緑釉陶器のみ図示できた。貼付取手の基部がわずかに残存することから、水注の肩部片と考えられる。

S X 150 出土遺物 (第 37 図、第 7 表、図版 25)

図示できたのは、220 の須恵器壺のみである。胴部片で、外面はヘラケズリ、内面は縦方向の工具によるナデを施す。壺の胴部でも、比較的底部に近い箇所の破片と考えられる。

S D 2 出土遺物 (第 37 図、第 7 表、図版 26)

221 は土師器の坏の底部で、回転ヘラ切りの痕が明瞭に残る。222 は土師器の壺の口縁部で、口縁端を細く調整している。223 は須恵器の平瓶の天井部で、接合痕が観察できる。224 ~ 228 は古瓦の破片である。224 と 225 が丸瓦、226 ~ 228 が平瓦で、上層から出土した 228 以外の 4 点は、溝底面の礫群から出土した。大半が凸面に縄目文叩きスリ消しで調整するが、227 のみナデ調整を施す。凹面には、コビキ痕が残る 227 以外は、布目痕が残る。229 は磨製石斧の基部とみられる破片で、片岩を縦目方向に成形する。

S D 40 出土遺物 (第 38 図、第 7 表、図版 26・27)

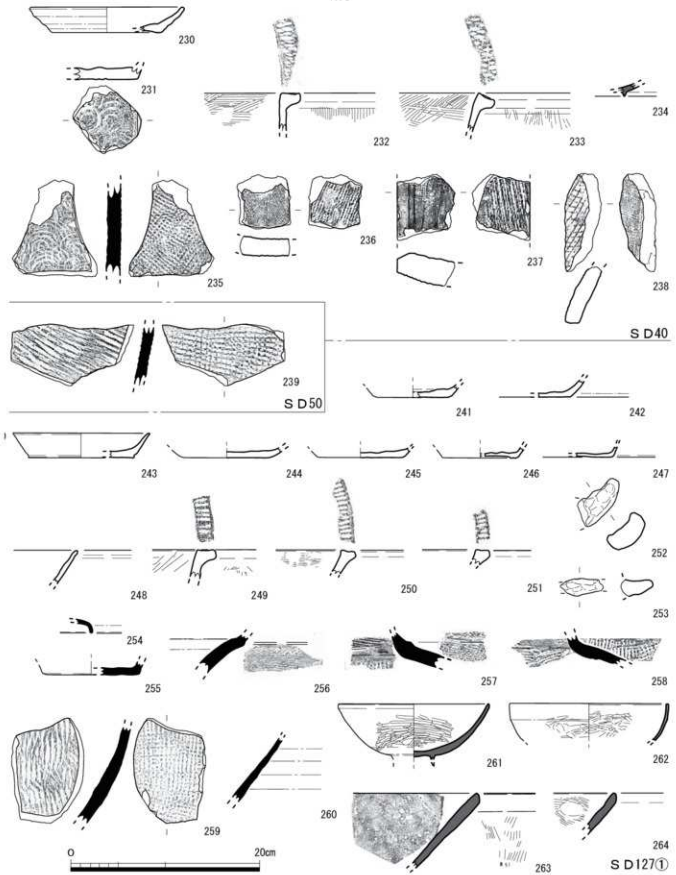
230 は土師器の皿である。底部は糸切り底で板状圧痕が見られるほか、内面に粘土粒が付着する。231 は土師器壺の底部片で、内面に同心円文叩きが残る。232 と 233 は土鍋の口縁部片である。外面は被熱して風化しており、黒変する。なお、これらの口縁部片に接合しないが、胎土や二次被熱の状態が類似する破片が約 20 点出土している。234 は瓦器壺の高台の細片で、摩耗が著しい。235 は須恵器甕の胴部片。236 と 237 は平瓦で、236 は凸面に縄目文叩きを施す。237 は縄目文叩きをスリ消し、側面に破断面が残る側面部片である。238 は、斜格子文叩きを施す丸瓦の側面部片である。

S D 50 出土遺物 (第 38 図、第 7 表、図版 27)

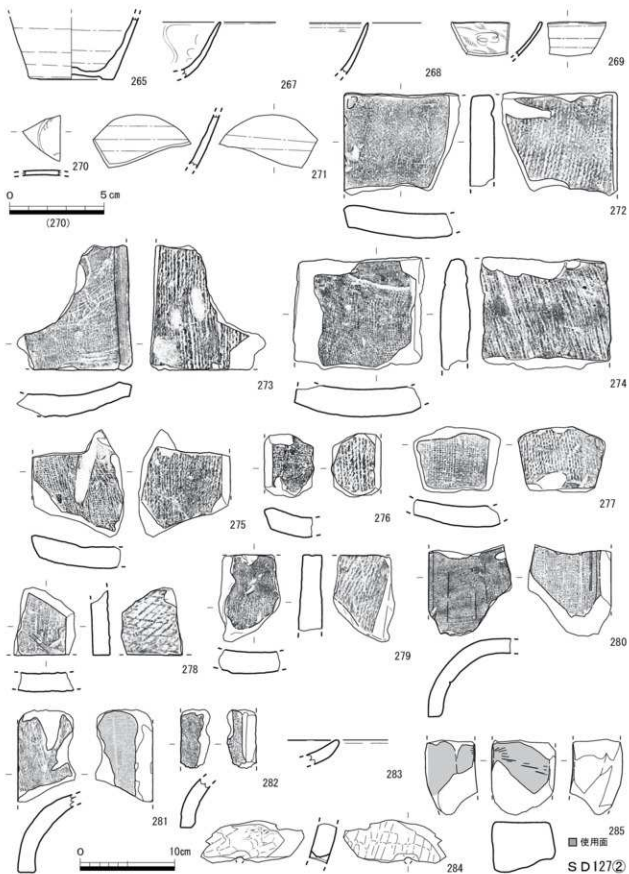
239 は須恵器甕の胴部片で、内面の一部にスガが残る。240 は陶磁器の碗の細片である。外面は被熱しており判然としないが、文様らしきものが観察できる。

S D 127 出土遺物 (第 38・39 図、第 8 表、図版 27 ~ 29)

241 と 242 は土師器坏の底部片である。いずれもヘラ切り底で、242 は板状圧痕がみられる。243 ~ 247 は、土師器の皿や小皿である。いずれも図上で反転復元しており、摩耗して不明の 247 の他は糸切り底である。244 は板状圧痕が残るほか、外面にスガが付着する。246 は焼け歪み、外面は摩耗する。248 は壺の口縁部片で、口縁端を細く整形する。249 ~ 251 は土鍋の口縁部片である。いずれも外面は被熱しており、口縁部に圧痕が残る。また、249 と 251 は外面にスガが付着する。252 と 253 は把手の破片で、253 は扁平である。254 は須恵器蓋の口縁部片。255 は須恵器壺の底部片で、底面には工具によるナデ調整を施す。256 ~ 259 は須恵器甕の破片である。256 は口縁部で、波状文が施されており、内外面ともに灰を被る。257 と 258 は肩部の破片で、257 は叩きの上から突帯を貼り付ける。259 は胴部片である。260 は捏鉢の破片で、回転ナデにより比較的薄手に仕上げられている。261 と 262 は瓦器壺である。いずれも内外面にヘラミガキを施し、特に 262 は丁寧な調整と焼成で、



第38図 出土遺物実測図① (1/4)



第39図 出土遺物実測図⑫ (1/2、1/4)

内外面ともに光沢を帯びる。また、261は外面に黒斑がみられる。263と264は瓦器の捏鉢である。いずれも口縁部の破片で、外面を中心に摩耗が著しい。265は緑釉陶器の壺の底部で、削り出して上げ底状になっている。内外面共に施釉されるが、外面底部は露胎である。266は灰釉陶器の細片で、比較的硬質な須恵質の胎土である。267～270は貿易陶磁器で、267～269は碗の口縁部である。267は青白磁と呼べる薄い色の釉薬を施す龍泉窯系青磁碗で、内面に割花文がみられる。268も龍泉窯系青磁碗で、内面に櫛描文を施すが、被熱により器壁が荒れている。269は白磁碗で、口縁部は輪花状に整形され、内面に櫛描文を施す。270は白磁合子蓋の天井部である。細片だが、外面には陽刻による文様が残る。271は陶器の壺とみられる胴部片である。内外面共に褐釉を施す。褐釉壺と考えられるが、破片のため直径などの詳細は不明瞭である。272～279は平瓦である。272～274は基部の角部、275と276は側面部、277は中央部、278と279は小口部の破片である。凸面は276が縄目文叩き、278が斜格子文叩きを施すほかは、いずれも縄目文叩きをスリ消す。凹面には布目を有するが、273は緩じ痕、275は縄の痕跡があり、274と278、279は布目の一部をナデ消す。280～282は九瓦である。凸面は280が調整をナデ消し、281と282は縄目文叩きをスリ消す。凹面には布目を有し、280は面取りする。283はナデ調整のミニチュア土器で、外面にススが付着する。被熱や金属滓の付着は認められないが、調整や法量、形状から、増埴の可能性はある。284は滑石製石鍋の破片である。外面は縦方向に削った痕跡が残るが、内面は横方向に粗く削った痕跡が調整されずに残る。また、内外両方から穿孔されており、穴には鉄分が付着する。285は砂岩製の磁石で、2面に砥面があり、擦痕が残る。

SK 14 出土遺物 (第40図、第9表、図版29・30)

286は土師器の坏の底部片である。焼け歪みが著しく、底面は糸切りの未調整のまま残す。287と288は土師器の小皿である。いずれも糸切り底で、288は一部をナデ消す。共に焼け歪んでおり、底部が膨らむ。289と290は土鍋の口縁部である。いずれも圧痕がみられ、290は外面に黒斑が残る。291と292は瓦器碗である。いずれも内外面に、ヘラミガキを施す。291は焼成不良で焼け歪み、内外面に黒斑がみられる。293は、貿易陶磁器の側面部片である。内面には櫛描きによる飛雲文が施されており、オリーブ黄色の釉薬からも、龍泉窯系青磁碗と考えられる。

SK 235 出土遺物 (第40図、第9表、図版30)

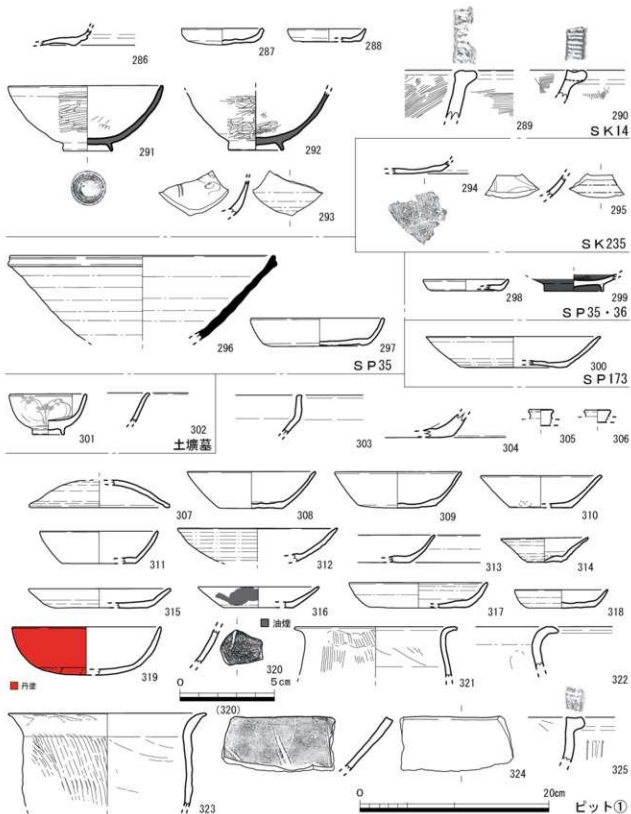
294は、土師器の坏の底部片である。糸切り底で、一部をナデ消す。295は貿易陶磁器の破片である。内面に蓮華文を施し、オリーブ黄色の釉薬から、龍泉窯系青磁碗と判断できる。

SP 35 出土遺物 (第40図、第9表、図版30)

296は須恵器の捏鉢で、玉縁状の口縁を有するが、片口とみられる歪みは見当たらない。297は土師器の坏で、糸切り底で板状圧痕が残る。また、内面には門歯痕がみられる。

SP 35・36 出土遺物 (第40図、第9表、図版30)

298と299は、SP 35とSP 36をまとめて検出した際に出土した遺物である。298は土師器の小皿で、底部はナデ消す。299は黒色土器B類の碗の底部片で、内面にヘラミガキを施す。



第40図 出土遺物実測図⑬ (1/2, 1/4)

SP 173 出土遺物 (第40図、第9表、図版30)

出土したのは、300の土師器の皿のみである。底部は糸切り底でやや歪み、内面に門歯痕が残る

土墳墓出土遺物（第40図、第9表、図版30）

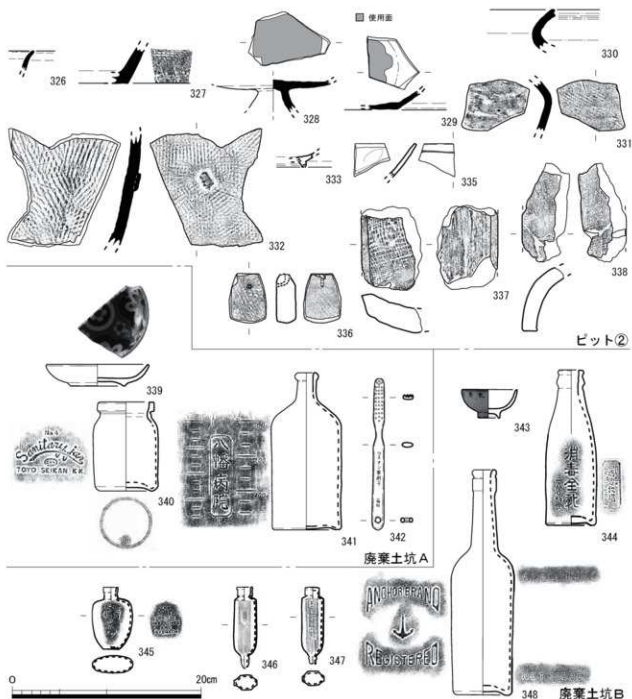
完掘したのはS T 6のみで、出土遺物はいずれも細片ばかりだったため、図示できたのは2点のみである。301は、S T 5出土の染付碗である。完形品で外面は釉葉が垂れ、高台の一部は露胎である。302はS T 9出土の陶器碗の口縁部で、暗い緑釉を施す。

ピット出土遺物（第40・41図、第9・10表、図版30～33）

303と304は弥生土器である。303は直立する口縁部の破片で、弥生時代後期前半にみられる高坏の口縁部片と考えられる。304は甕の底部片で、内面にケズリの痕跡があるほか、外面の一部は黒変する。305～307は土師器の坏蓋である。305と306は摘みの破片である。307は口縁部から頂部にかけての破片で、口縁部はわずかに段を有する。308～313は土師器の坏である。312は坏蓋307と同じS P 97から出土した。底部が欠損する312と摩耗する313以外は、いずれもヘラ切り底である。308は板状圧痕が残り、310はヘラ切り調整をナデ消す。310は外面に指頭の痕跡があり、黒斑がみられる。313は内面に黒色の付着物が残る。314は、土墳墓群そばのS P 30から出土した土師器の小坏である。糸切り底で法量や器形が他の坏と異なる。胎土も比較的精良で、水引の痕が見られる。315～317は土師器の皿である。315と316はヘラ切り底で、317は糸切り底である。316は外面に油煙の痕がみられる。318は、糸切り底を有する土師器の小皿である。319は土師器の壺である。底部を手持ちヘラケズリで調整し、外面に丹塗りを施す。320は土師器皿316と同じS P 191から出土した、土師器の坏もしくは壺の細片である。外面に「※」状の刻書がみられる。321～323は土師器の甕である。いずれも口縁部から胴部の破片で、322は内外面にススが付着する。324は土師器の播鉢の口縁部片である。内面に播目が残り、内外面は二次被熱で橙色を呈す。325は、土師器皿317と同じS P 452から出土した、土鍋の口縁部片である。口縁部の平坦部にわずかに圧痕が残り、内外面ともに被熱する。326は須恵器の坏の口縁部片で、327は須恵器壺の口縁部片である。328と329は転用碗である。328は須恵器高坏、329は須恵器皿を転用しており、いずれも内面に硯面が残る。330～332は須恵器の甕である。330は口縁部片で、自然釉を被る。331と332は胴部片で331は摩耗が著しく、332は外面に窯壁が付着する。333と334は、緑釉陶器である。333は碗の高台部分である。334はS P 100からの出土で、細片だが両面とも施釉される。335は貿易陶磁器の口縁部片で、灰オリーブ黄色の釉葉に片彫の蓮華文を施す、龍泉窯系青磁碗である。336は平瓦を転用した土製椀である。布目叩きとヘラ切りが残り、L字状の穿孔を施す。337は、S F 445に後出するS P 409から出土した平瓦である。側面部片で、凸面は縄目文叩きをスリ消す。338は、土師器甕323と同じS P 383出土の丸瓦である。

廃棄土坑A出土遺物（第41図、第10表、図版33）

調査区北東部から東部に点在する近代の廃棄土坑とみられる遺構からは、多数の陶磁器やガラス瓶が出土した。そのため、掘削時にアルファベット順で記号（A～Qの11ヶ所、Oは欠番）を付し、残存状況の良い陶磁器や、形状や陽刻などで用途や商品名が明らかで、かつ完形で出土したガラス製品を取り上げた（注1）。なお、同一の形状で複数個出土したガラス瓶は、状態の良い瓶を選別し



第41図 出土遺物実測図⑩ (1/2, 1/4)

ており、報告にあたってさらに厳選した。また、アルファベットを付した攪乱の内、攪乱Eは出土遺物無し、攪乱G・I・K～Qは陶磁器やガラスの細片、混入した中世以前の遺物のみの出土に留まるため、攪乱I出土の硬貨を除き、今回の報告では省略した。以下、主に久留米市内および福岡県内の出土例と比較しながら、簡単に補足する。

339は磁器の小皿である。口錆を施し、内面にクロム軸で文様を印刷する。

340と341はガラス瓶である。340は胴部に陽刻で「Sanitary jar (衛生瓶)」「TOYO SEIKAN K. K. (東洋製罐株式会社)」とある。楕円に「CAN」と書かれた、大正6

年(1917)創業の東洋製罐の社章もある。具体的な内容物の表示は無いが、透明で広口であることから、食品の瓶詰の瓶と判断した。341は処方薬の瓶で、小判形の断面を有する。気泡を含む無色透明で、胴部に目盛りと「八幡醫院」の陽刻がある。処方薬の瓶は廃棄土坑Cでも出土したが、341はこれらに比べて目盛りの両端が尖っており、縦方向の線が無いなど、比較的簡略化されている。

342は骨角製の歯ブラシの柄である。植毛は失われているが、「ライオン歯刷子 一號形」と刻書がある。ライオン歯磨本舗(現・ライオン)が昭和2年(1927)に発売したライオン歯刷子で、一號形は六號形までである中で最も大形の成人男性用の歯ブラシである(注2)。なお、同社の歯ブラシは耐熱性から、大正6年以降骨製に統一したという記述が社史にあったため、骨角製品と判断した。

廃棄土坑B出土遺物(第42図、第10表、図版33)

343は色絵盃で、口縁部に桃色の軸とともに「鐵道開通記念 大井村」と書かれている。

344は牛乳瓶である。王冠栓の瓶に、「消毒全乳 一八〇珎(ミリリットル)入」「東櫛原町 明治牧場 電話一、〇七五番」と陽刻があり、昭和6年(1931)10月に創業した合資会社明治牛乳所(注3)の牛乳瓶と考えられる。法量や口縁部が類似し、「東櫛原町 消毒済」の陽刻がある牛乳瓶が京限侍屋敷遺跡第20次調査で出土した(注4)。

345は、褐色透明に細い楕円形の断面を有する薬瓶である。胴部に陽刻があり、片面には「健胃整腸 ヘルプ」、反対側には「THE SHIELD FOR THE INTESTINES AND STOMACH(腸と胃のためのシールド)」とある。津村敬天堂(現・ツムラ)が明治40年(1907)に販売を始めた胃腸薬ヘルプの瓶である。なお、ヘルプの瓶は数種類あるが、出土遺物と同型品の瓶は、「AND」のNが鏡文字のHになっていることで特に知られている。346と347は目薬瓶である。いずれも青色透明の瓶で、点眼器が一体となった両口式点眼瓶である。両方とも、ラベルを添付するための盾形の陽刻が胴部にあり、信天堂山田安民薬房(現・ロート製薬)が昭和6年に販売を始めたロート目薬の目薬瓶である。346の基部は、ゴム球を付けるために空洞となっており、347は、盾形の陽刻に加え胴部に「EYE ROTION ROHTO(ロート目薬)」と、「S 13」の陽刻がある。ただし、346と異なり基部がガラスで覆われた一口タキ式点眼瓶で、市村慎太郎氏の分類のB b 2(中)類にあたる(注5)。物資不足から、ゴム球と点眼部の蓋が廃止された昭和10年代半ば以降の瓶で、出土した瓶も気泡を多く含み、胴部がくびれるなど粗い作りである。なお今回は割愛したが、346・347よりも若干小形で紺色透明の精良なガラスに、「EYE WATER ROHTO」の陽刻がある瓶が廃棄土坑Cから出土した。

348はソース瓶である。胴部に錨と「ANCHOR BRAND」「REGISTERED」(登録商標)、肩部に製造元の山城屋の略称である「K. Y. & COMPANY」と書かれた、イカリソースの瓶である。イカリソースの瓶は、久留米城下町遺跡第16次調査でも出土した(注6)が、瓶の法量や口縁部の形状、陽刻の英文や錨の形状が異なる。イカリソースは明治29年(1896)から販売が始まった(注7)が、348の錨のマークは、錨上部の鉤状の部分の先端に丸がついた昭和初期のマークである。なお図示していないが、廃棄土坑Hから同じ陽刻で180cc入りの小形品が出土している。

廃棄土坑C出土遺物 (第42・43図、第10・11表、図版33～36)

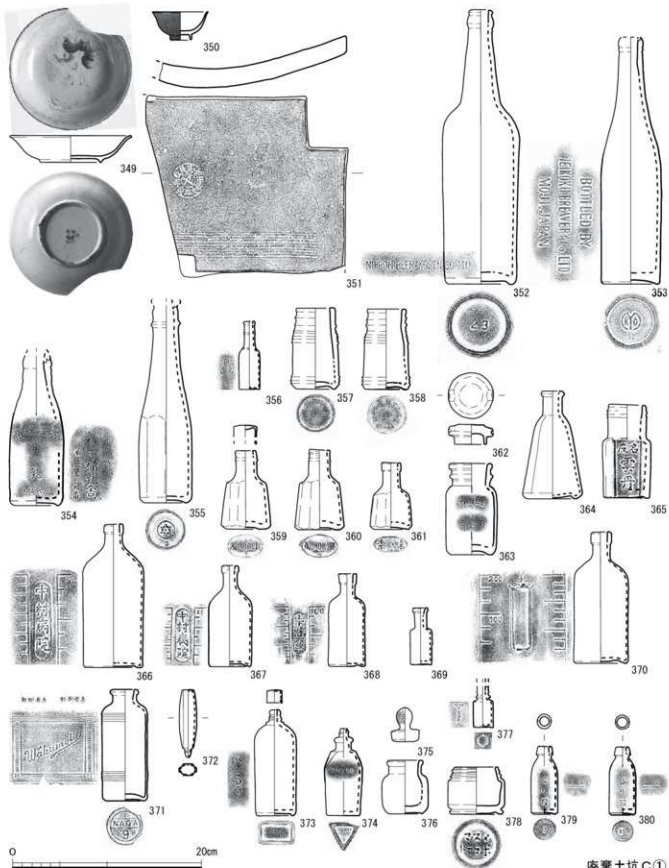
349は色絵の中皿で、高台内部に「(硬)質陶器 TOKUSE (I)」と蝶の文様が印刷された硬質陶器である。内面の釉薬が銀化しており、被熱を受けた可能性がある。350は染付の盃で、端反で外面に薄い呉須を施す。外面には桜花の陽刻・陰刻と共に、本居宣長の短歌「敷島の 大和心を 人とはば 朝日に匂ふ 山桜花」の一節が書かれている。兵役を満期除隊した記念に、知人や隣家などに配られていた退役記念盃で、1930年代以降のものである(注8)。

351は平瓦である。凸面に「ヤ 筑後城島・洪田安次郎製」と印刻がある。洪田瓦工場は城島町で大正2年(1913)に創業しており、現在も同地で操業している(注9)。なお図示していないが、同じ「筑後城・洪田安…」の陰刻で中央の「ヤ」が「徳」になっている平瓦片を表採した。

352は褐色透明のビール瓶である。底部近くに「NIPPON BEER KOSEN CO. LTD」と書かれており、大正10年(1921)に設立され、昭和8年(1933)に大日本麦酒(現・アサヒビール、サッポロビール)に吸収合併された日本麦酒醸造のビール瓶である(注10)。同社のガラス瓶は、サイダー瓶とみられる無色透明の瓶が櫛原侍屋敷第3次調査で出土した(注11)。なお、今回の出土遺物は底部に「23」とあるが、「2:3」と陽刻がある瓶が上本町遺跡(田川市)で出土している(注12)。353は黄緑色透明の飲料瓶で、胴部に「BOTTLED BY TEIKOKU BEER, MOJI, JAPAN(帝国麦酒製造、門司、日本)」と陽刻がある。大正2年に門司市(現・北九州市門司区)で設立され、昭和5年(1930)に桜麦酒に改名(後に大日本麦酒に吸収合併)(注13)した帝国麦酒の瓶である。色調が黄緑色透明であることから、ビール以外の飲料、特に同社が販売していた炭酸飲料ミヨシノレモンの瓶と考えられる。

354は牛乳瓶で、不鮮明だが「高温殺菌 全乳 一、八分(デシリットル)入」「東櫛原町 松下精乳舎 電話二五六七番」と陽刻がある。元久留米藩士の松下為敏が、大正時代に篠山町で創業した松下精乳舎(後に久留米ミルクプラント)の牛乳瓶である(注14)。

355～361は調味料の瓶である。355は製造者や商品の名称が見当たらないが、底部に丸に六芒星の陽刻がある。丸に六芒星の商標は、大正6年に愛知トマトソース製造合資会社(現・カゴメ)が登録出願した商標(注15)で、瓶の形状も後述する396に類似する。これらの特徴から、大正14年(1925)に同社が発売したトマトソースの瓶と想定できる。356は小瓶で、縦書きで「白玉ソース」の陽刻がある。白玉ソースは、明治31年(1898)に野村洋食料品製造所(後に野村専次商店)が販売を始めた(注16)ソースで、松崎城跡(福岡県小都市)で高さ約20cmの瓶が出土している(注17)。357と358は、いずれも底部に「東京中野・食品工業株式会社」とある。松崎城跡でも同形品が出土しており、大正8年(1919)に設立された食品工業(現・キュービー)が大正15年(1925)に製造を始めた、キュービーマヨネーズの瓶である。この瓶は今回の調査で10点以上出土した。358は紙製の芯に鉄製の栓が残存していた。359～361は10点以上出土した、味の素の瓶である。底部の陽刻がローマ字の「AJI NOMOTO」でネジ式の栓の瓶(359・360)と、日本語の「味の素」でコルク栓の比較的小形の瓶(361)で大別される。前者は松崎城跡や中原田遺跡で、後者は久富市ノ玉遺跡(注18)で



第42図 出土遺物実測図⑩ (1/4)

廃棄土坑C①

も出土している。359は栓が残存していたが、360はネジの形状が359と異なり、松崎城跡で出土した瓶に類似する。底部も360の方が359よりも若干厚い。361は口縁部に銀紙が付着している。こうした小形のガラス瓶は、大正時代から昭和初期に味の素の缶や瓶の種類を、値段とともに整理した際に導入され、昭和15年(1940)に物資不足で一時廃止されたのち、昭和26年(1951)まで製造されたという(注19)。

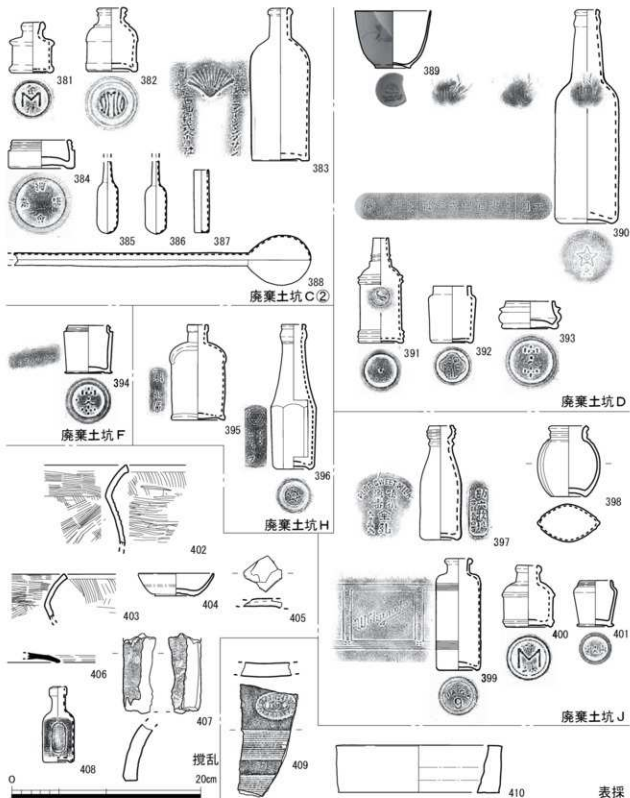
363は、蓋362が伴い、「TABLE SALT(食卓塩)」の陽刻を有する瓶である。類似品が有田遺跡(福岡市早良区)で防空壕から出土しており(注20)、ガラスの色調も類似する。しかし、遺物実測図を比較すると、法量は有田遺跡出土品の方が一回り大きいほか、器壁は363の方が厚い。

364と365は食品用の瓶である。364は、八面体の青緑色透明のガラス瓶である。昭和2年創業のカメセ水産営業所(現・カメセ水産)のふりかけ式青海苔の瓶に類似しており、同様の食品瓶と判断した。365は「名産 雲丹」と書かれたウニの瓶である。同形品が直方市中原田遺跡で出土した(注21)ほか、久留米市内でも類似する形状で器高が高い瓶が日詰遺跡(注22)で出土した。

366～370は処方薬の瓶である。いずれも口部が小さく、369以外は目盛を有する。断面は、366と367が小判形、その他は円形である。いずれも気泡を多く含み、表面の凹凸が目立つ。367はガラスが垂れており、368は上げ底の底部が膨らむなど、特に粗い作りである。366と367は「中村病院」、368は「山下 内科小児科醫院」と陽刻があるほか、370はラベルを貼りつけるための浮彫がある。

371と372は市販薬の瓶で、陽刻で頸部に「わかもと」、胴部に筆記体で「Wakamoto」底部には「2 NAGA 998」と陽刻がある。昭和4年(1929)に「若素」の名称で販売が始まり、昭和6年に栄養と育児の会(現・わかもと製薬)が販売を始めた整腸剤わかもとの瓶で、昭和10年代の瓶である。372は無色透明で、口縁部が346や347と同様の点眼器を兼ねた形状を呈す。陽刻は皆無だが、347と同様の一口タキ式点眼瓶と考えられる。

373～378は化粧瓶である。373は緑色透明の角型の瓶で、側面に縦書きで「ヘチマコロン」と陽刻されている。大正4年(1915)に天野源七商店(現・ヘチマコロン)が販売を始めた、ヘチマコロンの瓶である。今回出土した瓶は、底部に「登録商標 180300」の陽刻がある昭和9年(1934)以降の瓶で、ネジ式の栓に樹脂製の蓋が残る。なお、昭和9年以前のコルク栓の瓶が久留米城下町遺跡第17次調査で出土している(注23)。374は断面が三角形を呈し、胴部に「VITA-OL」と陽刻がある。大正8年に松浦啓結が創業した松浦商店(現・松浦)が販売した、液体ポマードピタオールの瓶である。底部に「意匠登録 42328」とあるが、同じ番号で「三角瓶」の意匠登録が昭和4年3月20日に松浦啓結によって出願され、6月21日付で登録されている。以降、同じ番号で昭和6年3月18日と4月30日に三角瓶、昭和7年(1932)9月30日に「三角「ポマード」容器ノ形状」が類似意匠として追加登録されている(注24)。375と376は一对の白色の化粧瓶で、蓋には花柄の陽刻を施す。377は無色透明で正方形の断面の瓶で、底部に星状の模様、胴部に「KIN TSURU」と陽刻されている。大崎組商会在明治20年代に販売を始め、昭和2年に金鶴香水(現・マンダム)に継承された金鶴香水の瓶である(注25)。378は白色の瓶で、底部に右書きで「メヌマポマード」と



第43図 出土遺物実測図⑩ (1/4)

陽刻がある。大正6年に井田京栄堂が販売を始めた、メヌマポマードの瓶である。メヌマポマードの瓶は、白色ガラスで底部に陽刻を有する瓶が鉄砲小路遺跡第2次調査(注26)でも出土したが、今回出土した瓶と比べ法量が小さく、外面胴部に文様を施している

379と380は、無色透明の白髪染の瓶である。口縁部は、留め具をはめるための刻み目が2ヶ所あるコルク栓で、胴部には「定量」と横線、「りり羽」の陽刻がある。明治44年に石井成功堂（現・ヘンケルジャパン）が発売した（注24）、白髪染り羽の瓶である。同形の瓶は、日誌遺跡や白川遺跡（未報告）など市内でも出土例があるほか、中原田遺跡でも同型品が出土した。りり羽の瓶は、「る」の字体で数種類に分類できることが指摘されているが、今回の出土遺物は日誌遺跡の出土遺物と同じ字体である。379と380の違いは底部の番号で、前者は「3」、後者は「15」と陽刻されている。

381と382はインク瓶である。381は、不鮮明だが底部に「登録 M」と陽刻があり、大正6年に丸善インキ（現・丸善雄松堂）が販売を始めた丸善アテナインキの瓶とみられる。同形品が松崎城跡で出土した。382は底部に「SIMCO」とあり、明治17年（1884）に篠崎又兵衛商店として創業した篠崎インキ製造が販売していた、ライトインキやチャムピオンインキの瓶とみられる。

383は無色透明で、断面が歪み不整形円形を呈する瓶である。器壁は凹凸が著しいが、胴部に陽刻で「ライジングサン石油株式会社」と書かれており、明治33年（1900）に設立されたライジングサン石油（後にシェル石油、現・出光昭和シェル）の瓶であることが分かる。同社が登録商標としていた貝印（シェルマーク）も、陽刻で表現されている。同社の久留米販売部は、明治44年（1911）時点で國武町（現・荘島町）にあった（注28）。ライジングサン石油は昭和5年から機械油の販売を積極的に始めたということから、出土したガラス瓶は揮発油や機械油といった鉱油の瓶と考えられる。

384は薄緑色透明の広口で底の浅い瓶で、底部に「被服協会」とある。被服協会は、洋装の普及を通して軍服の調達に必要な資源や技術の振興を図る目的で、昭和4年に陸軍省経理局が設置した組織である。昭和17年（1942）まで発行された協会誌『被服』には、軍服を納品していた繊維業者に加えて、革靴など皮革製品の製造業者の広告が掲載されていたという（注29）ことから、出土した瓶は靴墨などの用途が想定でき、靴墨用のクリーム瓶と判断した。

385～388は、用途がはっきりしない製品を図示した。385と386は青色透明で、円形の断面を有する。厚さは1mmで折損する口縁部の厚さは1mmに満たない。アンプル瓶に類似するが、折損部がアンプル瓶と異なることから、不明製品とした。387は無色透明の円筒型の製品で、こちらも具体的な用途は不明である。388も無色透明で、細長い管の先端に球状のガラス玉が付く。平面形はゴム風船型に類似する（注30）が、楕円形の断面のゴム風船型と異なり、円形の断面を有する。プラスチックの形から実験器具と想定できるが、比較的薄手で根拠に乏しい。

廃棄土坑D出土遺物（第43図、第11表、図版36）

389は色絵の湯呑である。底部に「東洋陶器会社」（現・TOTO）の社名と、大正6年から大正10年まで使われた商標が印刷されている。390は薄緑色透明の飲料瓶である。底部付近の胴部に「大日本麦酒株式会社製造」、肩部に大日本麦酒のイニシャルD・B・Kを合成した商標が陽刻されており、明治39年（1906）に創業した（注31）、大日本麦酒の瓶であることが明白である。ビール瓶に比べて小さいことから、353と同様にビール以外の飲料瓶、特に明治42年（1909）から販売を始めたシトロン（大正4年にリボンシトロンに改名）、または明治44年（1911）に販売を始めたリボンナボ

リンの瓶とみられる(注32)。なお、法量や色調が類似する瓶は、十間屋敷遺跡第10次調査でも出土している(注33)。391～393は化粧瓶である。391は、無色透明の瓶である。コルク栓で、瓶の中にコルクが入ったまま出土した。胴部には、金鶴香水の商標である「丸に鶴」(注34)が陽刻で描かれており、同社の製品とみられる。392も無色透明の瓶で、外部底面に資生堂が大正4年(1915)に使用を始めた(注35)花椿文が陽刻されている。久留米では、昭和11年に資生堂久留米配給所合資会社が細工町で創業している(注36)。393は扁平な外形に白色の瓶で、肩部が鐮状に張り出す。外面底部に縦書きで「尚美堂」とあり、映画監督だった小口忠と婦人活動家小口みち子の夫妻が大正11年頃に創業し、昭和17年頃まで存続したマスター尚美堂の化粧瓶であることが分かる。同型の化粧瓶は松崎城跡でも出土したが、松崎城跡出土品の内面底部が平坦なのに対し、今回出土した瓶は極端に膨らみ、上げ底状を呈する。

廃棄土坑F出土遺物(第43図、第11表、図版36)

394の化粧瓶のみ図示した。白色で、底部が鐮状に広がる。胴部に「マスタークリーム」、底部に393と同様縦書きで「尚美堂」と陽刻がある。昭和初期にマスター尚美堂が販売していた(注37)、マスターコールドクリームまたはマスターバニシングクリームの瓶と考えられる。

廃棄土坑H出土遺物(第43図、第11表、図版36)

395は、無色透明で長方形の断面を有する瓶である。側面に角に廣の商標と「永廣」の文字が陽刻されている。形状が化粧水や整髪剤の瓶に類似することから、化粧用の瓶と判断した。396は、無色透明で王冠栓の瓶である。355に類似する八角形の胴部に「カゴメケチャップ」と陽刻があり、胴部と底部に355と同じ「丸に龍目」の陽刻を施す。明治41年(1908)に愛知トマト製造(後に愛知トマトソース製造合資会社、現・カゴメ)が製造を始めた(注38)、カゴメケチャップの瓶である。同形品は、鉄砲小路遺跡や松崎城跡でも出土している。

廃棄土坑J出土遺物(第43図、第11表、図版36・37)

397は牛乳瓶で、344や354に対して多数の陽刻が書かれている。全て示すと、「PURE SW EET MILK 特撰消毒 全乳 90瓦(グラム)入」「勘六牧場 電話五五四番」とある。344と354が王冠栓なのに対して、397はネジ式の栓で法量も小型である。398は、瓶詰に用いられたとみられる瓶である。青緑色透明で、断面が円形の口縁部と底部に対し、胴部はレモン形の断面という複雑な形状だが、上げ底が著しく気泡を多く含む。商品名や商標などの陽刻は無いが、340と同様に広口で佃煮瓶などに類似する形状から、瓶詰に用いられたと判断した。399は、371と同型のわかもとの瓶である。371との違いは、頸部の「わかもと」の陽刻が無い点と、底部の陽刻が「6NAG A9」のみという点である。同様の陽刻を施した瓶は、中原田遺跡でも出土している。400はインク瓶で、無色透明で器壁に凹凸が生じ、口縁部が歪むなど粗い作りである。法量は異なるが、381と同じ「登録 M」の陽刻が底部にあることから、丸善アテナインキの瓶と考えられる。この瓶も、同形品が日詰遺跡や松崎城跡で出土したほか、法量が近似する瓶が鉄砲小路遺跡や上本町遺跡で出土している。401は白色の化粧瓶で、肩部が張り、394と同様に底部の端が鐮状に広がる。底部の陽

刻も 393 や 394 と同じ「尚美堂」だが、縦書きではなく横書きである。この瓶と形状や法量が類似し、底部に「MASTER」の陽刻を有する瓶が鉄砲小路遺跡で出土した。

擾乱出土遺物 (第 43 図、第 11 表、図版 37)

ここでは、その他の擾乱からの出土遺物を、器種ごとに報告する。402 と 403 は弥生土器の甕の口縁部片である。402 は口縁部外面に縦方向のハケ目、胴部外面にタタキを施し、胴部内面に横方向のハケ目を施す。また、外面には黒斑がある。403 も 402 と同様の調整を施し、胎土や色調も類似するが、若干薄手で外面に回転ナデを施す。404 は土師器の小坏である。底部は糸切りで、焼け歪み上げ底状を呈する。405 は、糸切り底の土師器の底部である。底部の接合痕が明瞭に観察でき、接合面にも底部と同じ糸切り痕が見える。同様の接合痕を有する土師器は、日渡遺跡第 6 次調査でも出土した (注 39)。406 は、須恵器の坏蓋の口縁部である。端部はかえりや折り曲げなどの調整が無く、平坦に調整されている。407 は、丸瓦の角部片である。凸面は縄目文叩きをスリ消すほか、側面はヘラ切り後に粘土が付着する。408 は、無色透明ガラスの葉瓶である。気泡を含み器壁は凹凸で、口縁部は歪むなど、粗い作りである。胴部には、目盛りとラベルを添付するための小判型の陽刻がある。

表面採集遺物 (第 43 図、第 11 表、図版 37)

調査対象地では、古代の土師器や須恵器、古瓦、近世の陶磁器や窯道具、近代の瓦、黒曜石の剥片などを表面採集した。このうち、印刻を有する瓦と窯道具のみ図示した。

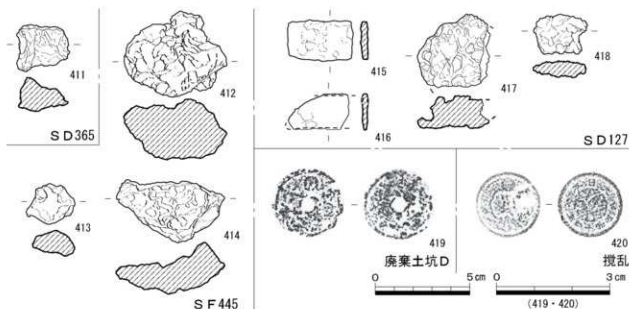
409 は近代の平瓦の破片で、凸面に「協 検査之証 北九州地方瓦工業組合」の印刻がみられる。昭和 14 年 (1939) 8 月の「物価統制実施要項」以降、物価統制などを目的に各地で設立された組合の一つと想定できる。類似する楕円形の陰刻で、「糟屋郡瓦協同組合」や「福岡地方工業組合」とある平瓦が福岡城跡 (福岡市中央区) で出土した (注 40)。410 は窯道具で、底部と口縁部の平坦部に溶着痕が残る環状置台である。本調査地点周辺の近世の窯跡は、陶器を焼いた野中町の東野亭焼窯跡 (注 41) や、陶磁器を焼いた朝妻焼古窯跡 (注 42) が挙げられるが、いずれの窯跡で出土した置台と形状や色調が大きく異なる。明治 32 年 (1899) 頃から昭和 50 年 (1975) まで調査地点近くで操業していた、十三部焼窯との関連が示唆される。

出土金属製品 (第 44 図、第 11 表、図版 38)

411 は S D 365 出土の鉄滓、412 ~ 414 は S F 445 出土の鉄滓である。412 は黒褐色土、413 は波板状凹凸面、414 はピット P 6 から出土した。いずれも、鉄錆に覆われている。415 ~ 418 は、S D 127 から出土した鉄製品である。415 は平面形、断面ともに長方形の鉄片で、鉄錆に覆われているため刃部の有無などは不明である。416 も鉄片だが、断面は楔形を呈し、平面形からも鎌の刃先などの可能性がある。417 と 418 は鉄滓である。417 は気泡の痕がみられ、折損面は灰色を呈する。418 は鉄錆に覆われているが、断面が比較的平坦であることから、鉄片の可能性はある。

419 は、廃棄土坑 D から出土した銭貨である。表裏共に厚い緑青に覆われるが、かろうじて菊花文と X 字状の圏線、穴の両側に「五」「銭」の文字が観察できた。これらの文様と法量、穿孔を有する点から、昭和 13 年 (1938) から昭和 15 年に製造された、5 銭アルミ青銅貨とみられる。420 は擾乱

から出土した、昭和14年(1939)製のガラス1銭アルミ貨である。昭和14年に製造された1銭アルミ貨は、「四」の字が「JL」状のもと、少数の「ル」状のものがあることが知られている(注43)。今回出土したのは、多数を占める前者である。



第44図 出土遺物実測図⑩(等倍、1/2)

【注】

- (1) 以下、近代の陶磁器やガラス瓶については、注に示した文献に加え、下記の文献と各社のホームページを参考にした。また特記ない限り、掲載した会社はいずれも株式会社である。
 山本耕道『びんの話』社団法人日本能率協会 平成2年
 小林謙一・渡辺典子「物質文化研究のとしての近現代考古学の課題——大橋遺跡出土の近現代ガラス製品の検討から——」
 東京考古談話会『東京考古』20 平成14年
 板井肇也『ガラス瓶の考古学』六一書房 平成18年
 平成ボトル倶楽部・監修『日本のレトロびん 明治初期から平成までのレアコレクション』グラフィック社 平成29年
- (2) ライオン株式会社社史編纂委員会『ライオン100年史』ライオン 平成4年
 ライオン株式会社社史編纂委員会『ライオン120年史』ライオン 平成26年
- (3) 榊藤寛『久留米商工史』久留米商工会議所 昭和49年
 久留米市産業課『久留米市産業要覧 昭和十二年度版』昭和12年
- (4) 久留米市教育委員会『京懐侍屋敷遺跡——第20・22次調査——』久留米市文化財調査報告書第323集 平成25年
- (5) 市村慎太郎「池島・福万寺遺跡出土近現代遺跡ガラス容器」(財)大阪府文化財センター『大阪文化財研究』第24号 平成15年
- (6) 久留米市教育委員会『久留米城下町遺跡 第16次調査(魚屋町)』久留米市文化財調査報告書第204集 平成14年
- (7) ブルドッグソース株式会社社史編纂委員会『ブルドッグソース55年史』ブルドッグソース 昭和56年
- (8) 西野寿勝『喝杯考(前編)——軍杯の考古学——』(財)大阪府文化財センター『大阪文化財研究』第32号 平成19年
- (9) 久留米市商工観光労働部商工政策課『久留米輝くものづくり企業事例集』久留米市 平成31年
- (10) サッポロビール株式会社広報部社史編纂室・編『サッポロビール120年史』サッポロビール 平成8年
- (11) 小澤太郎「コラム ガラス瓶から久留米の近代を探る」久留米市文化財保護課『久留米市文化財保護課年報』Vol. 4 平成20年
- (12) 田川市教育委員会『上本町遺跡——1・3・4次——』田川市文化財調査報告書第17集 平成31年
- (13) 注10文献と同じ。
- (14) 久留米ミルクプラント『50年のあゆみ』昭和59年。
- (15) カゴメ社会対応室100年企画グループ・編『カゴメ100年史』カゴメ 平成11年
- (16) 注7文献と同じ。
- (17) 福岡県教育委員会『松崎城跡』福岡県文化財調査報告書第135集 平成10年
- (18) 福岡県教育委員会『久富市ノ王遺跡』福岡県文化財調査報告書第108集 平成5年
- (19) 味の素『素をたがやす——味の素の八十年史——』平成2年

味の素『味の素グループの百年』平成21年

- (20) 福岡市教育委員会『有田・小田部 第10集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集 平成元年
 (21) 直方市教育委員会『直方市内遺跡群1』直方市文化財調査報告書第21集 平成12年
 (22) 福岡県教育委員会『日誌遺跡Ⅱ—一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第22集 平成17年
 (23) 久留米市教育委員会『久留米城下町遺跡 第一17次調査—』久留米市文化財調査報告書第262集 平成20年
 (24) 意匠登録の情報については、独立行政法人工業所有権・情報館ホームページ内「特許情報プラットフォーム 意匠検索」
 (<https://www.jp-platpat.inpit.go.jp/0100/>) に拠った。
 (25) マンダム『マンダム五十年史』昭和53年
 (26) 久留米市教育委員会『鉄砲小路遺跡 第一2次調査—』久留米市文化財調査報告書第273集 平成20年
 (27) 注5文献と同じ。
 (28) 大森柳川三郎『大演習記念 南筑家内記』蟻竜堂 明治44年
 なお、國武町は國武特許研工場（現・在島町、西鉄バス久留米営業所付近）に因み、明治末期から大正年間のみ用いられた通称のようである。上記の文献の外には、下記の地図にのみ記述がみられた。この地図については、当課の水源道鑑の表示によった。
 圖書撰発『福岡県後編 久留米市地図』地図報知第二十二號 大正7年
 (29) 井内智子『研究ノート 昭和初期における被服協会の活動 —カーキ色被服普及の試みと挫折—』社会経済史学会『社会経済史学』第76巻第1号 平成22年
 (30) 前山由美子『黒崎遺跡出土のガラス製品「ゴム風船型」について』物質文化研究会『物質文化』78 平成17年
 (31) 濱田徳太郎・編『大日本麦酒株式会社三十年史』大日本麦酒 昭和11年
 (32) 森伸一『日本のビール会社と清涼飲料水事業』サカフコーポレーション・編『明治・大正・昭和 お酒の広告グラフィティ—サカフ・コレクションの世界』国書刊行会 平成18年
 (33) 久留米市教育委員会『十間屋敷遺跡 第一10次発掘調査—』久留米市文化財調査報告書第415集 令和2年
 (34) 注25文献と同じ。
 (35) 資生堂『資生堂百年史』昭和47年
 (36) 権藤猛『久留米商工史』久留米商工会議所 昭和49年
 (37) 天野祐吉『嘘八百これでもか!!!! —昭和戦前編—』文春文庫ビジュアル版 文藝春秋 平成6年
 (38) 注15文献と同じ。
 (39) 久留米市教育委員会『日渡遺跡 第一6次調査—』久留米市文化財調査報告書第276集 平成20年
 (40) 福岡市教育委員会『福岡城跡 第一23次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第415集 平成7年
 米倉秀紀『福岡市域における戦争関連以降と出土遺物 ～福岡城出土遺物、特に認識票について～』福岡市博物館『福岡市博物館研究紀要』第30号 令和3年
 (41) 久留米市教育委員会『東野亭塚墓跡』久留米市文化財調査報告書第404集 平成31年
 (42) 久留米市史編さん委員会『資料編 考古』久留米市史第十二巻 久留米市 平成9年
 久留米市教育委員会『平成27年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第368集 平成28年
 (43) 中村佐佑治『日本のコイン』カラーブックス222 保育社 昭和46年

第2表 出土遺物観察表①

遺物 No.	出土 場所	種別	形跡	長さ (cm)			色調		形状・文様		粘土 の 材	発見・備考	登録 番号	
				口縁 (最大)	口縁 (最小)	底径 (平均)	外面 (口縁)	内面 (穴縁)	外面 (口縁)	内面 (穴縁)				断面・底面 (断面)
1 1部29号	S 1 20	弥生土器	甕	14.4	5.6~ 6.0	16.3~ 16.7	にぶい黄褐色~ 黄褐色	にぶい黄褐色~ 黄褐色	上具ナゲ ナゲナゲ	上具ナゲ ナゲナゲ	精白、砂粒を 含む	内外面に黒度あり。	202002 000024	
2 2部29号	S 1 20	弥生土器	甕	—	5.9	(5.7)	黄褐色 ~ 褐色	黄褐色	ナゲナゲ	上具ナゲ 指オサエ	ナゲナゲ ナゲナゲ	精白、砂粒、 雲母を含む	内外面に黒度あり。	202002 000029
3 3部29号	S 1 20	弥生土器	甕	—	5.4	(4.7)	黄褐色	黄褐色	上具ナゲ 指オサエ	ナゲナゲ	精白、砂粒、 雲母を含む	—	202002 000040	
4 4部29号	S 1 20	弥生土器	甕	—	5.4	(5.7)	黄褐色	黄褐色	上具ナゲ ナゲナゲ	ナゲナゲ ナゲナゲ	精白、砂粒を 含む	外周部に、鉄線が 入る	202002 000059	
5 5部29号	S 1 20	弥生土器	甕	27.5	—	(18.0)	黄褐色~ 黄褐色	黄褐色	横ナゲ ナゲナゲ	横ナゲ ナゲナゲ	—	砂粒、砂粒を 含む	胴径長: 28.2 cm	202002 000036
6 6部29号	S 1 20	弥生土器	甕	24.2	—	(8.3)	黄褐色	黄褐色	横ナゲ 横ナゲ	横ナゲ 横ナゲ	—	砂粒、砂粒、 雲母を含む	—	202002 000078
7 7部29号	S 1 20	弥生土器	甕	24.0	—	(10.0)	黄褐色	黄褐色	横ナゲ 横ナゲ	横ナゲ 横ナゲ	—	精白、砂粒、 砂粒、雲母を含む	口縁部に黒度あり。	202002 000027
8 8部29号	S 1 20	弥生土器	甕	37.2	—	(7.6)	黄褐色	黄褐色	ハケ目 横ナゲ	横ナゲ 横ナゲ	—	雲砂粒、砂粒、 雲母を含む	—	202002 000037
9 9部29号	S 1 20	弥生土器	大甕	44.9	—	(17.0)	黄褐色~ 黄褐色	にぶい黄褐色 ~ 黄褐色	ハケ目 横ナゲ	横ナゲ 横ナゲ	—	砂粒を含む	胴径長: 32.0 cm	202002 000034
10 10部29号	S 1 20	弥生土器	大甕	80.6~ 81.0	—	(20.0)	黄褐色~ 黄褐色	にぶい黄褐色 ~ 黄褐色	ハケ目 横ナゲ	横ナゲ 横ナゲ	—	砂粒、雲母を 含む	外周部に黒度あり。 内面に鉄線の一部を 含む	202002 000033
11 11部29号	S 1 20	弥生土器	大甕	—	8.3~ 9.6	24.3	にぶい黄褐色~ 黄褐色	にぶい黄褐色 ~ 黄褐色	ハケ目 横ナゲ	横ナゲ 横ナゲ	叩き目	砂粒、雲母を 含む	胴径長: 15.8 cm	202002 000035
12 12部29号	S 1 20	弥生土器	甕	—	(3.4)	(14.0)	黄褐色 ~ 黄褐色	にぶい 黄褐色	ナゲナゲ	ナゲ 指オサエ	ナゲ 指オサエ	砂粒、雲母を 含む	内外面にスス	202002 000025
13 13部29号	S 1 20	弥生土器	鉢	8.6	2.0	5.0	にぶい黄褐色~ 黄褐色	にぶい黄褐色	指オサエ	指オサエ	指オサエ	精白、砂粒、 雲母を多く含む	手づくえ	202002 000042
14 14部29号	S 1 20	弥生土器	鉢	12.0	—	(5.3)	にぶい 黄褐色	黄褐色	横ナゲ 横ナゲ	横ナゲ 横ナゲ	—	雲砂粒、砂粒を 含む	内外面にスス	202002 000031
15 15部29号	S 1 20	弥生土器	鉢	38.2	—	(8.3)	黄褐色~ 黄褐色	黄褐色	ナゲ 横ナゲ	横ナゲ 横ナゲ	—	砂粒、雲母を 含む	—	202002 000038

第3表 出土遺物観察表②

遺物 No.	出土 層面	種別	別種	数量 (個)			色調				調査・文様		調査・備考	登録 番号
				2層 (表土)	3層 (中)	4層 (底)	内面 (正面、種類)	内面 (背面、胎土)	内面 (上面)	外面 (側面)	底面・底 (裏面)	胎土・底 (裏)		
16	S 120	養生土器	蓋	(20.8)	—	(18.6)	赤褐色	赤色～褐色	ハケ目 胎土	ハケ目 胎土	—	目付模印、砂 粒、雲母を含む	202002 00026	
17	S 120	養生土器	鉢台	—	(14.7)	(18.0)	褐色～ 黄褐色	黄褐色	ナダ 模印	模印	—	砂粒、砂砂粒 を含む	202002 00001	
18	S 120	養生土器	高坪	—	—	(15.0)	黄褐色	褐色	ハケ目 胎土	紋リ ナダ	—	硝子、砂砂粒、硝 砂粒、雲母を含む	202002 00030	
19	S 120	養生土器	鉢	17.2	5.8	8.6	褐色～ 黒色	にぶい褐色～ 黒褐色	ハケ目 胎土	ハケ目 胎土	ナダ	砂粒を含む	202002 00045	内外面に黒煙、ヌス 内面にコグ付着
20	S 120	養生土器	小鉢	18.0	4.3	5.9	にぶい褐色	にぶい褐色～ 黄褐色	ナダ	ハケ目	ナダ	硝砂粒、雲母を含む	202002 00046	内面にヌス 後成時にヒビ入る
21	S 120	鉢台	養生土器	葉	(38.7)	9.1	21.2	褐色	褐色～ 黄褐色	ハケ目 胎土	ハケ目 胎土	硝子、硝砂粒、 雲母を含む	202002 00048	内面にヌス 後成時にヒビ入る
22	S 120	鉢台	養生土器	短頸蓋	12.9～ 13.3	6.2～ 6.6	20.3	にぶい黄褐色～ 黒褐色	にぶい褐色～ 黒褐色	ハケ目 胎土	ハケ目 胎土	硝子、硝砂粒、 雲母を含む	202002 00049	内面にヌス 後成時にヒビ入る
23	S A252	土師器	杯	—	—	3.3	褐色～ にぶい褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り	硝子、雲母を含む	202002 00053	
24	S A252	土師器	壺	—	(9.8)	(5.0)	褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り 胎土	硝子、雲母、赤 色粘土を含む	202002 00053	
25	S A252	土師器	壺	—	—	(2.7)	灰褐色～ 黒褐色	にぶい褐色～ 黒褐色	ヘラ刮り 同転ナダ	ヘラ刮り 同転ナダ	ヘラ刮り 胎土	硝子、硝砂粒、 雲母を含む	202002 00054	内面黒ヌス
26	S A252	土師器	壺	—	—	(2.7)	にぶい褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り	硝砂粒、 雲母を含む	202002 00070	外面にヌス
27	S A252	黒色土器 A型	壺	—	—	(3.8)	黄褐色～ 黒色	黒色	ナダ、ヘラ刮り 胎土	ヘラ刮り 胎土	—	硝子、硝砂粒を含む	202002 00071	
28	S A252	養生土器	葉	—	—	(2.6)	にぶい褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り	硝砂粒、雲母を含む	202002 00087	内面に縦線
29	S D 1	土師器	小皿	(8.4)	7.2	1.8	にぶい褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ナダ	硝子、赤色粘土 を含む	202002 00091	
30	S D 1	土師器	蓋	—	—	(1.1)	赤褐色	褐色	—	自然文様 同転ナダ	同転ナダ	硝子	202002 00096	
31	S D 1	復原器	杯	(15.7)	(8.8)	5.4	灰褐色	灰褐色	同転ナダ	同転ナダ	ナダ結合	硝子、硝砂粒を含む	202002 00097	
32	S D 1	復原器	葉	—	—	(3.8)	灰褐色～ 黒褐色	灰褐色～ 黒褐色	同転ナダ	同転ナダ	ナダ結合	硝子、硝砂粒を含む	202002 00095	
33	S D115	復原器	杯	—	(6.8)	(1.4)	黄褐色	黄褐色	ヘラ刮り	同転ナダ	ヘラ刮り	硝子、硝砂粒を含む	202002 00096	
34	S D120	養生土器	高坪	—	—	(4.0)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	ナダ	ナダ	紋リ	硝子、硝砂粒、 砂粒を含む	202002 00090	
35	S D120	土師器	杯	—	(7.8)	(1.2)	褐色～ にぶい褐色	にぶい褐色～ 褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り	硝子	202002 00100	
36	S D120	土師器	皿	(15.4)	(12.6)	1.3	にぶい褐色	にぶい褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り	硝子、雲母、赤 色粘土を含む	202002 00115	
37	S D120	黄色土器 A型	壺	—	—	(1.8)	褐色～ にぶい褐色	黄褐色～ 黒褐色	同転ナダ	同転ナダ	ナダ結合	硝子、硝砂粒を含む	202002 00109	
38	S D120	復原器	杯	—	—	(3.5)	黄褐色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	硝子、硝砂粒を含む	202002 00098	
39	S D120	復原器	杯	—	—	(3.2)	黄褐色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	硝子	202002 00105	
40	S D120	復原器	杯	—	—	(2.7)	黄褐色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り	硝子	202002 00106	
41	S D120	復原器	葉	—	—	(8.2)	赤褐色～ 灰褐色	灰褐色～ 灰褐色	平行文様	平行文様	—	硝子、砂粒を含む	202002 00101	
42	S D120	復原器	葉	—	—	(4.1)	褐色～黒色	灰白色～ 黒褐色	同転ナダ	同転ナダ	模印	硝子、硝砂粒を含む	202002 00108	自然磨縮
43	S D120	復原器	蓋	—	(8.6)	(3.9)	灰白色～ 灰褐色	灰白色～ 灰褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り 胎土	硝子、硝砂粒を含む	202002 00110	
44	S D120	緑釉陶器	壺	—	(7.2)	(1.8)	にぶい黄色～ オリーブ褐色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り	硝子、硝砂粒、 黒色粘土を含む	202002 00116	高台に重ね地模跡あり
45	S D120	緑釉陶器	鉢片	—	—	(2.5)	黄褐色	灰白色	同転ナダ	同転ナダ	模ナダ	硝子、硝砂粒を含む	202002 00099	
46	S D120	緑釉陶器	鉢片	—	—	(2.5)	黄褐色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	胎土	硝子	202002 00112	内面黒ヌス
47	S D120	緑釉陶器	壺	—	—	(3.3)	黄褐色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	胎土	硝子、硝砂粒を含む	202002 00120	
48	S D120	土師器	壺	—	—	(2.2)	オリーブ褐色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	胎土	硝子、硝砂粒を含む	202002 00122	胎土に黒煙・硝子、 硝砂粒・雲母・赤色粘土を含む
49	S D120	古瓦	瓦	(8.2)	(8.4)	1.9	黄褐色	黄褐色	斜格子文様 ナダ	斜格子文 ナダ	布目	硝子、硝砂粒、 雲母を含む	202002 00121	
50	S D120	古瓦	瓦	(5.4)	(3.8)	1.7	黄褐色	黄褐色	斜格子文様 ナダ	斜格子文 ナダ	布目	硝子、硝砂粒を含む	202002 00111	全体のヒ摩痕
51	S D120	古瓦	瓦	(4.1)	(4.6)	1.6	褐色	にぶい褐色	斜格子文様 ナダ	斜格子文 ナダ	布目	硝子、砂粒を含む	202002 00110	全体のヒ摩痕
52	S D120	土製品	土師	6.7	3.3	3.5	褐色	ナダ	ナダ	穿孔	ヘラ刮り	硝子、雲母を含む	202002 00114	Wt. 85g 口径：1.1cm
53	S D120	土製品	土師	(7.2)	3.7	3.45	にぶい褐色	褐色	ナダ	穿孔	ナダ	硝子	202002 00104	(62.70) g 口径：1.1cm
54	S D120	土製品	土師	5.9	3.1	3.0	にぶい褐色	にぶい褐色	ナダ	穿孔	ナダ	硝子、雲母、赤 色粘土を含む	202002 00115	(31.65) g 口径：1.1cm
55	S D140	土師器	杯	—	(7.1)	(6.4)	黄褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り	硝子、赤色粘土 を含む	202002 00183	
56	S D140	土師器	壺	—	5.5	(1.2)	にぶい黄褐色～ 黄褐色	黒色～ 黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	ナダ	硝子、赤色粘土 を含む	202002 00180	
57	S D140	土師器	小皿	—	—	(2.2)	褐色～にぶい褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	硝子、赤色粘土 を含む	202002 00179	
58	S D140	土師器	蓋	(16.6)	(12.4)	2.3	褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り 磨縮あり	硝子、赤色粘土 を含む	202002 00178	
59	S D140	復原器	弁蓋	—	—	(2.6)	灰褐色	灰褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ刮り	硝子、赤色粘土 を含む	202002 00181	
60	S D140	復原器	葉	—	—	(2.5)	灰白色～ 黄褐色	灰白色	同転ナダ	同転ナダ	—	硝子、赤色粘土、 雲母を含む	202002 00184	口縁部に溝

第4表 出土遺物観察表③

遺物 No.	出土 層	種 別	材 種	形 象 (mm)			色 調				製 法・文 様		胎 土 材	重量・備考	登録 番号
				口径 (長さ)	高さ (幅)	底径 (厚)	外面 (内面、釉薬)	内面 (内面、胎土)	外面 (内面)	外面・底面 (内面)	底面・口内 (底面)				
61 [30]16	S D140	緑釉陶器	瓶	-	-	(3.4)	黄灰色～ 淡黄色	灰白色	同転ナデ 磨粒	同転ナデ 磨粒	-	精良。砂粒、 黒色粒子を含む	外底残ける	203002 000186	203002 000187
62 [30]16	S D140	緑釉陶器	瓶	-	-	(1.2)	灰白色	灰白色	同転ナデ 磨粒	同転ナデ 磨粒	-	精良	口縁部片	203002 000188	203002 000189
63 [30]16	S D155	土師器	甕	-	-	(2.3)	明黄色	褐色	同転ナデ 若干磨粒	同転ナデ 若干磨粒	-	粗良。砂粒、黒粒、 赤色粒子を含む	外底残ける	203002 000190	203002 000191
64 [30]16	S D155	土師器	皿	-	-	1.1	淡黄褐色	褐色	同転ナデ	同転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良。黄褐色 を含む	口縁部片	203002 000188	203002 000189
65 [30]16	S D155	須恵器	甕	-	-	(6.6)	灰黄褐色 ～灰白色	褐色	縄目文 明き	円形文 明き	-	精良。砂粒、黒粒、 赤色粒子を含む	外底残ける	203002 000191	203002 000192
66 [30]16	S D155	須恵器	甕	-	-	(16.6)	淡黄褐色	にぶい 赤褐色	同転ナデ	同転ナデ	-	粗良。赤褐色 を含む	口縁部片	203002 000196	203002 000197
67 [30]16	S D156	土師器	壺	-	-	(8.0)	(3.1)	黄灰色 ～黄褐色	同転ナデ 磨粒	同転ナデ ナデ・磨粒	ナデ接合 ナデ	精良。砂粒、黒 褐色を含む	内外面磨粒著しい	203002 000192	203002 000193
68 [30]16	S D160	古瓦	平瓦	(8.2)	(11.6)	2.7 ～2.9	灰白色	灰白色	布目 ナデ滑し	縄目文 明き	ヘラ切り	精良。磨粒を 含む	内面に附鉄 内面・割れ面に僅	203002 000194	203002 000195
69 [30]16	S D160	古瓦	平瓦	(8.7)	(16.7)	2.9 ～2.6	黄褐色	灰黄褐色 ～褐色	布目 一部ナデ	縄目文 明き	-	精良	口縁部片	203002 000193	203002 000194
70 [30]16	S D165	土師器	小皿	-	-	(6.8)	淡黄褐色	明黄色	同転ナデ	同転ナデ	ヘラ切り	精良	口縁部片	203002 000199	203002 000200
71 [30]16	S D165	土師器	壺	-	-	(5.8)	灰褐色 ～黄褐色	にぶい褐色 ～褐色	同転ナデ ナデ	同転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良。磨粒を 含む	外底にスス	203002 000201	203002 000202
72 [30]16	S D165	古瓦	平瓦	(13.0)	(7.9)	1.8	灰白色	灰黄色	布目	斜線文 明き・ナデ	ヘラ切り	精良。磨粒を 含む	焼成後厚み減少	203002 000203	203002 000204
73 [30]16	S D165	古瓦	平瓦	(15.3)	(11.5)	2.6	にぶい褐色 ～灰黄褐色	灰黄褐色	布目	磨粒	ヘラ切り	精良。磨粒を 含む	口縁部片	203002 000205	203002 000206
74 [30]16	S D165	石製品	石鏡	(8.3)	(4.0)	(3.1)	褐色	灰黄褐色 ～暗黄褐色	ケズテ	ケズテ 工具痕	-	滑石	(1.6g, 厚 0.1cm) 表面に 1.5mm程度の、磨粒を 含む	203002 000206	203002 000207
75 [30]16	S D170	土師器	片蓋	-	-	(1.3)	にぶい褐色	にぶい褐色	同転ナデ	同転ナデ	-	精良	口縁部片	203002 000208	203002 000209
76 [30]16	S D170	土師器	壺	-	-	(1.1)	褐色	にぶい褐色	ナデ 磨粒	同転ナデ	ヘラ切り	精良。褐色粒子 を含む	外底にスス	203002 000278	203002 000279
77 [30]16	S D170	黒色土師 A型	壺	-	-	(1.8)	にぶい褐色	褐色	同転ナデ	ケズテ 磨粒	同転ナデ ナデ接合	精良。黄褐色 を含む	内面に門歯痕	203002 000280	203002 000281
78 [30]16	S D170	須恵器	甕	-	-	(3.3)	褐色	黄灰色	同転ナデ	同転ナデ	-	精良。砂粒を 含む	外底残ける	203002 000275	203002 000276
79 [30]16	S D170	須恵器	甕	-	-	(6.8)	にぶい褐色 ～赤褐色	にぶい 赤褐色	平打文 明き	平打文 明き	-	精良。砂粒を 含む	外底残ける	203002 000282	203002 000283
80 [30]16	S D170	須恵器	甕	-	-	(9.8)	灰白色	灰白色	斜線文 明き	同転ナデ 指すナデ	ナデ	精良。黒色粒子 を含む	口縁部片	203002 000289	203002 000290
81 [30]16	S D170	古瓦	平瓦	(8.6)	(11.6)	1.9	灰白色	にぶい赤褐色 ～灰白色	布目	縄目文 明き	ヘラ切り	精良。磨粒、 赤色粒子を含む	口縁部片	203002 000295	203002 000296
82 [30]16	S D170	古瓦	平瓦	(13.3)	(16.2)	2.7	淡黄褐色	褐色	布目 磨粒	縄目文 明き	ヘラ切り	精良。黄褐色、 赤色粒子を含む	磨粒著しい	203002 000277	203002 000278
83 [30]16	S D170	古瓦	平瓦	(16.1)	(9.1)	2.2	灰白色	暗黄褐色	布目	縄目文 明き	ヘラ切り	磨粒を 含む	口縁部片	203002 000296	203002 000297
84 [30]16	S D170	古瓦	平瓦	(8.3)	(7.4)	2.7	黄灰色	褐色	粗い布目	同転ナデ スリ滑し	ヘラ切り	磨粒を 含む	内面にスス	203002 000276	203002 000277
85 [30]16	S D190	土師器	甕	(6.4)	6.8	2.8	にぶい赤褐色 ～明黄色	にぶい褐色 ～褐色	同転ナデ	同転ナデ	ヘラ切り	精良。磨粒を 含む	口縁部片	203002 000214	203002 000215
86 [30]16	S D190	土師器	甕	(6.6)	6.4	2.5	褐色	褐色～ 褐色	同転ナデ 磨粒	同転ナデ 磨粒	ヘラ切り	精良。赤褐色 を含む	口縁部片	203002 000211	203002 000212
87 [30]16	S D190	土師器	甕	(16.4)	7.1	2.6	褐色～にぶい褐色	褐色	同転ナデ	同転ナデ	ヘラ切り	精良。赤褐色 を含む	口縁部片	203002 000215	203002 000216
88 [30]16	S D190	土師器	付付蓋	(13.4)	6.1	2.8	淡黄褐色～ にぶい褐色	にぶい黄褐色 ～灰黄褐色	同転ナデ ナデ接合	同転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良。黄褐色、 黒色粒子を含む	口縁部片	203002 000217	203002 000218
89 [30]16	S D190	土師器	壺	(13.6)	9.2	6.0	褐色	褐色	同転ナデ 接合ナデ	同転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良。赤褐色 を含む	外底の一部割断	203002 000219	203002 000220
90 [30]16	S D190	須恵器	皿	(11.8)	(1.1)	2.0	黄灰色	褐色	同転ナデ	同転ナデ	ヘラ切り	精良。磨粒を 含む	口縁部片	203002 000217	203002 000218
91 [30]18	S D190	緑釉陶器	細片	-	-	(3.1)	淡黄色～ オリーブ色	黄灰色	同転ナデ 磨粒	同転ナデ 磨粒	-	精良。黒色粒子 を含む	口縁部片	203002 000213	203002 000214
92 [30]18	S D190	古瓦	丸瓦	(9.6)	(7.7)	1.9	灰白色	灰白色	縄目文 明き	布目	ヘラ切り	精良。磨粒を 含む	口縁部片	203002 000216	203002 000217
93 [30]18	S D215	土師器	甕	(11.6)	(7.9)	2.8 ～3.0	褐色	褐色	同転ナデ	同転ナデ	ヘラ切り	粗粒。黄褐色、 赤褐色を含む	外底に門歯痕	203002 000251	203002 000252
94 [30]18	S D215	土師器	甕	-	-	3.2	褐色～ にぶい褐色	褐色～ にぶい黄褐色	同転ナデ	同転ナデ	ヘラ切り	精良。黄褐色、 赤褐色を含む	口縁部片	203002 000253	203002 000254
95 [30]18	S D215	土師器	皿	(13.1)	(11.6)	1.4	褐色	にぶい褐色	同転ナデ	同転ナデ	磨粒	精良。赤褐色 を含む	内面に門歯痕	203002 000259	203002 000260
96 [30]18	S D215	土師器	皿	-	-	(2.6)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	同転ナデ	同転ナデ	ヘラ切り	精良。赤褐色 を含む	口縁部片	203002 000232	203002 000233
97 [30]18	S D215	土師器	蓋	-	-	(3.1)	灰白色	黄灰色	同転ナデ	同転ナデ	-	精良。褐色粒、 黄褐色を含む	口縁部片	203002 000240	203002 000241
98 [30]18	S D215	土師器	把平	(5.1)	(4.3)	1.9	暗黄褐色～ 褐色	褐色	ナゲ	ナゲ	-	精良。黄褐色、 赤褐色を含む	スス残る	203002 000244	203002 000245
99 [30]18	S D215	黒色土師 A型	壺	-	-	(1.6)	にぶい褐色 ～にぶい褐色	褐色	ナゲ接合	ナゲ	ヘラ切り	精良。磨粒を 含む	口縁部片	203002 000246	203002 000247
100 [30]18	S D215	黒色土師 B型	壺	-	-	(1.7)	灰白色	灰白色	磨粒	ヘラ ミガシ	同転ナデ	精良。砂粒、黄褐色 を含む	口縁部片	203002 000246	203002 000247
101 [30]18	S D215	瓦器	瓦	-	-	(6.6)	灰白色～ 灰黄色	灰白色～ 灰黄色	同転ナデ ナデ接合	同転ナデ	ヘラ切り	精良。磨粒を 含む	口縁部片	203002 000233	203002 000234
102 [30]18	S D215	瓦器	瓦	-	-	(3.3)	灰褐色～ 淡黄色	黄褐色～ 灰白色	同転ナデ 磨粒	同転ナデ 磨粒	-	精良。砂粒、黄褐色、 赤褐色を含む	口縁部片	203002 000241	203002 000242
103 [30]18	S D215	土師器	壺	-	-	(2.4)	褐色～灰白色	褐色～灰白色	同転ナデ 磨粒	同転ナデ 磨粒	-	精良。磨粒、 黄褐色を含む	口縁部片	203002 000245	203002 000246
104 [30]18	S D215	緑釉陶器	瓶	-	-	(2.3)	灰黄色	灰白色	同転ナデ 磨粒	同転ナデ 磨粒	-	精良。黄褐色、 黒褐色を含む	口縁部片、釉薬の剥離 著しい	203002 000237	203002 000238
105 [30]18	S D215	緑釉陶器	瓶	-	-	(0.76)	灰オリーブ色	淡黄色	同転ナデ 磨粒	同転ナデ 磨粒	-	精良	外底残ける	203002 000238	203002 000239

第5表 出土遺物観察表④

遺物 No.	出土 層	種別	種類	数量 (個)			色調		器型・文様		粘土 材料	重量・備考	登録 番号	
				口縁 (高さ)	底径 (幅)	胎体 (高さ)	外面 (内面、釉)	内面 (内面、胎土)	外面 (口縁)	内面 (口縁)				外面・底 (裏面)
106	S D 215	質器	碗	—	(9.0)	(4.1)	淡黄色	褐色	回転ナゲ	回転ナゲ	白粉2+黄	軽丸、細砂粒を 含む	202002	
107	S D 215	質器	碗	—	—	(1.3)	灰オリーブ色	灰色	回転ナゲ	回転ナゲ	—	—	202002	
108	S D 215	質器	碗	—	—	(2.0)	灰白色	淡黄褐色	回転ナゲ	回転ナゲ	—	—	202002	
109	S D 215	陶器	蓋	—	—	(1.7)	明黄褐色	褐色	ヘラナゲ	回転ナゲ	ヘラナゲ	軽丸、黄色砂粒を 含む	202002	
110	S D 215	古瓦	平瓦	(13.0)	(14.0)	2.25	黄灰色～灰色	—	布目	縄目文印	ヘラナゲ	軽砂、黒色砂粒を 含む	202002	
111	S D 215	古瓦	平瓦	(7.50)	(12.5)	2.3	黄灰色～灰黄色	—	布目	縄目文印	ヘラナゲ	—	202002	
112	S D 215	古瓦	平瓦	(6.50)	(5.7)	1.8	灰色	—	布目	斜格子文 印	ヘラナゲ	—	202002	
113	S D 215	古瓦	平瓦	(9.4)	(9.8)	3.0	灰色	灰色～ 灰オリーブ色	布目	縄目文印	—	—	202002	
114	S D 215	古瓦	平瓦	(9.4)	(7.9)	1.9	灰色	—	布目	縄目文印	—	—	202002	
115	S D 215	古瓦	平瓦	(11.2)	(7.1)	2.2	灰白色～ 淡黄褐色	淡黄色～ 淡黄褐色	布目	縄目文印	—	—	202002	
116	S D 215	古瓦	丸瓦	(9.7)	(7.3)	1.9	灰白色	灰白色	ナゲ消し	ナゲ消し	ヘラナゲ	—	202002	
117	S D 215	古瓦	丸瓦	(7.1)	(4.9)	1.5	淡黄褐色	にぶい褐色	斜格子文 印	斜格子文 印	ヘラナゲ	—	202002	
118	S D 215	石製品	磨石	(13.6)	(5.2)	(5.9)	灰褐色～灰白色	—	使用面×2	—	—	玄武岩	(370) g	202002
119	S D 215	石製品	磨石	11.8	9.6	7.55	灰色～灰白色	—	使用面 2+片	—	—	玄武岩	991 g	202002
120	S D 215	石製品	砥石	(3.9)	(3.2)	2.4	明赤褐色～褐色	—	使用面	—	—	砂岩	(41.25) g	202002
121	S D 365	土師器	埴	—	(19.6)	(2.9)	褐色	褐色	ヘラナゲ	回転ナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
122	S D 365	土師器	蓋	—	(12.1)	(5.7)	褐色	褐色	回転ナゲ	回転ナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
123	S D 365	土師器	壺	(18.2)	—	(7.8)	にぶい 褐色	褐色	横ナゲ	ヘラナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
124	S D 365	土師器	把手	(5.3)	(5.3)	4.3	褐色～ 淡黄褐色	—	ナゲ 磨粒	ヘラナゲ	—	—	202002	
125	S D 365	土師器	把手	(4.9)	(5.9)	2.9	褐色	にぶい黄褐色	ナゲ	—	—	—	202002	
126	S D 365	灰土器	環蓋	—	—	(4.40)	にぶい黄褐色 ～灰白色	暗灰黄色	回転ナゲ	回転ナゲ	—	—	202002	
127	S D 365	灰土器	環蓋	—	—	(6.93)	灰黄色	—	胎土目 ナゲ	回転ナゲ	—	—	202002	
128	S D 365	古瓦	丸瓦	(8.7)	(6.9)	3.0	黒褐色～暗赤褐色	—	縄目文印 スリ消し	布目 縄目	ヘラナゲ	—	202002	
129	S D 365	石製品	軽石	4.4	4.5	4.45	淡黄色	—	平滑面あり	平滑面あり	—	—	202002	
130	S D 405	土師器	埴	—	—	(1.6)	にぶい褐色～ にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	回転ナゲ	回転ナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
131	S D 405	黒色土師器	埴	—	—	(3.0)	黒色	黒色	回転ナゲ	ヘラナゲ	—	—	202002	
132	S D 405	灰土器	埴	—	—	(1.8)	灰白色～ 灰黄色	黄灰色	ヘラナゲ	ナゲ接合	—	—	202002	
133	S D 416	土師器	埴	—	—	(1.0)	褐色	淡黄褐色	回転ナゲ	回転ナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
134	S D 416	灰土器	壺	—	—	(8.4)	明褐色	褐色	横ナゲ	並行タ タキ	—	—	202002	
135	S D 416	古瓦	丸瓦	(6.8)	(6.6)	2.2	淡黄褐色～ 灰色	淡黄色	横ナゲ	布目 環蓋	ヘラナゲ	—	202002	
136	S D 416	古瓦	平瓦	(6.30)	(6.1)	1.45	灰色	灰色	布目	縄目文印	ヘラナゲ	—	202002	
137	S D 416	古瓦	平瓦	(5.0)	(11.1)	1.8	灰色	灰色	布目	縄目文印 ヘラナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
138	S D 415	土師器	埴	—	—	(1.6)	胎灰色～ 淡黄褐色	にぶい黄褐色	磨粒	回転ナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
139	S D 415	土師器	埴	—	—	(2.0)	にぶい褐色～ 褐色	—	回転ナゲ	回転ナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
140	S D 415	黒色土師器	埴	—	—	(1.0)	褐色	暗灰色	ナゲ	回転ナゲ 接合ナゲ	磨粒	—	202002	
141	S D 415	古瓦	丸瓦	(6.3)	(4.0)	1.9	にぶい褐色	—	ナゲ消し	ナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
142	S F 445	土師器	埴蓋	2.6	—	(0.80)	褐色	灰褐色	回転ナゲ 接合ナゲ	—	回転ナゲ	—	202002	
143	S F 445	土師器	皿	—	—	2.0	にぶい褐色～ にぶい褐色	にぶい褐色	回転ナゲ	回転ナゲ	ナゲ	—	202002	
144	S F 445	土師器	小皿	(9.8)	(7.8)	1.7	にぶい褐色	褐色	回転ナゲ	回転ナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
145	S F 445	土師器	小皿	—	—	1.2	褐色	—	回転ナゲ	回転ナゲ	赤銅器	—	202002	
146	S F 445	土師器	壺	—	—	(4.0)	胎灰色	にぶい褐色	回転ナゲ	回転ナゲ	ナゲ	—	202002	
147	S F 445	土師器	把手	—	—	(3.5)	にぶい褐色～ 淡黄褐色	—	ナゲ	非調整	—	—	202002	
148	S F 445	土師器	入型	—	—	(11.0)	にぶい褐色	黒褐色～黒色	ヘラナゲ	ヘラナゲ	—	—	202002	
149	S F 445	土師器	入型	—	—	(8.2)	褐色	胎灰色	回転ナゲ 接合ナゲ	ヘラナゲ	ヘラナゲ	—	202002	
150	S F 445	土師器	壺	—	—	(6.7)	胎褐色	胎褐色～ にぶい赤褐色	胎土目 ナゲ	ナゲ	—	—	202002	

第6表 出土遺物観察表⑤

遺物 No.	出土 層	種別	部類	寸法 (cm)			色 澤		型 式・文 様		貯 土 材	表裏・備考	登録 番号		
				口径 (mm)	直径 (mm)	高さ (mm)	外面 (口縁・軸)	内面 (底面・筋土)	外面 (口縁)	内面 (底面)				基面・裏面 (裏面)	
151	S F 445 第33層	須恵器	蓋	-	-	(4.2)	灰色	黄灰色	布目 四角ケズリ	縄ナデ 捺合ナデ	ヘラ切り	精良, 砂粒を含む	底面片	202902 000353	
152	S F 445 第33層	須恵器	蓋	-	-	(6.2)	にぶい褐色	黄褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	底面片	202902 000331	
153	S F 445 第33層	古瓦	平瓦	(9.7)	(9.2)	1.9	黄灰色～褐色		布目	縄目文印 スリ消し	ヘラ切り	精良, 褐色粒子を含む		202902 000326	
154	S F 445 第33層	土師器	瓶	-	-	(4.9)	褐色～ 黄灰色	褐色	ナデ	ナデ 指ナデ	ヘラ切り	精良, 裏面を含む	外面に流痕	202902 000369	
155	S F 445 第33層	須恵器	坪	-	(5.2)	0.40	灰色		同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	底面片	202902 000371	
156	S F 445 第33層	須恵器	蓋	-	(8.2)	(1.0)	赤褐色	黄灰色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	底面片, 自然破れる	202902 000332	
157	S F 445 第33層	買込 四角器	蓋	-	-	(1.7)	にぶい黄色	黄灰色	同前ナデ 縦線	同前ナデ 縦線	ヘラ切り	精良, 褐色粒子を含む	縦線のみ底面片	202902 000372	
158	S F 445 第33層	土師器	坪	-	-	(2.6)	褐色		同前ナデ ツツケナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 裏面を含む	口縁部片	202902 000336	
159	S F 445 第33層	黒色土師 器	皿	-	-	(2.7)		黄灰色	ミガキ ミガキ	ミガキ	ヘラ切り	精良	口縁部片	202902 000338	
160	S F 445 第33層	緑釉陶器	鉢	-	-	(2.1)	くすんだ 黄緑色	浅黄褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	口縁部片	202902 000368	
161	S F 445 第33層	古瓦	平瓦	(7.25)	(12.4)	2.9	灰色	黄灰色	布目	縄目文印 ナデ	ヘラ切り	精良, 褐色を含む		202902 000362	
162	S F 445 第33層	古瓦	丸瓦	(23.9)	(7.2)	2.1	灰白色	灰色	斜格子印 墨目	布目	ヘラ切り	精良, 裏砂粒を含む	全体の1/4割	202902 000329	
163	S F 445 第33層	古瓦	丸瓦	(33.10)	(8.6)	2.0	浅黄褐色～ にぶい褐色	黄褐色	斜格子印 ナデ消し	布目	ヘラ切り	精良, 裏面を含む		202902 000361	
164	S F 445 第33層	古瓦	丸瓦	(7.8)	(7.25)	1.5	灰白色		斜格子印 布目	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 砂粒を含む		202902 000359	
165	S F 445 第33層	土師器	高坪	-	-	(4.0)	褐色		同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 裏面, 褐色粒子を含む	脚部片	202902 000363	
166	S F 445 第33層	須恵器	蓋	-	-	(2.7)	にぶい 黄褐色	黄灰色～ 黄褐色	同前ナデ ヘラケズリ	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 裏砂粒を含む	底面片	202902 000364	
167	S F 445 第33層	須恵器	蓋	-	-	(2.4)	浅黄褐色	黄褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	底面片, P 6出土層片	202902 000365	
168	S F 445 第33層	須恵器	坪	-	-	(1.3)	灰白色	灰色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	底面片, P 1出土層片	202902 000367	
169	S F 445 第33層	緑釉陶器	脚片	-	-	(0.7)	黄緑色	灰白色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 裏砂粒を含む	底面片	202902 000373	
170	S F 445 第33層	古瓦	丸瓦	(9.8)	(10.4)	1.6	黄褐色～ 黄灰色	黄灰色	縄目文印 スリ消し	布目 縦目	ヘラ切り	精良, 砂粒を含む	172と類似	202902 000374	
171	S F 445 第33層	須恵器	蓋	-	-	(3.8)	黄灰色	黄灰色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良		202902 000375	
172	S F 445 第33層	古瓦	丸瓦	(18.3)	(10.4)	1.8	黄褐色～ 灰色	灰色	縄目文印 スリ消し	布目 縦目	ヘラ切り	精良	170と類似	202902 000375	
173	S F 445 第33層	古瓦	平瓦	(13.1)	(13.2)	2.9		灰白色	布目	縄目文印 スリ消し	ヘラ切り	精良	断面と類似	202902 000376	
174	S F 445 第33層	土師器	坪蓋	(3.7 0.6)	(1.9)		にぶい褐色～ 褐色	にぶい黄褐色	同前ナデ	同前ナデ	ナデ	精良		202902 000333	
175	S F 445 第33層	須恵器	平瓦	-	-	(6.3)	黄灰色	黄灰色～ 黄褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 砂粒を含む	口縁部片, P 10出土層片と類似	202902 000334	
176	S F 445 第33層	古瓦	平瓦	(8.2)	(10.6)	2.25	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	布目	縄目文印 スリ消し	ヘラ切り	精良, 褐色粒子を含む		202902 000335	
177	S F 445 第33層	土師器	把手	(5.4)	(3.2)	2.0	褐色～ にぶい褐色	浅黄褐色	オオユ	ナデ	ヘラ切り	精良, 裏面を含む		202902 000337	
178	S F 445 第33層	緑釉陶器	瓶	-	-	(0.4)	オリーブ褐色	灰白色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	口縁部片	202902 000338	
179	S F 445 第33層	須恵器	鉢	-	-	(2.1)	灰白色	黄灰色	同前ナデ	同前ナデ	縦線	精良, 赤色粒子を含む	底面片	202902 000339	
180	S F 445 第33層	須恵器	蓋	-	-	(0.1)	灰色	黄灰色	斜格子印 ハケ目消し	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 裏砂粒を含む	脚部片, P 11出土層片と類似	202902 000340	
181	S F 445 第33層	古瓦	平瓦	(8.6)	(6.6)	2.2	黄灰色	灰色	布目 ナデ消し	縄目文印 スリ消し	ヘラ切り	精良, 裏砂粒を含む		202902 000341	
182	S F 445 第33層	古瓦	平瓦	(8.0)	(8.4)	2.75	にぶい褐色～ 黄褐色	褐色～ 黄褐色	布目	縄目文印 スリ消し	ヘラ切り	精良		202902 000342	
183	S F 445 第33層	土師器	丸瓦	1.75	1.6	1.65	にぶい褐色～ 褐色	褐色～ 黄褐色	ナデ	ナデ	ナデ	精良, 褐色粒子を含む	外面塗染	202902 000343	
184	S F 445 第33層	土師器	坪	-	-	(1.9)	褐色～ 浅黄褐色	褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	底面片	202902 000348	
185	S F 445 第33層	須恵器	蓋	-	-	(6.4)		黄灰色	斜格子印 ナデ消し	平行文印	ヘラ切り	精良	脚部片	202902 000325	
186	S I 133	土師器	坪蓋	-	-	(1.9)	褐色	褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 裏面, 砂粒, 裏面を含む	口縁部片	202902 000172	
187	S I 133	土師器	蓋	-	-	(2.7)	褐色～ にぶい褐色	褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 裏面を含む	底面片	202902 000173	
188	S I 133	土師器	蓋	-	-	(6.8)	(5.7)	褐色～ にぶい褐色	褐色	ハケ目	工具ナデ 指ナデ	ヘラ切り	精良, 砂粒, 裏面を含む	底面片	202902 000174
189	S K 80	土師器	坪	-	-	(8.8)	(1.9)	褐色～ にぶい褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 赤色粒子を含む		202902 000076	
190	S K 80	土師器	坪	-	-	(8.4)	(3.4)	褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	底面片, 黄褐色	202902 000079	
191	S K 85	土師器	坪蓋	-	-	(1.9)	にぶい褐色	にぶい褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良	口縁部片	202902 000083	
192	S K 85	土師器	坪蓋	-	-	(1.2)	褐色	褐色	同前ナデ	同前ナデ	縦線	精良, 赤色粒子を含む	口縁部片	202902 000083	
193	S K 85	土師器	坪	(3.8)	-	(1.3)	明赤褐色～ にぶい褐色	明赤褐色～ にぶい褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良, 裏面, 赤色粒子を含む		202902 000088	
194	S K 85	土師器	坪	(3.4)	(8.8)	3.0	褐色	褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良		202902 000086	
195	S K 85	土師器	坪	(3.6)	(7.2)	3.0	褐色～ にぶい褐色	褐色～ 黄褐色	同前ナデ	同前ナデ	ヘラ切り	精良		202902 000085	

第7表 出土遺物観察表①

遺物 No.	出土 層位	種 別	形 種	数量 (個)	重量 (g)	色 調				調査・文 庫		備考	登録 番号		
						外面 (形状、釉彩)	内面 (凸凹、粘土)	外面 (凸凹)	内面 (凸凹)	用途・流行 (年代)	粘土 土 材				
196 第33層	S K 85	土師器	片	(13.0)	(8.0)	3.8	褐色	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	摩耗	精良、赤色粘土を含む	口縁部片	202002 000084	
197 第33層	S K 85	土師器	皿	(16.4)	(12.0)	2.1	褐色	にぶい褐色 ～褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘラ切り	精良、細砂粒、赤色粘土を含む	口縁部片	202002 000087	
198 第33層	S K 85	土師器	甕	—	—	(2.4)	にぶい褐色 ～褐色	褐色	ヘタ目 織ナゲ	ケズリ 織ナゲ	—	精良、砂粒、重粒を含む	口縁部片	202002 000089	
199 第33層	S K 85	土師器	片蓋	—	—	(1.4)	灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良、重砂粒を含む	口縁部片	202002 000090	
200 第33層	S K 400 表面	土師器	片	—	—	2.3	褐色	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘラ切り	精良、重砂粒を含む	口縁部片	202002 000303	
201 第33層	S K 400 表面	黒色土師 A類	塊	—	—	(3.8)	にぶい黄褐色 ～褐色	黒色	ヘタ目 織ナゲ	同転ナゲ	—	精良、重砂粒を含む	口縁部片	202002 000305	
202 第33層	S K 400 表面	復原器	甕	—	—	(2.3)	赤褐色	暗赤灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	樽形	精良、細砂粒を含む	口縁部片	202002 000304	
203 第33層	S K 400 土師器	片	—	—	0.2	2.8	にぶい褐色	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘラ切り	精良	口縁部に染指	202002 000306	
204 第33層	S K 400 土師器	片	—	—	7.0～ 7.3	3.90	褐色～ 灰黄褐色	にぶい黄褐色 ～褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘラ切り	精良、褐色粘土を含む	底面片、内面に門書痕	202002 000307	
205 第33層	S K 400 土師器	皿	—	—	1.65	褐色	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	摩耗	精良、重砂粒を含む	—	202002 000308		
206 第33層	S K 400 土師器	地	13.5	—	(4.4)	褐色	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘラ切り	精良	底面片	202002 000309		
207 第33層	S K 400 土師器	鉢	—	—	(5.9)	褐色	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	口縁部片	202002 000316		
208 第33層	S K 400 土師器	甕	(38.4)	—	(6.3)	にぶい 黄褐色	にぶい褐色	ヘタ目 同転ナゲ	ケズリ 同転ナゲ	—	細砂粒を含む	外面にスス	202002 000310		
209 第33層	S K 400 黒色土師 A類	塊	—	—	(4.3)	褐色	黒色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘラ切り	精良、重粒、褐色粘土を含む	口縁部片	202002 000312		
210 第33層	S K 400 復原器	片	—	—	5.1	灰黄色	灰黄褐色	ナゲ	同転ナゲ	ナゲ	精良、重砂粒を含む	二次被熱	202002 000311		
211 第33層	S K 400 土製品	不明	製品	66.10	(5.9)	1.2	明黄褐色 ～褐色	にぶい黄褐色 ～にぶい褐色	工具片 織ナゲ	ケズリ 織ナゲ	—	精良、褐色粘土を含む	外縁の一部被熱	202002 000313	
212 第33層	S K 400 石製品	台石	(14.0)	(17.0)	(7.9)	—	黄灰色～灰黄色	磁器	磁器	磁器	磁器	去毒剤	外面に薄いスス	202002 000315	
213 第33層	S P 210 土師器	地	14.8	10.2	5.6～ 5.7	—	にぶい褐色 ～褐色	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘラ切り 灰状圧痕	精良、細砂粒を含む	内面に門書痕	202002 000225	
214 第33層	S P 275 土師器	塊	—	—	(2.6)	—	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良、赤色粘土を含む	口縁部片	202002 000322	
215 第33層	S P 275 復原器	甕	—	—	(4.7)	—	にぶい赤褐色 ～灰黄褐色	灰黄褐色	並行文印 ナゲ	オナエ	—	精良	網部片	202002 000295	
216 第33層	S P 275 復原器	甕	—	—	(6.3)	—	灰色～ 暗灰色	灰色	格子目文 ナゲ	指サエ	—	精良、褐色粘土を含む	網部片	202002 000294	
217 第33層	S P 275 復原器	甕	—	—	(14.4)	—	灰白色	灰白色	格子目文 ナゲ	同転ナゲ	—	精良、細砂粒を含む	網部片、二次被熱	202002 000293	
218 第33層	S P 275 古瓦	平瓦	(14.3)	(14.3)	2.4～ 2.5	—	灰白色	灰白色	布目	網目文印	ヘラ切り	精良、細砂粒を含む	網部片	202002 000296	
219 第33層	S X 125 緑釉陶器	水注	—	—	(2.3)	—	浅黄褐色	灰白色	指付取 手	同転ナゲ	—	精良	網部片	202002 000123	
220 第33層	S X 150 復原器	甕	—	—	(5.4)	—	灰白色	灰白色	ヘラケズリ	工具ナゲ	—	精良、砂粒、褐色粘土を含む	網部片	202002 000187	
221 第33層	S D 2 土師器	片	—	—	(16.6)	(1.3)	褐色	同転ナゲ	ナゲ	赤切り	—	精良、重砂粒を含む	—	202002 000092	
222 第33層	S D 2 土師器	塊	—	—	(5.3)	—	褐色	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良、重粒、赤色粘土を含む	口縁部片	202002 000094	
223 第33層	S D 2 復原器	平瓶	—	—	(2.1)	—	灰色	灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良、砂粒を含む	網部片	202002 000095	
224 第33層	S D 2 古瓦	丸瓦	(35.7)	(11.3)	7.7	—	灰色	灰色	網目文印 スリ溝	布目	網目文印	ヘラ切り	精良、砂粒を含む	202002 000096	
225 第33層	S D 2 古瓦	丸瓦	(9.0)	(6.2)	2.15	—	灰黄色 ～灰褐色	灰白色 ～灰褐色	網目文印 スリ溝	布目	網目文印	ヘラ切り	褐色粘土を含む	202002 000097	
226 第33層	S D 2 古瓦	平瓦	(7.4)	(7.6)	2.1	—	灰黄褐色	—	布目	網目文印 スリ溝	ヘラ切り	精良、細砂粒を含む	202002 000098		
227 第33層	S D 2 古瓦	平瓦	(7.5)	(8.3)	1.8	—	灰白色	灰白色	布目・ナゲ	ナゲ	—	精良、細砂粒を含む	202002 000099		
228 第33層	S D 2 古瓦	平瓦	(7.3)	(14.2)	2.4	—	にぶい黄褐色 ～灰白色	にぶい黄褐色 ～灰白色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良、赤色粘土を含む	202002 000102		
229 第33層	S D 2 石製品	磨製 石斧	(66.2)	(16.9)	1.9	—	灰黄色	黄褐色	磁器	磁器	磁器	片刃	(90.35 g)	202002 000110	
230 第33層	S D 40 土師器	甕	(38.0)	(11.4)	2.7	—	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	赤切り	—	精良、重砂粒を含む	内面に粘土付着	202002 000170	
231 第33層	S D 40 土師器	甕	—	—	(1.3)	—	褐色～ 明黄褐色	明黄褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	樽形	精良、重砂粒を含む	—	202002 000065	
232 第33層	S D 40 土師器	土鍋	—	—	(4.1)	—	灰黄褐色 ～黒褐色	灰黄褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘケ目	—	細砂粒を含む	202002 000066	
233 第33層	S D 40 土師器	土鍋	—	—	(9.8)	—	黒褐色	灰黄褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘケ目	—	精良、細砂粒、重粒を含む	外縁被熱	202002 000069
234 第33層	S D 40 瓦葺	瓦葺	塊	—	—	(1.3)	灰白色	灰白色	ナゲ	樽形	樽形	—	精良	202002 000068	
235 第33層	S D 40 復原器	甕	—	—	(6.3)	—	にぶい黄褐色	褐色	格子目文 印	青黒文 印	—	精良、細砂粒、褐色粘土を含む	202002 000064		
236 第33層	S D 40 古瓦	平瓦	(6.9)	(6.1)	2.7	—	灰色	灰色	布目	網目文印	ヘラ切り	精良、細砂粒を含む	202002 000063		
237 第33層	S D 40 古瓦	平瓦	(5.7)	(5.6)	2.0	—	—	黄灰色	布目	網目文印 スリ溝	—	精良、砂粒を含む	202002 000061		
238 第33層	S D 40 古瓦	丸瓦	(48.3)	(13.8)	4.7	—	浅黄褐色	浅黄褐色	格子目文 印	布目	ヘラ切り	精良、砂粒を含む	202002 000067		
239 第33層	S D 50 復原器	甕	—	—	(6.3)	—	にぶい褐色	にぶい黄褐色	格子目文 印	平行文 印	—	精良、重砂粒を含む	網部片、内縁の一部にスス	202002 000073	
240 第33層	S D 50 陶磁器	瓶	—	—	(1.3)	—	浅黄褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	支脚 ～磨粒	—	精良	外縁被熱	202002 000074	

第8表 出土遺物観察表(7)

遺物 No.	出土 遺物	種別	形状	質量 (g)			色調				調査・文様		材質・備考	登録 番号		
				口縁 (口)	底径 (底)	高さ (高)	外面 (外面・種類)	内面 (内面・胎土)	外面 (外面)	内面 (内面)	裏面・底面 (裏面)	印・文 (印)				
241	241 241A	S D 127	土師器 卍	—	(7.8)	(4.8)	にぶい褐色	浅黄褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘラ切り 巻締	—	精良	底面片	202002 000131	
242	242 242A	S D 127	土師器 卍	—	—	(1.4)	褐色	にぶい褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	ヘラ切り 底反圧痕	—	精良	底面片	202002 000152	
243	243 243A	S D 127	土師器 皿	(14.1)	(11.4)	2.6	浅黄褐色	浅黄褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	巻締	—	精良	—	202002 000147	
244	244 244A	S D 127	土師器 皿	—	8.8	(1.1)	にぶい 黄褐色	にぶい褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	巻締 ヘラ切り	巻締 底反圧痕	精良	底面片、外面にスス	202002 000148	
245	245 245A	S D 127	土師器 皿	—	(8.8)	(1.4)	浅黄褐色	褐色	巻締	同転ナゲ	巻締	—	精良	底面片、巻締著しい	202002 000155	
246	246 246A	S D 127	土師器 小皿	—	(7.7)	(0.1)	黄褐色	褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	巻締	—	精良	底面片、全体的に焼く 痕跡、外面磨耗著しい	202002 000135	
247	247 247A	S D 127	土師器 小皿	—	—	(1.3)	黄褐色	褐色	巻締	同転ナゲ	巻締	—	精良	底面片、巻締著しい	202002 000138	
248	248 248A	S D 127	土師器 埴	—	—	(0.3)	にぶい褐色～ にぶい黄褐色	黄褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	口縁部片	202002 000134	
249	249 249A	S D 127	土師器 土鍋	—	—	(3.1)	にぶい褐色～ 灰褐色	にぶい黄褐色～ 明黄褐色	横ナゲ、ハ ナゲ	工具ナゲ	—	—	精良	口縁部片、外面にスス	202002 000159	
250	250 250A	S D 127	土師器 土鍋	—	—	(1.4)	にぶい 黄褐色	浅黄褐色	横ナゲ	横ナゲ	—	—	精良	口縁部片	202002 000137	
251	251 251A	S D 127	土師器 土鍋	—	—	(0.3)	浅黄褐色	にぶい 黄褐色	横ナゲ	横ナゲ	—	—	精良	口縁部片、外面にスス	202002 000141	
252	252 252A	S D 127	土師器 把手	(5.95)	(4.4)	2.1	褐色	—	ナゲ	巻締	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000125	
253	253 253A	S D 127	土師器 把手	—	—	(1.4)	にぶい褐色～ 黄褐色	褐色	器オケユ	—	—	—	—	褐色粒、細砂 粒を含む	202002 000129	
254	254 254A	S D 127	土師器 作蓋	—	—	(1.3)	にぶい 赤褐色	にぶい褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	口縁部片	202002 000136	
255	255 255A	S D 127	土師器 蓋	—	(10.3)	(1.4)	灰黄色	灰白色	ヘラケツ ナゲ	横ナゲ	工具ナゲ	—	精良	底面片	202002 000133	
256	256 256A	S D 127	土師器 壺	—	—	(4.1)	暗赤褐色	にぶい黄色	横ナゲ	横ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000124	
257	257 257A	S D 127	土師器 壺	—	—	(3.0)	灰褐色	灰色	横ナゲ	横ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000126	
258	258 258A	S D 127	土師器 壺	—	—	(3.4)	灰黄色	黄灰色	横ナゲ	横ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000149	
259	259 259A	S D 127	土師器 壺	—	—	(4.1)	灰色	灰オリーブ色	横ナゲ	横ナゲ	—	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000134	
260	260 260A	S D 127	土師器 香鉢	—	—	(6.4)	灰色	灰褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000165	
261	261 261A	S D 127	土師器 埴	(18.8)	—	—	にぶい褐色～ 灰色	灰色	ヘラケツ ナゲ	横ナゲ	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	内外面に黒痕	202002 000164
262	262 262A	S D 127	土師器 埴	(18.1)	—	(3.9)	灰色	灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	口縁部片、内外面に 黒痕	202002 000156	
263	263 263A	S D 127	土師器 埴	—	—	(6.4)	灰色	灰黄色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	褐色粒、 黒痕を含む	202002 000169	
264	264 264A	S D 127	土師器 香鉢	—	—	(4.4)	浅黄褐色～ 灰黄色	浅黄色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	褐色粒、 黒痕を含む	202002 000132	
265	265 265A	S D 127	土師器 鉢	—	9.0	(6.4)	明黄褐色～ にぶい褐色	灰白色	ヘラケツ ナゲ	同転ナゲ	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000162
266	266 266A	S D 127	土師器 鉢	—	—	(2.0)	灰白色	灰白色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000163	
267	267 267A	S D 127	土師器 香鉢	—	—	(5.9)	明オリーブ 灰色	灰白色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000166	
268	268 268A	S D 127	土師器 香鉢	—	—	(5.4)	オリーブ灰色	灰白色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000154	
269	269 269A	S D 127	土師器 香鉢	—	—	(3.5)	灰白色	灰白色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000133	
270	270 270A	S D 127	土師器 香鉢	—	—	(2.4)	明オリーブ灰 色	灰白色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000167	
271	271 271A	S D 127	土師器 香鉢	—	—	(5.4)	褐色	黄褐色～ 灰白色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	—	精良	褐色粒を 含む	202002 000143	
272	272 272A	S D 127	土師器 古瓦	平瓦	(12.0)	(10.4)	2.4	—	浅黄色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000144	
273	273 273A	S D 127	土師器 古瓦	平瓦	(13.2)	(12.3)	2.3	灰黄色～ 灰褐色	赤灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000160	
274	274 274A	S D 127	土師器 古瓦	平瓦	(12.1)	(11.4)	3.0	—	黄褐色～ 黄褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000161	
275	275 275A	S D 127	土師器 古瓦	平瓦	(11.4)	(9.6)	1.8	—	灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000153	
276	276 276A	S D 127	土師器 古瓦	平瓦	(5.6)	(5.3)	2.2	—	黄灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000156	
277	277 277A	S D 127	土師器 古瓦	平瓦	(7.10)	(6.2)	2.4	—	灰白色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000145	
278	278 278A	S D 127	土師器 古瓦	平瓦	(7.3)	(6.5)	1.9	—	灰褐色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000148	
279	279 279A	S D 127	土師器 古瓦	平瓦	(8.2)	(6.3)	2.5	—	黄灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000159	
280	280 280A	S D 127	土師器 古瓦	丸瓦	(9.6)	(8.8)	1.7	—	黄灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000151	
281	281 281A	S D 127	土師器 古瓦	丸瓦	(9.7)	(6.2)	1.9	—	浅黄色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000137	
282	282 282A	S D 127	土師器 古瓦	丸瓦	(6.3)	(3.1)	1.5	—	灰色	同転ナゲ	同転ナゲ	—	精良	褐色粒、赤色 粒を含む	202002 000170	
283	283 283A	S D 127	土師器 土製品	ヒトケツ 土鍋	—	—	(2.4)	浅黄褐色	にぶい褐色	横ナゲ	横ナゲ	—	精良	褐色粒、黒 母を含む	202002 000128	
284	284 284A	S D 127	土師器 土製品	石鍋	(4.5)	(10.9)	2.0	—	灰色	ケツ ナゲ	ケツ ナゲ	—	—	褐色粒、 黒母あり	202002 000140	
285	285 285A	S D 127	土師器 土製品	磁石	(7.8)	6.4	(5.4)	—	にぶい褐色～ にぶい赤褐色	使用面	ケツ ナゲ	—	—	砂質	(3.8) g	202002 000146

第9表 出土遺物観察表⑧

遺物 No.	出土 層位	種別	形状	数量 (個)			色調				調査・文様		図録 番号		
				目録 (個)	目録 (個)	目録 (個)	内面 (顔面、線面)	内面 (内面、粘土)	外面 (外面)	外面 (外面)	底面・底 (底面)	粘土 ・土 質		取巻・備考	
286 器用器	S K14	土師器	片	—	—	(1.7)	褐色	褐色	赤切り黄 褐色	ナダ	赤切り黄 褐色	精良、褐色粘 土、黄砂を含む	底面片、横けきみ著しい	202002 000615	
287 器用器	S K14	土師器	小皿	8.4 ~ 8.5	7.3 ~ 7.4	1.8	にぶい褐色	にぶい褐色	同転ナダ	同転ナダ	赤切り黄 褐色	精良、褐色粘 土、黄砂を含む	横けきみ著しい	202002 000017	
288 器用器	S K14	土師器	小皿	(8.0)	6.9 ~ 7.1	1.4	褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	赤切り黄 褐色	精良、褐色粘 土、黄砂を含む	横けきみ	202002 000616	
289 器用器	S K14	土師器	土鍋	—	—	(3.3)	褐色	褐色	ヘラシ、同転ナ ダ、黒線	ヘタ目	—	精良、黄砂、黄砂 を含む	—	202002 000018	
290 器用器	S K14	土師器	土鍋	—	—	(3.3)	褐色へ にぶい褐色	褐色	ヘラシ、同転ナ ダ、黒線	ヘタ目	—	精良、黄砂、黄砂 を含む	外面に黒線	202002 000019	
291 器用器	S K14	瓦器	埴	15.5 ~ 16.1	5.1 ~ 5.2	6.7 ~ 7.1	黄褐色	黄褐色	同転ナダ	工ナダ	同転ナダ	精良、褐色粘 土、黄砂を含む	地成不良で横けきむ 内外面に黒線	202002 000020	
292 器用器	S K14	瓦器	埴	—	—	(6.2)	黄色へ 黄褐色	黄褐色へ 灰色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	精良、黄砂を含む	—	202002 000021	
293 器用器	S K14	瓦器 筒形器	筒	—	—	(4.3)	灰白色	灰白色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良	外面に黒線	202002 000022	
294 器用器	S K235	土師器	片	—	—	(1.1)	褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	精良、黄砂、赤 褐色粘土を含む	底面片、横けきむ	202002 000026	
295 器用器	S K235	瓦器 筒形器	筒	—	—	(3.3)	オリーブ 褐色	灰白色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良	外面に黒線	202002 000027	
296 器用器	S P35	黄鉄器	西鉄	(17.8)	—	(8.9)	灰色へ オリーブ色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良、黄砂、赤 褐色粘土を含む	—	202002 000028	
297 器用器	S P35	土師器	皿	(13.8)	9.8 ~ 10.0	2.5 ~ 2.1	明黄褐色へ 褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	赤切り黄 褐色	精良、黄砂、黄 砂を含む	底面著む 内面に黒線	202002 000029	
298 器用器	S P35・ 36	土師器	小皿	(17.0)	—	1.2	にぶい褐色	にぶい褐色	同転ナダ	同転ナダ	ナダ	精良	—	202002 000029	
299 器用器	S P35・ 36	黒色土師 器用器	埴	—	(6.0)	(1.8)	灰色	黒褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り ナダ	精良	底面片	202002 000060	
300 器用器	S P173	土師器	皿	(18.2)	(11.6)	3.25	にぶい黄褐色 へ黄褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	赤切り ナダ	精良	底面著む	202002 000012	
301 器用器	S T5	近世 陶磁器	皿	8.0	3.1	4.3	染付	灰白色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良	外面縁塗れる	202002 000011	
302 器用器	S T9	近世 陶磁器	皿	—	—	(3.1)	灰ナリ色へ オリーブ色	灰白色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良	底面片、縁線	202002 000012	
303 器用器	S P46	衛生土師 器用器	蓋	—	—	(4.1)	明黄褐色	にぶい 黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	砂粒を含む	口縁部片	202002 000071	
304 器用器	S P276	衛生土師 器用器	蓋	—	—	(2.0)	にぶい黄褐色 へ黄褐色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	砂粒を含む	外面底の一部黒炭	202002 000027	
305 器用器	S P433	土師器	埴蓋	(7.7)	(8.0)	(1.70)	にぶい黄褐色 へ黄褐色	にぶい黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	ナダ	精良、赤褐色粘 土を含む	横み	202002 000024	
306 器用器	S P184	土師器	埴蓋	(8.8)	(8.8)	(1.3)	褐色へ にぶい褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ナダ	精良	横み	202002 000216	
307 器用器	S P97	土師器	埴蓋	(14.7)	—	(2.9)	褐色へにぶい褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良、赤褐色粘 土を含む	—	202002 000091	
308 器用器	S P264	土師器	片	(13.4)	(6.0)	3.85	にぶい褐色へ にぶい黄褐色	にぶい褐色へ 黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り 黄褐色	精良、黄砂を 含む	—	202002 000286	
309 器用器	S P236	土師器	片	(13.1)	8.2	3.7 ~ 2.8	明黄褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り	精良、黄砂、赤 褐色粘土を含む	—	202002 000288	
310 器用器	S P290	土師器	片	(12.8)	(6.6)	3.4	にぶい褐色	にぶい褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り	精良、黄砂を含む	外面に黒線	202002 000287	
311 器用器	S P92	土師器	片	(12.2)	(7.8)	3.4	褐色へ にぶい褐色	褐色へ にぶい褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り	精良、赤褐色粘 土を含む	—	202002 000080	
312 器用器	S P97	土師器	片	(16.8)	—	(3.0)	にぶい褐色	褐色へ にぶい褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良、細砂粒を 含む	外面に黒線	202002 000092	
313 器用器	S P27	土師器	片	—	—	2.9	褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り	精良、黄砂を含む	内面に付着物	202002 000075	
314 器用器	S P30	土師器	小埴	9.2 ~ 9.3	3.5 ~ 2.7	—	褐色へ 明黄褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	赤切り	精良、黄砂を含む	全体的に横けきむ	202002 000056	
315 器用器	S P100	土師器	皿	(14.9)	(9.8)	2.0	にぶい褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	精良、赤褐色粘 土を含む	—	202002 000093	
316 器用器	S P191	土師器	皿	(12.6)	(7.3)	2.2	にぶい褐色 へ黄褐色	にぶい褐色 へ黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り	精良	外面に黒線	202002 000221	
317 器用器	S P452	土師器	皿	(14.4)	(10.0)	2.7	にぶい褐色 へ褐色	にぶい褐色 へ褐色	同転ナダ	同転ナダ	赤切り	精良、黄砂粒、 黄砂を含む	—	202002 000378	
318 器用器	S P441	土師器	小皿	9.8	7.2	1.9	褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り	精良、赤褐色粘 土を含む	—	202002 000326	
319 器用器	S P439	土師器	埴	(15.0)	(3.2)	5.2	赤色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	精良、黄砂を 含む	—	202002 000177	
320 器用器	S P12	土師器	片	—	—	(1.8)	にぶい褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良	外面に黒線	202002 000230	
321 器用器	S P76	土師器	蓋	(18.8)	—	(5.3)	にぶい黄褐色 へ褐色	にぶい褐色へ にぶい黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	精良、黄砂、 砂粒を含む	—	202002 000077	
322 器用器	S P230	土師器	蓋	—	—	(4.0)	褐色へ にぶい褐色	灰褐色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	精良、黄砂、赤 褐色粘土を含む	内面に横けきむ	202002 000556	
323 器用器	S P385	土師器	蓋	(28.6)	—	(16.0)	黄褐色へ 褐色	褐色へ 黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	—	砂粒を含む	—	202002 000298
324 器用器	S P191	土師器	筒形器	—	—	(5.7)	褐色へ 黄褐色	褐色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	精良、砂粒、 黄砂を含む	内外面被膜	202002 000023	
325 器用器	S P452	土師器	土鍋	—	—	(4.7)	黄褐色へ 黄褐色	褐色へ にぶい褐色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	精良、黄砂、 黄砂を含む	外面にスス	202002 000379	
326 器用器	S P82	黄鉄器	片	—	—	(2.0)	灰色	灰色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良	—	202002 000081	
327 器用器	S P422	黄鉄器	蓋	—	—	(3.0)	灰色へ暗灰色	灰色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り	精良、細砂粒を 含む	—	202002 000322	
328 器用器	S P131	黄鉄器	転用機	—	—	(2.4)	黄褐色へ 黄褐色	黄褐色	同転ナダ	同転ナダ	同転ナダ	精良	西洋内部を転用、 薄型あり	202002 000171	
329 器用器	S P275	黄鉄器	転用機	5.6	5.0	1.9	灰白色	灰白色	同転ナダ	同転ナダ	ヘラ切り	精良、黄砂粒、 褐色粘土を含む	底面部を転用	202002 000262	
330 器用器	S P101	黄鉄器	蓋	—	—	(4.1)	黒褐色へ にぶい黄褐色	褐色へ にぶい褐色	同転ナダ	同転ナダ	—	精良、黄砂粒を 含む	口縁部片、自然脱落	202002 000095	

第10表 出土遺物観察表⑨

遺物 No.	出土 遺場	種 別	形 状	材 質	計 量 (mm)			色 調		調 整・文 様		材 質・石 材	専 業・備 考	登録 番号	
					口径 (最大)	直径 (最大)	高さ (最大)	外面 (内面・断面)	内面 (内面・断面)	外面 (断面)	内面 (断面)				底面・底心 (断面)
331	SP427	履帯跡	塊	—	—	(5.3)		灰白色	粘土印の 磨跡	接合痕 あり	—	精良, 漆粉粒を 含む	断面片	202002 000123	
332	SP71	履帯跡	塊	—	—	(13.7)		灰白色～ にぶい褐色	粘土印の 磨跡	平行文印の あり	—	—	精良	202002 000076	
333	SP29	線輪陶器	塊	—	—	(0.3)		暗黄緑色 ～黄褐色	ナナ折合 痕跡	同転ナナ 折合・磨跡	ナナ折合 痕跡	—	精良	202002 000055	
334	SP100	線輪陶器	細片	—	—	(1.3)		黄褐色	灰白色	磨り 痕跡	不明 磨跡	—	精良	202002 000074	
335	SP42	胃腸 器磁器	碗	—	—	(3.3)		灰ネージュ黄 色	灰白色	同転ナナ 折合	片層磨跡 あり	—	精良, 漆粉粒を 含む	202002 000260	
336	SP49	土製品	罐	5.2	3.9	2.5		にぶい褐色～褐色	磨り文印 あり	布目 へツ切印	研磨痕	精良, 漆粉粒を 含む	口縁部, 底面磨 痕あり	202002 000172	
337	SP409	古瓦	平瓦	58.9	(7.3)	2.4		淡黄褐色	灰黄色	布目 へツ切印	磨り文印 あり	精良, 赤色粒 子, 裏面を含む	口縁部	202002 000321	
338	SP283	古瓦	丸瓦	(10.5)	(5.0)	1.5～ 1.7		灰白色 ～灰褐色	灰色	ナナ折印	布目 へツ切印	精良, 磁砂粒, 底面を含む	口縁部	202002 000229	
339	廣瀬土坑 A	磁器	小皿	(10.6)	(6.6)	3.3		—	—	クハム跡	—	精良	断面 磨花・磨	202002 000397	
340	廣瀬土坑 A	ガラス 製品	瓶詰瓶	5.2	5.5	9.4		無色透明	—	磨り磨跡	[M]	気泡を若干含む	Saikiya jar / TOYO SEIKAN等	202002 000299	
341	廣瀬土坑 A	ガラス 製品	瓶詰瓶	2.1	4.5～ 6.9	16.65		無色透明	—	目蓋 (丸縁部)	—	気泡を若干含む	口縁若干含む	202002 000400	
342	廣瀬土坑 A	骨角製品	歯付刀	16.0	1.2	0.55		象牙色 ～淡黄色	—	—	—	—	—	202002 000398	
343	廣瀬土坑 B	磁器	小碗	5.8	2.2	3.0～ 3.1		無色透明	口縁部, 文字は赤漆 口縁部のみ赤黄色	口縁部 磨跡	—	—	精良	口縁磨り含む	202002 000401
344	廣瀬土坑 B	ガラス 製品	牛乳瓶	2.0	4.95	16.4		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000403	
345	廣瀬土坑 B	ガラス 製品	薬瓶	1.3～ 1.4	0.8～ 1.6	6.5		茶色透明	—	—	—	—	—	202002 000404	
346	廣瀬土坑 B	ガラス 製品	目薬瓶	8.0	2.3	1.55		青色透明	—	—	—	—	—	202002 000406	
347	廣瀬土坑 B	ガラス 製品	目薬瓶	8.2	2.3	1.45		青色透明	—	—	—	—	—	202002 000405	
348	廣瀬土坑 B	ガラス 製品	ソー ス瓶	1.8	5.0	23.8		青緑色透明	—	—	—	—	—	202002 000402	
349	廣瀬土坑 B	磁器	中皿	12.8	6.2	2.7～ 2.85		白磁	色緑	—	草花 模(丸縁部 TOYO)	—	精良	縁の一部が磨花	202002 000409
350	廣瀬土坑 C	磁器	小碗	(5.7)	(2.6)	3.1		白磁	色緑	—	—	—	—	202002 000407	
351	廣瀬土坑 C	瓦	平瓦	59.0	(10.6)	2.1		暗灰色～灰色	—	—	—	—	—	202002 000410	
352	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	びん 瓶	1.8	0.6	29.0		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000411	
353	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	飲料瓶	—	5.4	(10.1)		黄緑色透明	—	—	—	—	—	202002 000412	
354	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	牛乳瓶	—	4.4	(15.6)		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000413	
355	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	調味料 瓶	—	4.5	(20.8)		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000415	
356	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	ソー ス瓶	0.8	2.1	7.1 ～7.2		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000421	
357	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	調味料 瓶	3.4	4.2	8.5		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000422	
358	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	調味料 瓶	3.3	4.0	8.6		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000423	
359	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	調味料 瓶	1.7	2.4	8.4		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000416	
360	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	調味料 瓶	1.6	2.3	8.4		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000417	
361	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	調味料 瓶	1.6	1.7 ～2.65	7.1		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000420	
362	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	食卓瓶 薬瓶	2.6	3.0	2.0 ～2.1		青緑色透明	—	—	—	—	—	202002 000425	
363	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	食卓瓶 薬瓶	4.1	4.2	9.4 ～9.7		青緑色透明	—	—	—	—	—	202002 000426	
364	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	食品瓶	1.4	5.0	11.1		緑青色透明	—	—	—	—	—	202002 000441	
365	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	薬瓶	3.6	5.5	9.8 ～9.9		黄緑色透明	—	—	—	—	—	202002 000414	
366	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	薬瓶	1.4	4.0	15.1 ～15.2		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000430	
367	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	薬瓶	1.2	2.9 ～3.1	10.65		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000431	
368	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	薬瓶	1.6	3.4	3.9		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000432	
369	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	薬瓶	1.0	1.8	6.0		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000433	
370	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	薬瓶	1.5	5.2	13.9		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000434	
371	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	目薬瓶	2.4	3.9	11.8		茶色透明	—	—	—	—	—	202002 000435	
372	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	目薬瓶	0.2	1.1	7.15		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000445	
373	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	化粧瓶	0.5	2.3～ 3.6	11.3		緑色透明	—	—	—	—	—	202002 000436	
374	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	化粧瓶	0.4	3.1	9.2		無色透明	—	—	—	—	—	202002 000442	
375	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	化粧瓶	3.0	2.8	3.5		白色	—	—	—	—	—	202002 000439	

第11表 出土遺物観察表①

遺物 No.	出土 層位	種別	形種	質量 (g)			色調				調査・文 書	出土 層位	重量・備考	登録 番号		
				口縁 (口)	底面 (底)	底面 (底)	外面 (口縁、縁部)	内面 (内面、胎土)	外面 (口縁)	内面 (内面)					口縁・底 (胎土)	
376 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	化粧瓶	3.0	3.4	5.45		白色				精貝	375と一対 胴部径：4.8cm	202002 000440		
377 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	化粧瓶	—	6.1	(4.4)		無色透明		「KINTURE」	丸に基	精貝	胴部径：2.1cm 断面正方形	202002 000438		
378 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	化粧瓶	4.0	4.8	6.0		白色			おじ切り	精貝	胴部径：6.0cm	202002 000437		
379 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	白磁瓶	0.9	2.25	7.2		無色透明		「るり」 「3」	丸に基	精貝	胴部径：2.8cm	202002 000446		
380 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	白磁瓶	1.0	2.2	7.2		無色透明		「るり」	「1」	丸に基	精貝	胴部径：2.8cm	202002 000447	
381 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	インク 瓶	1.6	4.1	5.4		黄緑色透明			「雙龍M」	丸に基	精貝	胴部径：4.7cm	202002 000447	
382 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	インク 瓶	2.3	4.7	6.7		無色透明				丸に基	精貝	胴部径：5.5cm	202002 000428	
383 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	タリム 瓶	5.8	5.4	3.0		白色			石蓋「廣 瀬風情」	精貝	胴部径：7.0cm	202002 000445		
384 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	紙油瓶	1.6	5.85	16.1		黄緑色透明		「ラジエ ン」		丸に基	精貝	胴部径：6.3cm	202002 000429	
385 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	不明 製品	(0.0)	2.2	(7.0)		濃青色透明				精貝	386と同型	202002 000443		
386 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	不明 製品	(0.5)	2.25	(7.8)		濃青色透明				精貝	385と同型	202002 000444		
387 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	実験 器具	1.2	1.2	6.45		無色透明				精貝	胴部径：1.6cm	202002 000430		
388 第43層	廣瀬土坑 C	ガラス 製品	実験 器具	—	0.6	(31.0)		無色透明				精貝	胴部径：5.3cm	202002 000449		
389 第43層	廣瀬土坑 D	磁器	磁器 (7.8)	(3.7)	6.05		色緑			口縁 底面 胎土		精貝	胴部径：6.75cm	202002 000455		
390 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	飲料瓶	2.0	5.2	22.6		薄緑色透明		「S S」	丸に基	精貝	胴部径：5.2cm	202002 000456		
391 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	化粧瓶	1.2	3.8	11.1		無色透明			丸に基	精貝	胴部径：4.8cm	202002 000460		
392 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	化粧瓶	3.2	3.6	6.0		無色透明				花繪	精貝	胴部径：5.0cm	202002 000458	
393 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	化粧瓶	4.65	4.8	2.95		白色			おじ切り	精貝	胴部径：6.6cm	202002 000458		
394 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	化粧瓶	4.1	4.5	5.1		白色		「フッ スター タリム」		精貝	表面緑斑を 含む	202002 000465		
395 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	化粧瓶	1.6	2.3	10.1		無色透明			「永翠」	丸に基	精貝	胴部径：2.3	202002 000467	
396 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	ケチャ ップ瓶	1.8	3.2	15.3		無色透明			「S S」	丸に基	精貝	胴部径：4.8cm	202002 000466	
397 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	牛乳瓶	1.5	3.45	12.05		無色透明		おじ切り 胎土多数		丸に基	精貝	胴部径：4.8cm	202002 000469	
398 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	瓶詰瓶	3.7	3.8	7.5		青緑色透明			おじ切り	上リ底	丸に基	精貝	胴部径：4.0	202002 000473
399 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	薬瓶	2.4	4.1	11.8		茶色透明		「Bakostu」	「6 SAAGA」	丸に基	精貝	胴部径：4.85cm	202002 000471	
400 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	インク 瓶	1.8	4.6	6.5		無色透明				丸に基	精貝	胴部径：4.5cm	202002 000470	
401 第43層	廣瀬土坑 D	ガラス 製品	化粧瓶	3.4	3.4	4.9		白色			おじ切り	丸に基	精貝	胴部径：4.6cm	202002 000472	
402 第43層	雑品	衛生土器	薬	—	—	(8.3)		にぶい黄褐色 ～黄褐色		にぶい 黄褐色	ハケ目	ハケ目	一砂粒、雲母を含む	外面に黒斑あり	202002 000461	
403 第43層	雑品	衛生土器	薬	—	—	(4.8)		にぶい黄褐色 ～黄褐色		にぶい 黄褐色	ハケ目	ハケ目	一砂粒、雲母を含む		202002 000474	
404 第43層	雑品	土師器	小埴	(7.8)	4.5	2.6		にぶい褐色			網刺ナゲ	赤褐色	精貝	底面片む	202002 000478	
405 第43層	雑品	土師器	細片	—	—	(1.0)		灰褐色		褐色	—	ナゲ	赤褐色	精貝	底面片む	202002 000474
406 第43層	雑品	須恵器	片蓋	—	—	(1.60)		灰黄色～黄灰色			網刺ナゲ	網刺ナゲ	—	精貝、黒砂粒を 含む	202002 000527	
407 第43層	雑品	古瓦	丸瓦	(8.4)	(3.4)	1.5		灰色			網目文 明子	赤目	ハケ目 胎土片む	精貝、黒砂粒を 含む	202002 000491	
408 第43層	雑品	ガラス 製品	薬瓶	1.0	2.8	8.0		無色透明			緑 ガラス	丸に基	精貝	胴部径：1.0cm	202002 000520	
409 第43層	雑品	瓦	平瓦	(11.3)	(6.3)	1.5		褐色			ナゲ	赤褐色	精貝、黒砂粒を 含む	表面一部酸化	202002 000482	
410 第43層	表層	陶器	雲道具	(14.6)	(12.4)	5.8		にぶい黄褐色 ～黄褐色		にぶい 黄褐色	網刺ナゲ 胎土片む	網刺ナゲ 胎土片む	ナゲ	精貝、黒砂粒を 含む	202002 000484	
411 第43層	S D 363	鉄製品	鉄片	2.8	2.6	1.8		にぶい 赤褐色			鉄片	—	—	11.65g	202002 000489	
412 第43層	S F 445	鉄製品	鉄片	5.4	4.6	3.2		にぶい 赤褐色			鉄片	—	—	85.85g	202002 000490	
413 第43層	S F 445	鉄製品	鉄片	2.5	2.15	1.35		にぶい 赤褐色			鉄片	—	—	11.29g	202002 000491	
414 第43層	S F 445	鉄製品	鉄片	5.7	3.3	2.7		にぶい 赤褐色			鉄片	—	—	16.15g	202002 000492	
415 第43層	S D 127	鉄製品	方角 鐵片	(3.4)	2.1	0.3		にぶい 赤褐色			鉄片	—	—	8.05g	202002 000485	
416 第43層	S D 127	鉄製品	鉄片	(3.2)	1.9	0.25		にぶい 赤褐色			鉄片	—	—	(3.45)g	202002 000486	
417 第43層	S D 127	鉄製品	鉄片	(3.9)	(3.8)	1.7		にぶい 赤褐色			鉄片	—	—	35.75g	202002 000488	
418 第43層	S D 127	鉄製品	鉄片	(2.9)	2.1	0.9		にぶい 赤褐色			鉄片	—	—	7.10g	202002 000487	
419 第43層	廣瀬土坑 D	銅製品	鏡蓋	1.9	1.9	0.1		緑青			菊花 胎土片む	「S」 「緑青」	—	0.6g 1938～1940	202002 000493	
420 第43層	雑品	銅製品	鏡蓋	1.7	1.7	0.15		緑色			菊花 胎土片む	「S」 「緑青」	—	1.6g 1938～1942	202002 000494	

IV. 総 括

1. はじめに

310 次以上に及ぶ筑後国府跡の発掘調査で、西上ノ原地区の調査は第 296・310 次調査と本書に収録した第 298 次調査のみである。また、調査面積が 1,000 m²以上の発掘調査も、開発に伴う調査に限れば、平成 20 年（2008）の第 227 次調査（注 1）以来のことである。弥生時代から近代に及ぶ多種多様な遺構と遺物を発見し、古代に収まらない複合的な遺跡の様相を示す。

ところで、第 298 次調査の北隣では、令和 3 年に第 310 次調査を実施している。隣接しあう第 298・310 次調査を同時に報告し、一まとめに総括を行うべきだが、諸般の事情で第 310 次調査の整理作業は完了していない。そこで本章では、第 298 次調査で検出された主要遺構の変遷を概観するだけに留めた。周辺の遺構との関連や、出土遺物の特徴、国府城内における位置づけといった詳細な検討は、第 310 次調査の総括で行うこととしたい。従って、第 310 次調査の総括では、第 298 次調査の成果が本章の記述と異なる可能性がある。

2. 遺構の変遷について

第 298 次調査で検出された遺構と遺物は、弥生時代後期と古代（7～11 世紀）、中世（12～14 世紀）、近世後期（19 世紀後期）、昭和初期（20 世紀前期）に大別できる。これらの主要遺構を、前後関係や方位、遺物の年代などから変遷を整理したものが第 12 表と第 45～47 図である。混入遺物も多く、わずかな出土遺物から、遺物による年代決定が困難な遺構も少なくない。そのため、前後関係や方位、遺構の深さなどから、同一時期または別時期の遺構と判断した点もある。

第 1 期

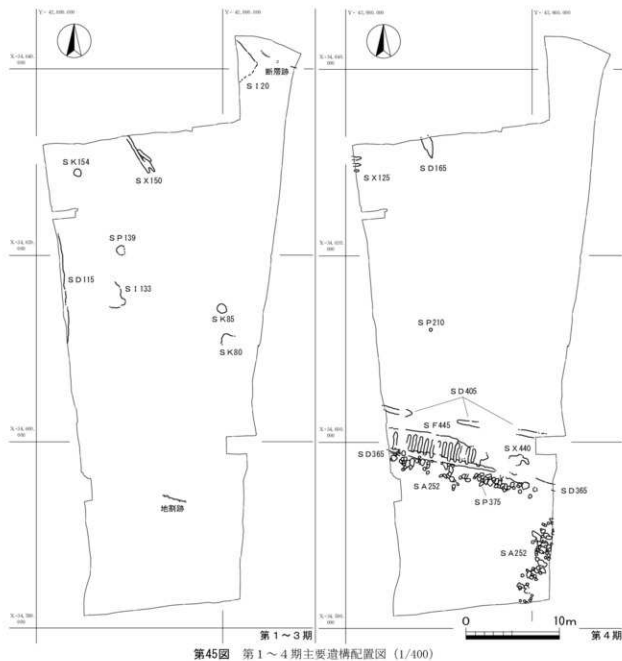
第 298 次調査で検出された遺構で最古相の遺構で、竪穴住居 S I 20 と土坑 S K 154 が挙げられる。S I 20 は残存状況が悪いが、ピットの位置と段の規模から、一辺約 4.5 m の規模に復元できると考えられる。調査区の間が 4.5 m 離れている第 310 次調査で、S I 20 の続きを検出していない点も、このことを裏付ける。その年代は、出土した甕の底部が若干膨らんでいる個体と平底の個体が混在する点や、大甕の年代が甕棺の K V 式に収まる点などから、下大隈式土器段階、つまり弥生時代後期の中頃から後半に収まると考えられる（注 2）。筑後国府跡では、本調査地点の北方に位置する古

第 12 表 第 298 次調査主要遺構の変遷

国府以前		国 府 並 行				国 府 以 降				
第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期	第 8 期	第 9 期	第 10 期	第 11 期
S I 20	S P 130 (遺物)	SD 115	S F 445	SD 190	SD 160	SD 1	SD 2	SD 127	ST 5～11	築土坑 A・D・H ・J
S K 154		S I 133	S X 440	SD 140	SD 170	S K 241	SD 40	S X 372	・ 15	
	断層跡		S D 365			SD 160	S K 235	S X 373		
	地割跡	S K 80	S D 405	S K 400	SD 453		SD 60		S P 30	
		S K 85	S A 252	SD 475	SD 446	SD 215		S P 16		
			S P 210	SD 120			SD 50			
		S X 150	S X 125	SD 156	SD 155			S K 14		
			SD 165					S P 35		

宮地区や大林地区で長さ 400 m 以上、幅 6.5 m の大溝が検出されており、大溝に沿うように弥生時代後期後葉から古墳時代早期の竪穴住居が 100 基以上検出されている（注3）。第 298 次調査地点周辺に目を向けると、道路を挟んで西に位置する第 64 次調査地点で弥生時代後期から終末期の掘立柱建物や竪穴建物、土坑が検出された（注4）。第 298 次調査でも攪乱からの出土だが、タタキを有する甕が出土している。古宮地区や大林地区で大溝を伴う大規模な集落が営まれたのと同時期に、葉山地区でも終末期の遺構が営まれたことが指摘されてきたが、今回の調査でその年代が後期後葉まで遡り、分布も西上ノ原地区まで及んでいたことが明らかになった。

土坑 S K 154 は、フラスコ状の断面を有する貯蔵穴である。筑後国府跡では、第 58 次調査でもフラスコ状の断面を有する S K 2762 が検出されており（注5）、わずかな弥生土器の細片と石製品から



弥生時代後期後半に比定されている。SK 154 は出土遺物が皆無だが、SK 2762 の年代から、SI 20 と同じ弥生時代後期に収まる可能性がある。

第2期

SP 139 から出土した、丹塗りを施す土師器坏と地震痕跡が該当する。SP 139 はSD 140 に後出するので、土師器坏は混入品である。その年代は、7世紀前半まで遡ると考えられる(注6)。調査区の北方には断層崖があり、第87・93・105・222・241次調査では、6世紀後半～7世紀初頭の竪穴建物群が検出されている(注7)ほか、西隣の葉山地区では、第92次調査で7世紀末の土坑(注8)、第106次調査で7世紀後半の土坑が見つかった(注9)。出土した土師器坏は1点のみだが、7世紀の遺構が調査地点の周囲にも広がっていた可能性を示唆する。

地震痕跡は、調査区の北端で断層跡を、南部中央で地割跡を検出した。断層崖に位置する第296次調査では、千本杉断層の本体とみられる不整合が検出されている(注10)。今回検出した地震痕跡のうち、断層跡は後出する遺構から12世紀以前、地割跡は単独で検出したため年代不明だが、『日本書紀』天武天皇7年(678)12月条に記述がある「筑紫地震」に伴う可能性が高い。

第3期

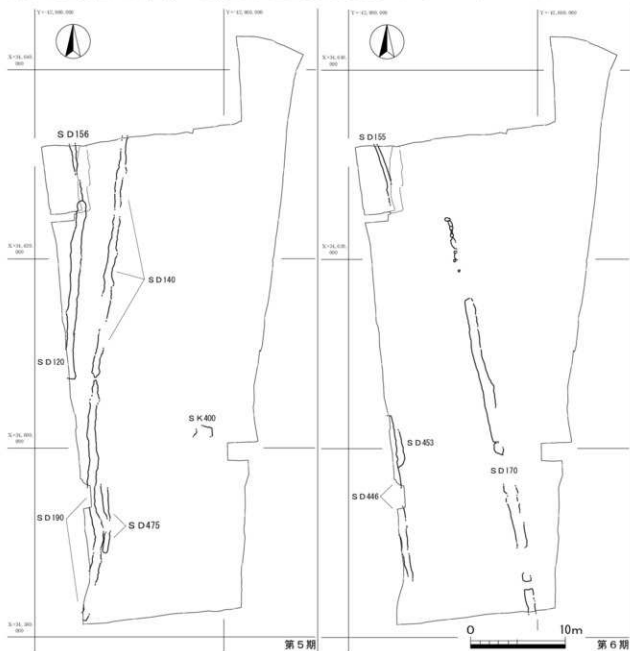
SI 133 とSK 80・85 が挙げられるほか、出土遺物からSD 115 とSX 150 もこの時期に加えた。SI 133 は突出部に焼土が分布し、炉を有する構造だったことは明白だが、出土遺物に乏しく、その用途ははっきりしない。黒色土器A類の細片も出土しているが、土師器の坏蓋など古相の遺物が大半を占める。筑後国府跡では、8世紀後半までに竪穴建物が終焉するという指摘があり(注11)、SI 133 の年代も坏蓋の形状から、8世紀後半に収まると見られる。SK 80・85 は、出土遺物が相互に接合したことから、並存した可能性が高い。出土遺物が土師器と須恵器のみで構成されており、口縁部が退化した坏蓋や、筑後型の土師器坏があることから、これらの年代も8世紀後半に収まるとみられる(注12)。このほか、SD 1・2・120・127・140・165、SF 445 から多数の須恵器が混入しており、SD 1 出土の坏やSK 400 出土の坏のように、8世紀前半まで遡る須恵器もある。8世紀中頃に阿弥陀地区へ国府城が移転する前後に、まとまった数の遺構があったことが想定できる。

なお、SD 115 とSX 150 も出土遺物が土師器と須恵器に限られることから、この時期に収まる可能性がある。SD 115 は大半が調査区外に及ぶため、その性格は不詳である。SX 150 は埋土が硬化しているが、道路跡とみられる溝から外れており、道路に伴う硬化面とは考えにくい。

第4期

SF 445 と並走するSD 365・405、延長上のSX 440、SF 445 と方位が同じSA 252、およびSD 165 とSP 210・375、SX 125 が該当する。SF 445 は、調査前には想定もしていなかった道路である。SD 365 やSF 445 の掘方から、黒色土器A類や緑軸陶器の細片が出土しており、その年代は9世紀代に収まる。ただし、須恵器の出土が目立つ点、土師器甕が頸部内面の稜線が不明瞭な8世紀代の特徴を有する(注13)点から、道路の築造が8世紀まで遡る可能性もある。北側の三反野地区に位置する第87・246次調査地点では、鉄滓や輪羽口などの鍛冶関連遺物が8世紀から9世紀前半に

かけて集中して出土している(注14)。SD 365とSF 445でも、微量だが鉄滓が出土しており、8世紀後半まで遡る可能性を示唆する。年代の上限は、硬化面直上から器高が低い黒色土器B類壺が出土した点、黒褐色土から糸切底の土師器小皿が出土した点から、10世紀に及ぶ可能性も残る。SA 252は、黒色土器A類壺の口縁部が外反しない点や、SP 375から須恵器壺の肩部が出土した点から、9世紀の遺構と判断した。こうしたピット群が列状に集中する「ピット列(注15)」は、筑後国府跡の各地で8～10世紀にかけて検出されており、第84・98・219・244・249・289次調査(SA 3610・4015・219 SA 40)と第158・198次調査では、SA 252と同様にピット列が折れ曲り、区画を構成する。これらの遺構は、道路遺構の近辺で検出されること(注16)から、道路遺構と同時期に併存する圍繞施設である可能性があり、第289次調査では生垣痕跡と想定されている(注17)。SD 165はSD 140が



第46図 第5・6期主要遺構配置図(1/400)

後出し、滑石製石鍋の破片が出土したことから(注18)、9世紀より古くならないと判断した。S P 210の年代も、土師器壺の形状から、9世紀前半に収まると考えられる。調査区北西部で検出したS X 125は、緑釉陶器水注の把手部の破片が出土したことから、この時期に加えた。もともと出土遺物が僅少であるため、より後世の道路に伴う可能性も残る。

第4期の遺構が属する9世紀は、8世紀後半に阿弥陀地区へ移転した政庁(Ⅱ期政庁)が築地と脇殿を解体して改築され、柿ノ内・ギャクシ・風祭・井葉地区に国司館が設置される(注19)など、国府城で大規模な開発が行われる時期である。第4期の遺構は、こうした国府城の開発に伴って築かれた可能性がある。なお、S F 445のようにピット列を伴う道路は、官道以外の道路に伴うことが指摘されている(注20)。また、S F 445の方位はN-80°-Wで、真北や東西方向でもなければ、山川・東合川条里区の方位N-16°-E(注21)にも沿わない。S F 445は、字名から御井駅の所在地に比定されている葉山地区に向かっており、葉山地区の遺構を交えた検討が今後の課題である。

第5期

S D 140と延長上のS D 190、ほぼ同じ方位のS D 120・475、S D 156とS K 400が挙げられる。S D 140出土の土師器皿やS D 190出土の土師器壺の形状から、年代は9世紀後半が下限で、10世紀代に収まる。S D 140・190は合計約50m以上に及ぶ。調査地点は国府城と国分寺を結ぶ連絡道路の存在が指摘されており(注22)、S D 120やS D 140・190は、その側溝と想定できる。S D 120とS D 140は芯心距離4~5mを測り、方位も異なることから、S D 120・140・190は同時に並存せず、時期差がある道路東側の側溝と考えられる。これらの溝と対になる道路西側の側溝は、調査地点の西側に位置する可能性が高い。

S D 156は極端に深くなるため、S D 165と対になる可能性もあるが、出土した土師器壺がより新相でS D 140出土遺物に類似するため、この時期と判断した。S D 475はS D 190と並走して蛇行し、出土した土師器壺が端反で、高台が低い黒色土器A類壺を伴うため、この時期に収めた。S K 400は、検出した場所からS F 445に後出することや、土師器壺の形状、黒色土器A類壺の出土から、同時期の土坑と判断した。出土遺物から廃棄土坑と見られるが、道路沿いに集落があったことを窺わせる。

第6期

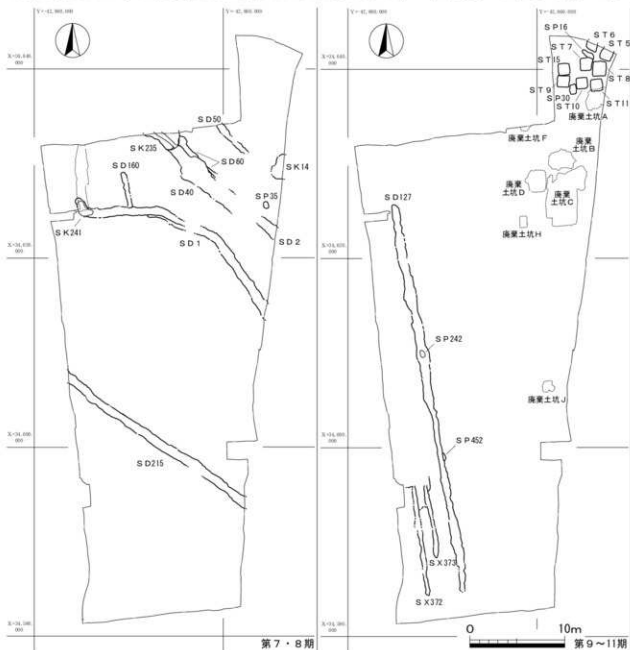
S D 170と延長上のピット群、S D 190に後出するS D 453、S D 453に後出するS D 446、S D 156に後出するS D 155が該当する。溝の方位が東寄りから西寄りに変わり、調査区西隣の字界を兼ねる道路と同じ方位を向く段階である。S D 446以外は比較的浅く、出土遺物は土師器と須恵器、黒色土器A類、古瓦で占められることから、年代が最もはっきりしない時期である。第5・7期の遺構の年代から強いて言えば、10世紀でも比較的新相と想定できる。その用途は、第5期と同様、道路の側溝と考えられる。S D 160・170とS D 446は若干方位が異なり、深さも異なる。間隔も約10.5~11mで、並存した側溝とは考えにくい。S D 160・170は削平されて途切れる箇所があることから、対になる側溝は完全に削平されて残存しない可能性がある。

10世紀中頃には、阿弥陀地区にあったⅡ期政庁が火災で廃絶し、朝妻町の三丁野地区に政庁が移

転する。このⅢ期政庁への移転に伴い、国府域と国分寺を結ぶ道路が東寄りから西寄りに変更された可能性が窺える。同時期の道路跡は第310次調査でも検出しており、その報告で改めて検討する。

第7期

SD 1・215とSK 241、SD 1に後出するSD 160が該当する。これまで述べた道路の側溝とみられる溝を、突如横切る溝が開削される時期である。SD 1の年代は、へら切り底の土師器小皿から、10世紀後半～11世紀に収まる。SK 241は細片ばかりで年代は不明だが、SD 1の底面で検出したことから、同時期の遺構である可能性が高く、溝の端の溜槽といった用途が想定できる。SD 215は、出土した土師器の坏や皿がへら切り底で、施釉陶器や越州窯系青磁碗など9・10世紀代の遺物も出土したが、瓦器境や底面から出土した白磁碗Ⅳ類から、12世紀前半から中頃が年代の上限



第47図 第7～11期主要遺構配置図 (1/400)

となる。筑後国府跡では、政庁の移転に伴い官道が変更された例が報告されている(注23)ほか、10世紀中頃の政庁移転後、阿弥陀地区では11世紀に入るまで遺構の空白期がある(注24)。SD1・215の存在は、阿弥陀地区と国分寺を結ぶ道路が一時廃絶した可能性を示唆する。

第8期

調査区の北東部に遺構が集中し、SD2・40とSK14・235、SP35、出土遺物に乏しいものの方位がSD2・40と同じSD50・60が挙げられる。このうち、SD60とSD40、SK235は前後関係にある。口縁部に刻み目を施す土鍋や、龍泉窯系青磁碗I類の出土から、遺構の年代は12世紀後半に収まる。ただし、龍泉窯系青磁碗I類は、筑後地方において13世紀前半まで使用されたという指摘があり(注25)、SD40とSK235の前後関係は、龍泉窯系青磁碗I類が使用された期間の長さ起因する可能性がある。また、SP35からは口縁部が上下に延びる、12世紀後半から13世紀初頭の須恵器捏鉢が出土しており(注26)、同時期の遺構と判断した。

第9期

SD127とSX372・373、SP16が挙げられる。SD127は、土師器土鍋や龍泉窯系青磁碗といった12世紀後半の遺物が大量に出土した一方で、須恵質や瓦質の捏鉢が出土しており、14世紀が年代の上限となる(注27)。龍泉窯系青磁碗が出土したSP242や土師器土鍋が出土したSP452に後出することも、これを裏付ける。方位がSD127と同じSX372・373は、重複する遺構に後出し、SD127に伴う硬化面と考えられる。SD127とSX372・373の方位は第6期の溝と同一で、道路が再び調査地点に及んだことを示唆する。土師器播鉢が出土したSP16も、同時期の遺構と言える。

第10期

調査区北東部の近世の土壌墓ST5～11・15、SP30が該当する。ST6以外は完掘せず、ST6からも副葬品は出土していない。わずかに出土した陶磁器の年代は、19世紀以降に比定できる。第298次調査地点の北方約70mには、天保年間～明治時代にかけての墓石が並ぶ墓地があるが、今回検出した近世墓群は地表に痕跡が全く無かった。ただし、調査地点の北東隣地には図版12(5)に示したように、墓石や石灯籠を転用した石列がある。墓石の形状は19世紀の特徴を有し、複数の墓石には「明治十五年」(1877)や「明治十六年」(1883)の紀年銘が彫られていた。これらの墓石が今回検出した土壌墓群で使われていたとすれば、その年代は19世紀に収まると考えられる。

第11期

調査区東部の近代廃棄土坑群である。出土遺物に乏しい廃棄土坑F・Hは大正時代まで遡る可能性が残るが、遺物の大半が昭和に入ってから製造・発売された製品である。このことから、これらの廃棄土坑の埋没年代は昭和初期、特に昭和10年代に収まると考えられる。すでに指摘されている(注28)が、昭和初期の久留米を物語る資料は、昭和20年代の戦災や水害で大部分が失われている。発掘調査で出土する遺物でも、歴史史料や民俗資料と同じ貴重な資料群であることに変わり無い。

【注】

- (1) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第227・234・237次発掘調査報告書』久留米市文化財調査報告書第315集 平成24年
- (2) 弥生土器の年代は、下記の文献を参考にした。

- 片岡宏二「弥生時代後期の土器編年について 一特に三国丘陵の資料を中心に」 小郡市教育委員会『三次栗原遺跡Ⅲ・Ⅳ』小郡市文化財調査報告書第23集 昭和60年
- 樋口達也「筑後における甕棺の編年」 瀬高町教育委員会『権現塚北遺跡』瀬高町文化財調査報告書第3集 昭和60年
- 福岡県教育委員会『日本遺跡Ⅱ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第7集 平成6年
- 立石雅文「下大隈式土器」大川清・鈴木公雄・工業普通・編『日本土器事典』雄山閣出版 平成8年
- 田子森千子「筑後川中流域における弥生後期土器について」 七隈史学会『七隈史学会第17回大会研究発表資料集』平成27年
- (3) 久留米市史編さん委員会・編『資料編 考古』久留米市史第十二巻 久留米市 平成9年
- (4) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 昭和60年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第46集 昭和61年
- (5) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 昭和59年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第44集 昭和59年
- (6) 遺物の年代については、下記の文献を参考にした
- 久留米市教育委員会『白口経塚遺跡 一第4・5・6次調査一』久留米市文化財調査報告書第147集 平成10年
- 久留米市教育委員会『旗原遺跡 一第2次調査一』久留米市文化財調査報告書第171集 平成13年
- 大庭孝夫「堂畑遺跡周辺における7世紀後半～8世紀末の土器の変遷」 福岡県教育委員会『堂畑遺跡Ⅲ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第23集 平成17年
- (7) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第222・229・243次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第295集 平成22年
- (8) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 平成2年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第67集 平成3年
- (9) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 平成3年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第70集 平成4年
- (10) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第245・246・296次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第435集 令和4年
- (11) 神保久久「筑後国府と周辺の聚落建物」九州古文化研究会『古文化談叢』第65集(4) 平成23年
- (12) 以下、土器や黒色土器、須恵器、瓦器、陶磁器の年代は、注に示した文献に加えて、下記の文献を参考にした。
- 松村一良「筑後国府跡の調査」(財)古代学協会『古代文化』第35巻第7号 昭和58年
- 山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器 -10～12世紀の資料(1) 本文編-」 日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 昭和63年
- 山本信夫「北部九州の土器」大川清・鈴木公雄・工業普通・編『日本土器事典』雄山閣出版 平成8年
- 横尾賢次郎「大宰府の土器」大川清・鈴木公雄・工業普通・編『日本土器事典』雄山閣出版 平成8年
- 山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性Ⅰ -九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 平成9年
- 山本信夫「研究ノート 大宰府出土土輪陶器の編年について」 国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集 平成11年
- 白木守・近澤康治「筑後における初期貿易陶磁の様相」 日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』第20号 平成12年
- 太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集 平成12年
- (13) 山本信夫「古代前期の煮炊具 一筑前・筑後・豊前・豊後・肥前一」 古代の土器研究会『古代の土器研究 一律令的土器様式の西・東4 煮炊具一』平成8年
- 中島恒次郎「大宰府における土師器の変遷」 大分・大友土器研究会『大分・大友土器研究会論集』平成13年
- (14) 注10文献と同じ。
- (15) 神保久久「筑後国府の道路遺構」九州大学考古学研究室『九州と東アジアの考古学 一九州大学考古学研究室50周年記念論文集一』平成20年
- (16) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 第198次発掘調査報告』久留米市文化財調査報告書第206集 平成17年
- (17) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第219次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第259集 平成19年
- 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第289次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第392集 平成30年
- (18) 木戸雅寿「石罫」中世土器研究会・編『概説 中世の土器・須恵器』真陽社 平成7年
- 東貴之「桶状石罫について -木戸編Ⅰ類の現状-」九州考古学会『平成24年度九州考古学会研究発表資料集』平成24年
- (19) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一Ⅱ期政庁地区一』久留米市文化財調査報告書第399集 令和3年
- (20) 注15文献と同じ。
- (21) 樋口一成「筑後川河南の集里制」久留米市史編さん委員会『久留米市史』第1巻 久留米市 昭和56年
- (22) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 平成5年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第89集 平成6年
- (23) 松村一良「筑後地方を縦断する古代駅路」博物館等建設推進九州会議『文明のクロスロードMuseum Kyusyu』第9号 昭和58年
- (24) 注19文献と同じ。
- (25) 小野裕子「海を渡った陶磁器と土師器の交差点 一両筑前野周辺の貿易陶磁器と土師器の共存関係一」九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター『大宰府史跡指定100年と研究の歩み』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第2集 令和3年
- (26) 森田俊「中世須恵器」中世土器研究会・編『概説 中世の土器・須恵器』真陽社 平成7年
- (27) 楠瀬慶太「日用雑器類から見た中世博多の土器様相 一調理具を中心として一」日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』22 平成21年
- (28) 久留米市教育委員会『鉄砲小路遺跡 一第2次調査一』久留米市文化財調査報告書第273集 平成20年

写 真 图 版



(1) 第298次調査前全景 (北から)



(2) 第298次調査区北西部全景 (南上空から)



(3) 第298次調査区北東部全景 (南上空から)

図版 2



(1) 第298次調査区南部全景(西上空から)



(2) 第298次調査区西部全景(西上空から)



(1) 調査地点から北方を望む（南上空から）



(2) 調査地点から南方を望む（北上空から）

図版 4



(1) S I 20遺物出土状況 (西から)



(2) S I 20貼床検出状況 (南東から)



(3) S I 20完掘状況 (南東から)



(4) S K 154完掘状況 (東から)



(5) S A 252東部完掘状況 (北西上空から)



(6) S D 1 東部完掘状況 (北西から)



(7) S D 1 西部完掘状況 (東から)



(8) S D 115完掘状況 (南東から)



(1) SD120完掘状況 (北から)



(2) SD140完掘状況 (北西上空から)



(3) SD140北端・SD165土層 (南西から)



(4) SD165完掘状況 (北西から)



(5) SD155・156完掘状況 (南東上空から)



(6) SD160礎出土状況 (西から)



(7) SD170完掘状況 (北西から)



(8) SD190・453・446・475完掘状況 (北東上空から)

図版 6



(1) S D190・446・475、S X372土層 (北から)



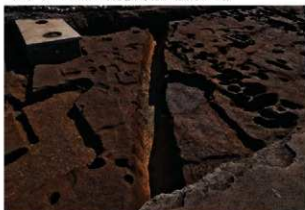
(2) S D190北端遺物出土状況 (東から)



(3) S D215北西部完掘状況 (南東から)



(4) S D215中央部完掘状況 (南東から)



(5) S D215南東部完掘状況 (北西から)



(6) S D215土層 (北西から)



(7) S D405東部土層 (東から)



(8) S F445硬化面・波板状凹凸面検出状況 (北西から)



(1) S F 445波板状凹凸面P10土層 (南東から)



(2) S F 445波板状凹凸面露出土状況 (南東から)



(3) S D 365・S F 445完掘状況 (北西から)



(4) S I 133検出状況 (東から)



(5) S I 133焼土土層 (西から)



(6) S I 133完掘状況 (西から)



(7) S K 80・85完掘状況 (北西上空から)



(8) S K 241検出状況 (南西から)

図版 8



(1) S K 241完掘状況 (西から)



(2) S K 400完掘状況 (北東から)



(3) S P 210遺物出土状況 (北から)



(4) S P 375遺物出土状況 (北西から)



(5) S X 125検出状況 (北から)



(6) S X 125土層 (東から)



(7) S X 150検出状況 (南西から)



(8) S X 150土層 (南東から)



(1) SD2完掘状況(北西から)



(2) SD2土層(北西から)



(3) SD2遺物・礫出土状況(南東から)



(4) SD2・40・60完掘状況(北東上空から)



(5) SD40・60南東部完掘状況(南東から)



(6) SD40・60北西部完掘状況(南東から)



(7) SD40南東部土層(南東から)



(8) SD50完掘状況(南東から)

図版 10



(1) SD127北部～中央部完掘状況 (北西から)



(2) SD127南部完掘状況 (北西から)



(3) SD127中央部掘出土状況 (東から)



(4) SD127中央部土層 (北西から)



(5) SK235完掘状況 (北東から)



(6) SK235・SD40西部土層 (南東から)



(7) SP35遺物出土状況 (北東から)



(8) SP173遺物出土状況 (南西から)



(1) SX 372・373検出状況1 (西上空から)



(2) SX 372・373検出状況2 (北西から)



(3) SX 372・373北端検出状況 (南から)



(4) SX 372南端土層 (北から)



(5) 近世墓群近景 (東上空から)



(6) ST 5掘削状況 (南西から)



(7) ST 6完掘状況 (北から)



(8) ST 8掘削状況 (東から)

図版 12



(1) ST9掘削状況 (西から)



(2) ST10掘削状況 (南から)



(3) ST11掘削状況 (東から)



(4) ST15掘削状況 (西から)



(5) 調査区隣接地の墓石転用石列 (南西から)



(6) SX175埋甕出土状況 (北東から)



(7) 断層跡検出状況 (西から)

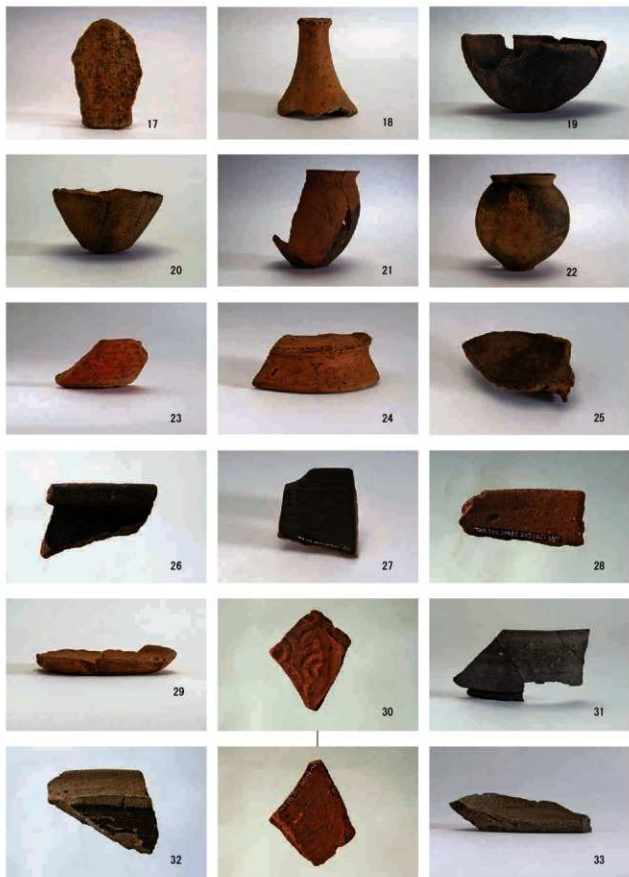


(8) 地割痕断面 (南東から)



出土遺物 1

图版 14

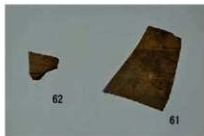


出土遺物 2



出土遺物 3

図版 16



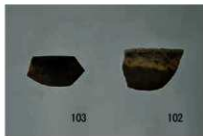
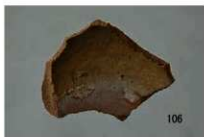
68





出土遺物 5

図版 18

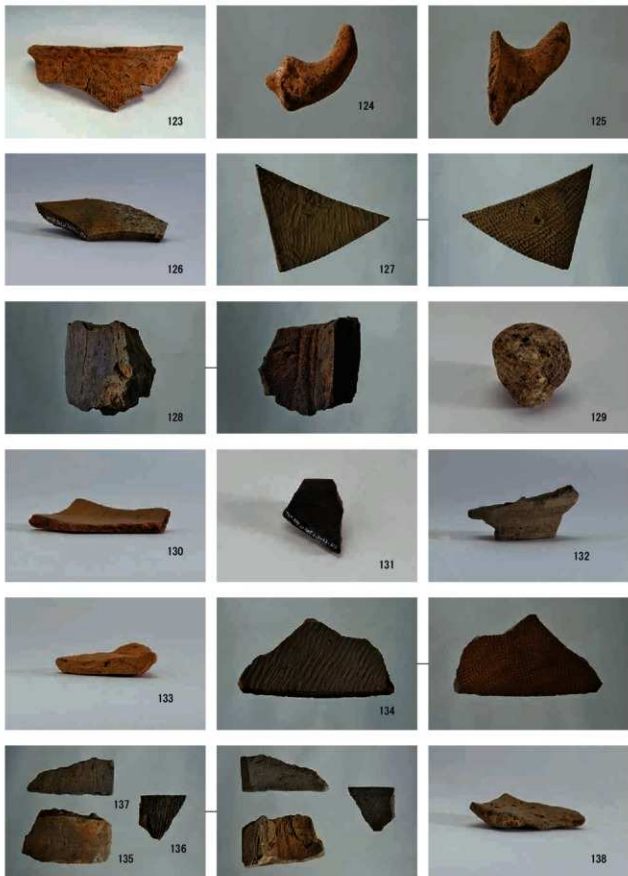


出土遺物 6



出土遺物 7

図版 20



出土遺物 8



出土遺物 9

図版 22

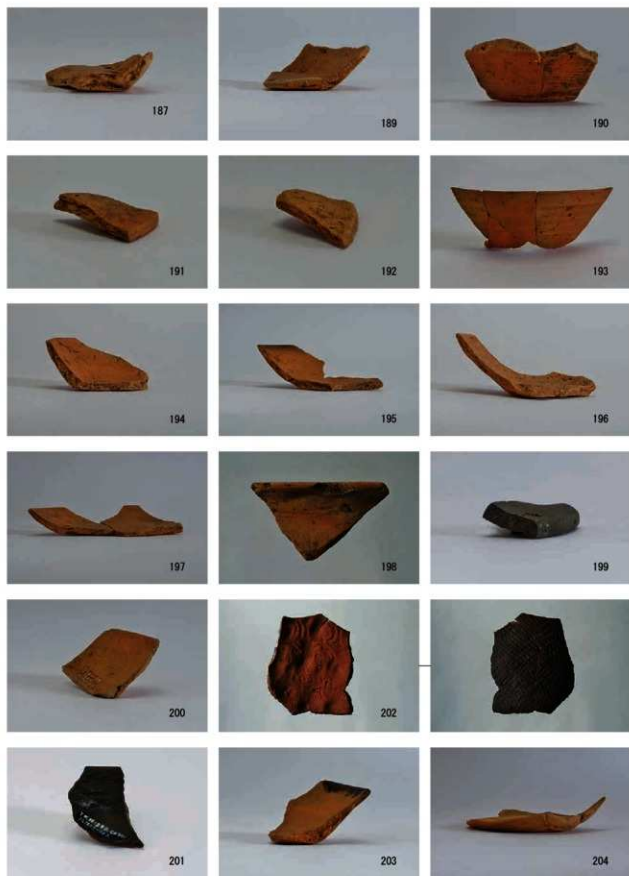


出土遺物10



出土遺物11

図版 24



出土遺物12



出土遺物13

図版 26



出土遺物14



出土遺物15

図版 28

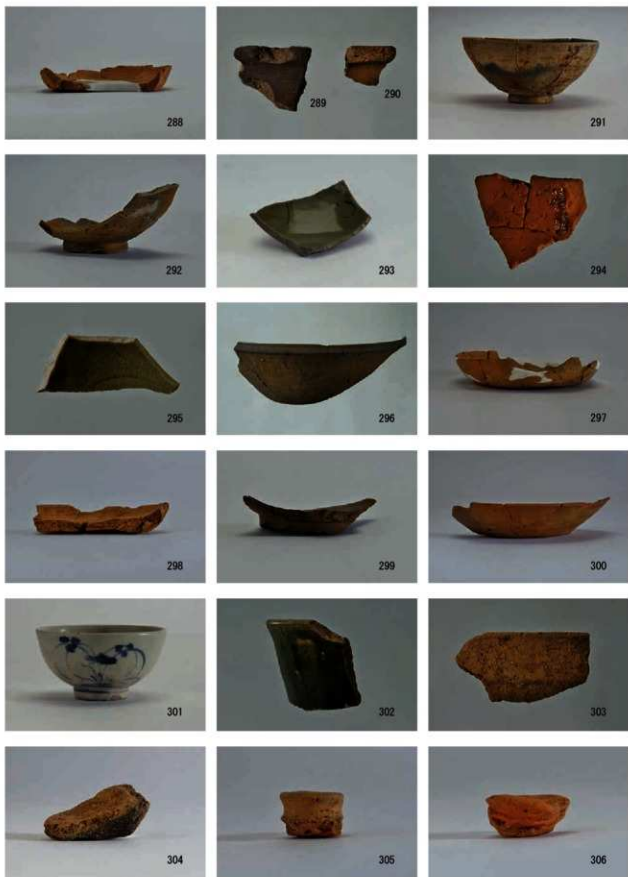


出土遺物16

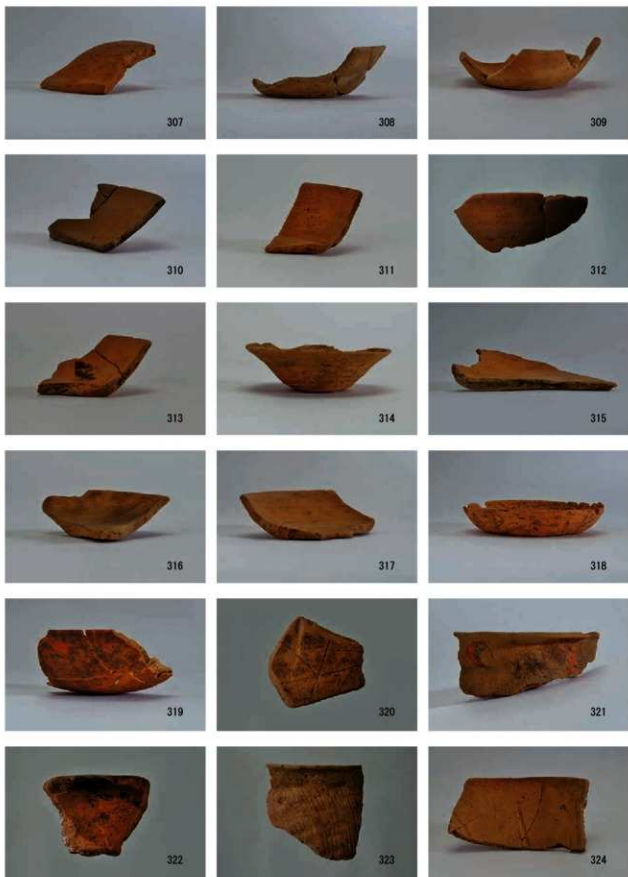


出土遺物17

図版 30

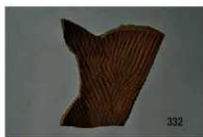


出土遺物18



出土遺物19

图版 32

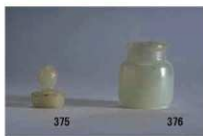
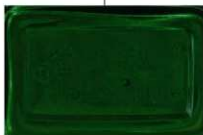




图版 34



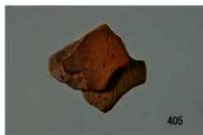
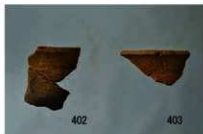
出土遺物22



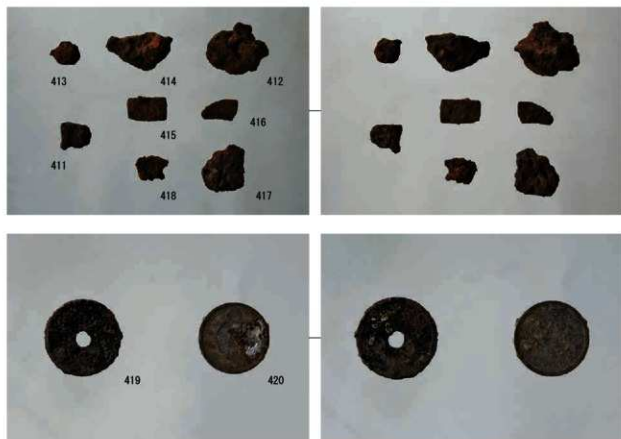
図版 36



出土遺物24



图版 38



出土遺物26

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちくごこくふあと 一だい298じはっくつちょうさほうこく一		
書 名	筑後国府跡 一第298次発掘調査報告一		
副 書 名	中環状道路整備事業『都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線』に伴う埋蔵文化財発掘調査(5)		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第437集		
編 著 者 名	西 拓巳		
編 集 機 関	久留米市 市民文化部 文化財保護課		
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 E-mail: bunkazai@city.kurume.lg.jp		
発行年月日	2022(令和4)年10月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごこくふあと 筑後国府跡 跡い じちふたす 第298次調査	ふくおかけんくまめしおひやまち 福岡県久留米市合川町 65-3、65-4、65-5、 65-6、66-3、66-4、 66-5	40203	30112	33° 18' 40"	130° 32' 22"	20200507 , 20201210	1,073㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
筑後国府跡 第298次調査	集落	弥生	堅穴建物 1基 土坑 1基	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、古瓦 土製品、石製品、金属製品、ガラス製品	古代～中世の道路跡とみられる溝と、波板状凹凸面を伴う古代の道路遺構を検出した。
		古代	欄列 1条		
			溝 16条		
		中世	道路遺構 1基		
			堅穴建物 1基		
		近世	土坑 4基		
			波板状凹凸面 1基		
		その他	硬化面 3基		
			溝 5条		
		土坑 2基			
		硬化面 2基			
土墳墓 8基					
埋甕 1基					
地震痕跡					

要 約

筑後国府跡は、高良山の麓の中位段丘から低位段丘に位置する、弥生時代から中世を中心とする遺跡である。調査地点は筑後国府跡の南西部、西上ノ原地区にあり、標高は約19mを測る。調査地点西隣を南北方向に走る道路は、字界を兼ねることなどから、古くからの道路、特に筑後国府と筑後国分寺を結ぶ道路である可能性が指摘されている。今回の発掘調査では、この道路に並走する古代と中世の溝を検出し、この道路が少なくとも古代まで遡る可能性を示した。さらに、この道路跡よりも古い段階の北西-南東方向の道路遺構も検出し、南北方向のみならず東西方向にも古道があったことが明らかとなった。

土木工事の通知日	平成19年6月12日	遺物の発見通知日	令和2年12月14日 (2文財第1897号)
----------	------------	----------	---------------------------

筑後国府跡

—第298次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第437集

令和4(2022)年10月31日 発行

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 永松印刷

久留米市中央町20-22